

研究紀要

第13号

2023

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団は、1992（平成4）年に新潟県が出資・設立の財団法人として発足しました。以来、高速自動車道・国道・北陸新幹線などに関連した遺跡の発掘調査を実施しております。平成8年10月には、新潟県埋蔵文化財センターが設立され、新潟県教育委員会の委託により当事業団が管理を行ってまいりました。2014（平成26）年度には、公益財団法人として再スタートを切り新潟県から指定管理を受け業務を行っております。

当事業団はセンター業務として、埋蔵文化財の調査・研究、整理・保存、情報収集、専門職員研修などのほか、発掘調査等で得られた情報を県民の皆様に還元する普及・啓発活動を行っております。「発掘調査報告会」、「企画展」、「新潟県埋蔵文化財センター講演会」、「少年少女考古学教室」のほか広報紙「埋文にいがた」の発行、発掘調査現場における「現地説明会」の開催などがその活動の代表的なものです。

近年、発掘調査の件数は横ばい傾向ですが、その一方でより高度な内容の調査と迅速な情報公開に基づいた発掘調査成果の発信が求められてきております。このため当事業団の職員は日々の業務に従事するかたわら、埋蔵文化財に携わる者としての社会的付託を意識し、自らの研鑽を積んでまいりました。その成果の一部を『研究紀要』として公表します。今後の調査・研究活動にご活用いただくとともに、皆様のご叱正をいただければ幸いと存じます。

最後に、本書の刊行にあたりご協力をいただいた関係各位に感謝申し上げますとともに、今後とも一層のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

2023（令和5）年3月

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
理事長 妹尾 浩志

目 次

沖積地から出土した縄文時代草創期資料 —上越市狐宮遺跡から出土した尖頭器の再検討—	1
	加 藤 学
田上町行屋崎遺跡出土の北関東型須恵器	13
	田 中 祐 樹
富山県東部の佐渡小泊産須恵器	19
	春 日 真 実
新潟県内の出土木製発火具の形態と用途について I —発火具の集成・火鑽板の分類—	33
	葭 原 佳 純

沖積地から出土した縄文時代草創期資料

—上越市狐宮遺跡から出土した尖頭器の再検討—

加 藤 学

1 はじめに

上越市狐宮遺跡は、高田平野の中央を北流する関川右岸の沖積地に立地する（第1・3・4図）。2005年の発掘調査成果については報告書が刊行されており、筆者は、縄文時代草創期の尖頭器の報告を担当した〔新潟県教育委員会ほか2007〕。発掘調査に携わっておらず、現地の様子を十分に把握していなかったものの、縄文時代草創期の遺物が沖積地から出土したことの意義は、極めて大きいと考えた。

その後、近隣の下割遺跡の発掘調査を担当することとなり、狐宮遺跡における縄文時代草創期資料の重要性を改めて認識した。本稿では、地質学的な背景も踏まえて、資料の位置付けについて再検討することとしたい。

2 狐宮遺跡の概要

狐宮遺跡は、上越市大字門田新田字江向147番地ほかに所在する。関川の支流・戸野目川右岸の自然堤防上に立地し、標高は7.8～8mである（第1～4図）。国道253号上越三和道路建設に伴い本発掘調査を行った結果、縄文時代後期・晩期、古墳時代中期、平安時代の遺構・遺物を検出した。中でも、地表下20～60cm前後のV層（第2図）^{（註1）}から、縄文時代後期前葉、晩期前葉・中葉の遺物が出土した点は特筆される。沖積地への進出が本格化する時期に当たるが、高田平野でも同様の状況を理解できる。遺構は検出されておらず、遺跡の具体的な性格は明らかでないが、低地利用の実態を知るうえで重要な情報といえる。本稿で取扱う縄文時代草創期の尖頭器は、後期前葉、晩期の遺物が出土したV層から出土しており^{（註2）}、ここから出土した背景について検討することとしたい。

3 狐宮遺跡の縄文時代草創期資料

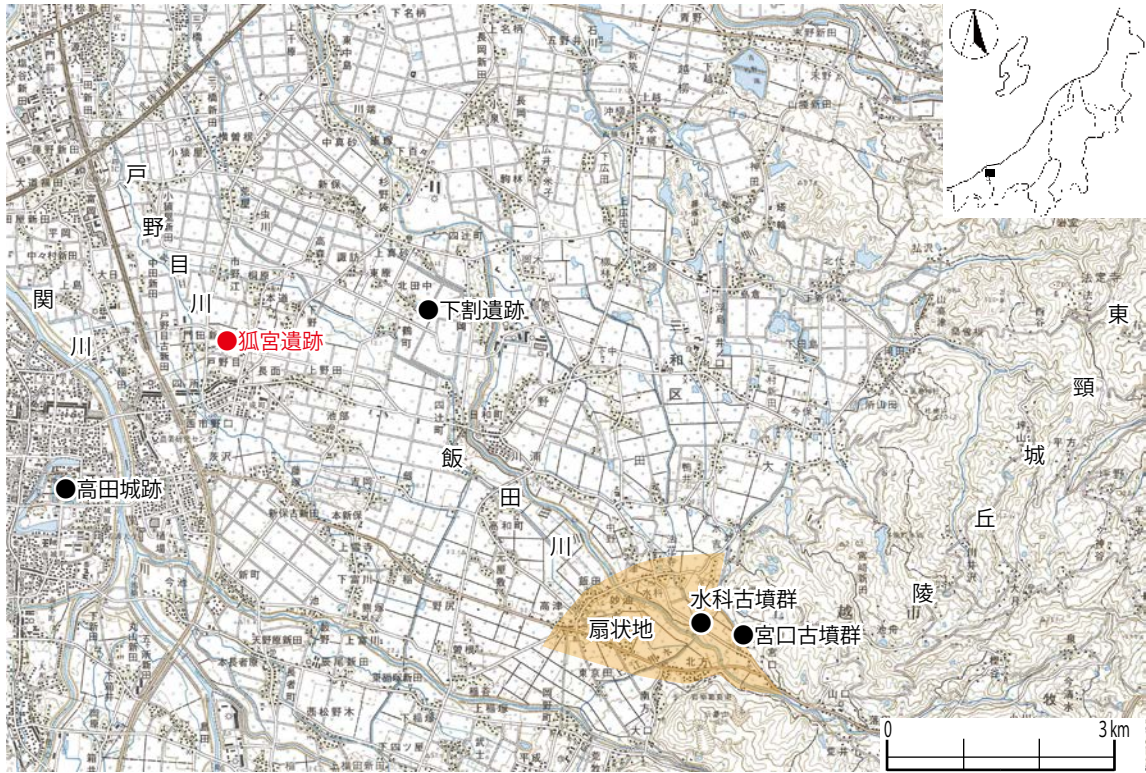
1) 資料の評価

狐宮遺跡から出土した縄文時代草創期の資料は、尖頭器2点である。

第5図1は、無斑晶ガラス質安山岩製の有舌尖頭器であり、長さ5.6cm、幅1.35cm、厚さ0.6cm、重さ3.64gを測る。舌部を欠損しているが、ほぼ全体像を把握することができ、有茎鏃とするには長手で薄手である。表裏面には精緻な二次加工が施されており、一部は器軸に対して斜方向の平行剥離が認められる。肩部はややなだらかであるが、舌部との明瞭な境界となっている。

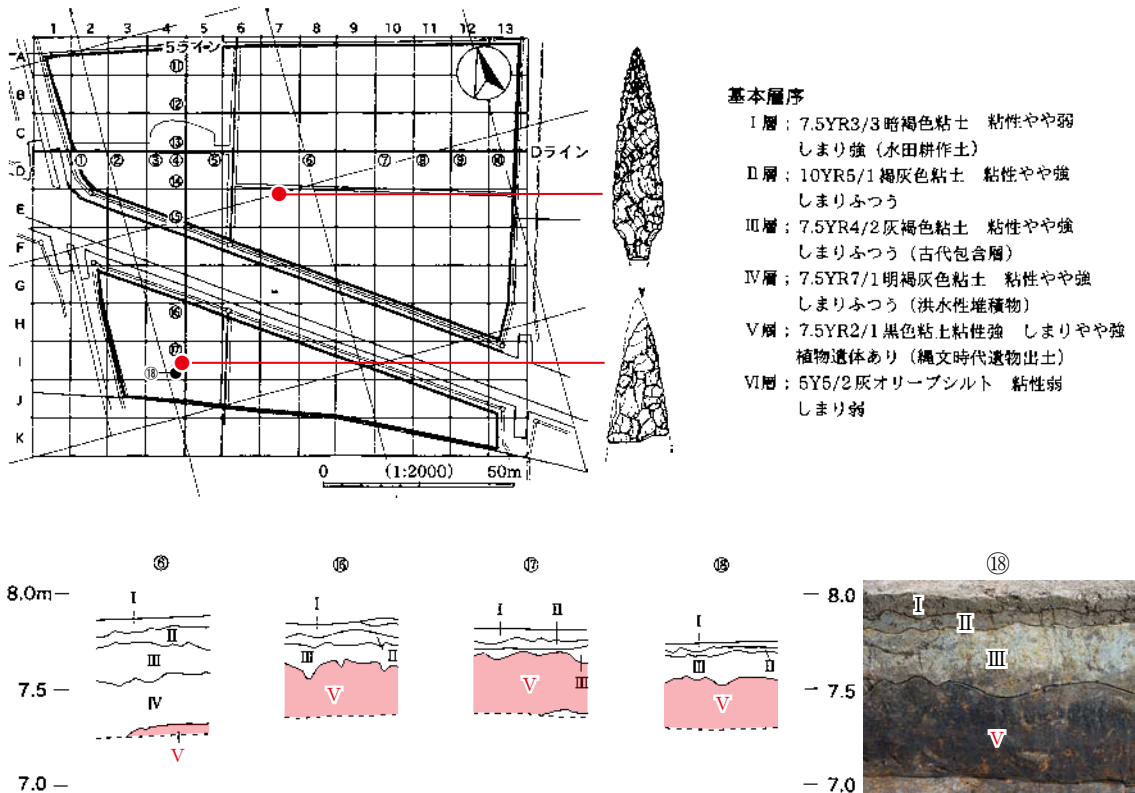
第5図2は、無斑晶ガラス質安山岩製の尖頭器である。現存部分の大きさは、長さ3.3cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ2.16gを測る。薄手で、精緻な二次加工が表裏面を覆っており、先端部には刺突時に生じた衝撃剥離痕〔御堂島1991〕が観察される。基部を大きく欠損しており全体像を把握できないが、第5図1のような細身ではない。より幅広・薄手であり、木葉形または柳葉形尖頭器の先端部と見られる。

この2点の尖頭器は、形態的特徴、剥離面の特徴、風化の状態を考えれば、縄文時代草創期の所産と見ることができる。少なくとも狐宮遺跡で確認されている縄文時代後期・晩期など、ほかの時期に帰属する



国土地理院発行平成19年「高田東部」1：50,000原図

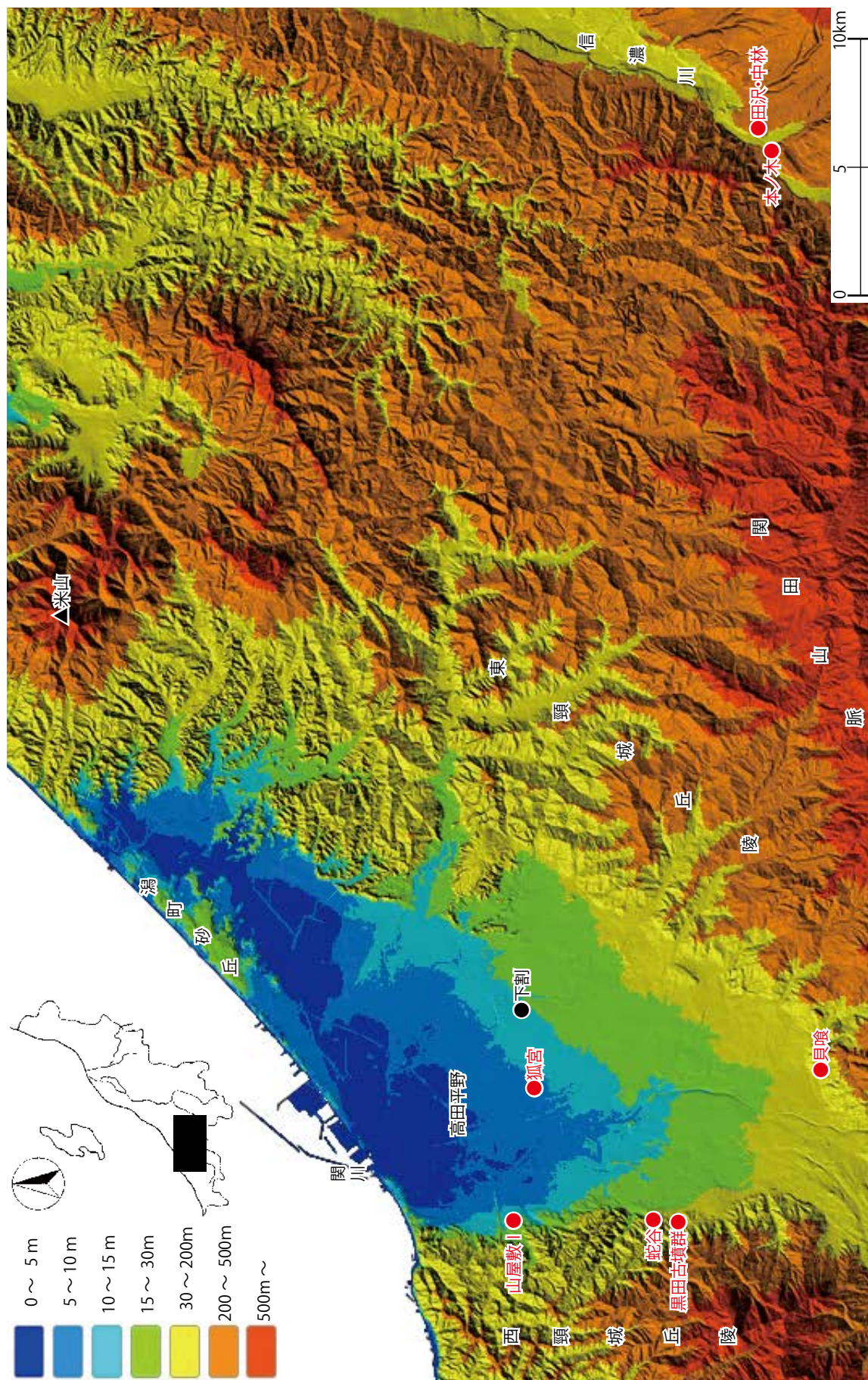
第1図 狐宮遺跡の位置と周辺の地形 (S=1：100,000)



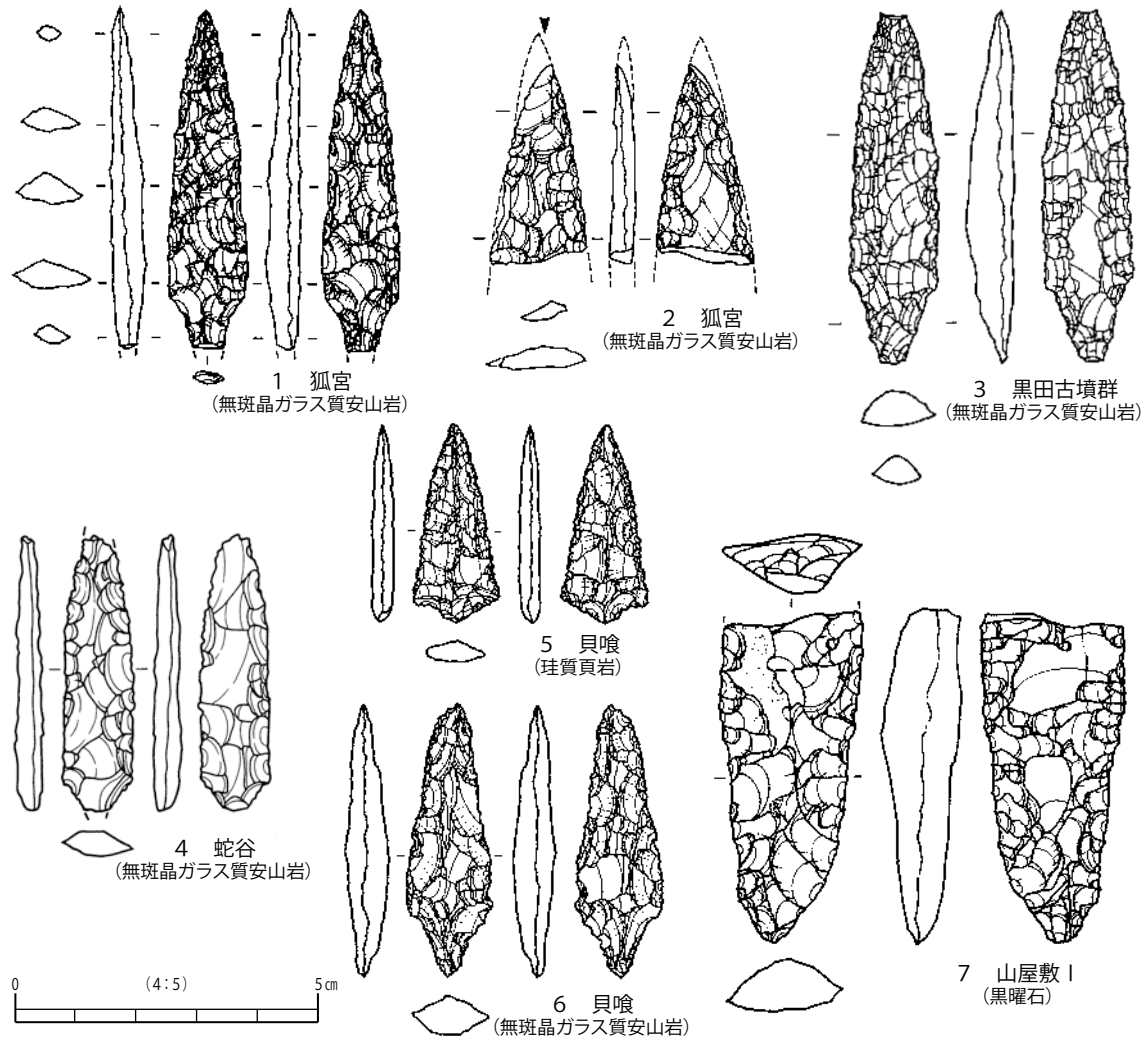
第2図 狐宮遺跡の基本層序と草創期資料の出土位置



第3図 高田平野周辺における縄文時代草創期の遺跡分布（1）（国土地理院撮影空中写真を一部改変）



第4図 高田平野周辺における縄文時代草創期の遺跡分布 (2) (国土地理院色別標高図を一部改変)



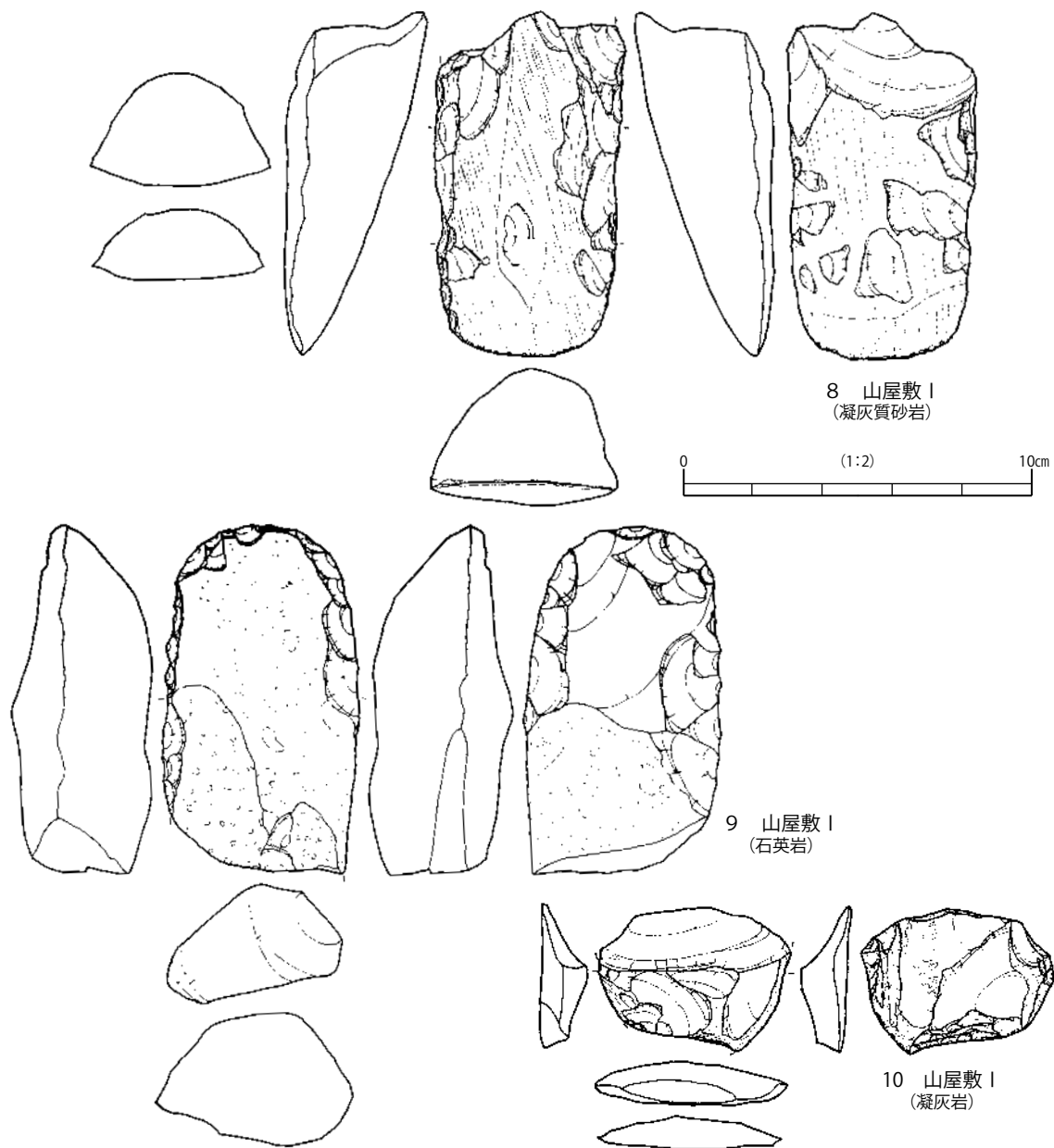
第5図 高田平野周辺出土の縄文時代草創期資料(1) (S=4/5)

とは考えられない。佐藤雅一 [2017] による尖頭器の変遷に関する検討を踏まえれば、隆起線土器段階以前の草創期前半期に位置付けられると考えたい。また、衝撃剥離痕や基端部の破損が認められることから、いずれも使用を経た資料と見られる。

石材が、無斑晶ガラス質安山岩であることも特徴的である。遺跡の西方を流れる関川を遡れば採取できる石材であり、魚沼層群に由来すると見られる。高田平野における草創期の尖頭器の多くは無斑晶ガラス質安山岩製であり(第5図)、狐宮遺跡における石材利用は、それらの状況と一致する。

2) 包含層準の年代

尖頭器2点は、いずれも縄文時代後期・晩期の土器が出土したV層から出土した。報告書では、V層の堆積年代を把握するため、土壌3点(IAAA-52355・52356・52357)を試料に放射性年代測定が行われており、非較正值で3,000~3,500年前という結果が得られている。おおむね遺物と一致する年代が得られており、V層の堆積年代を後期・晩期ころと考えることができる。すなわち、後期を遡る年代は得られておらず、草創期資料はV層の堆積年代を示していない可能性が高い。



第6図 高田平野周辺出土の縄文時代草創期資料(2) (S=1/2)

4 高田平野周辺における縄文時代草創期の遺跡

高田平野周辺では、数少ないながらも縄文時代草創期の資料が認められる〔澤田2004〕が、狐宮遺跡を除けば、いずれも丘陵先端部で出土している(第3・4図)。第4図に示した色別標高図からは、狐宮遺跡の立地の特異性を理解できる。

西頸城丘陵では山屋敷 I 遺跡で尖頭器 1 点と局部磨製石斧 3 点(第5図7・第6図8~10)〔立木2001・2003〕、黒田古墳群で有舌尖頭器 1 点(第5図3)〔新潟県教育委員会ほか2002〕、蛇谷遺跡で有舌尖頭器 1 点(第5図4)〔新潟県教育委員会ほか2005〕、東頸城丘陵では貝喰遺跡で有舌尖頭器 2 点(第5図5・6)〔岡本ほか2003、岡本・白井2017〕が報告されている(註3)。

丘陵上の遺跡においても、狐宮遺跡と同様に、尖頭器が単独で出土する事例が多いといえる。狩猟の場

に残された石器である可能性も考えられよう。一方、山屋敷Ⅰ遺跡については、尖頭器のほかに局部磨製石斧が3点出土しており、石器のまとまりを認めることができる。ほかの遺跡とは異質といえるものの、いずれも破損品であり、尖頭器の単独出土と同様に使用の場を示す可能性がある。

高田平野周辺の尖頭器の石材は、無斑晶ガラス質安山岩が多用されることが特徴的である。この石材は、平野の南東に広がる関田山脈を構成する魚沼層群の上・中部累層に転石として含まれるもの〔水嶋1973〕と見られる。関田山脈の南東側にあたる長野県栄村でも産出し、千曲川・信濃川上流域で直径50～30cmの原石を採取できる〔中村1986〕ことが広く知られているが、上越地域の産地はこれと一連で理解できる。また、地質学的位置付けは定かでないが、妙高山麓の上越市中郷区片貝川でも採取可能である〔加藤2000〕（註4）。

このような石材環境にあるものの、それを利用した草創期の石器製作跡は確認されていない。一方、関田山脈を挟んだ東側にあたる千曲川－信濃川上流域においては、本ノ木遺跡〔津南町教育委員会2016、佐藤信之2017、新潟県教育委員会2019〕、久保寺南遺跡〔中里村教育委員会2001〕、横倉遺跡〔神田・永峯1958〕（第3・4図）等で、無斑晶ガラス質安山岩が多用されている。

高田平野と千曲川－信濃川上流域の間には関田山脈が横たわるが、関田峠などの峠道を経て比較的容易に横断でき、両地域の往来を想定することは難しくない。高田平野周辺で出土した草創期の石器は、千曲川－信濃川上流域との関係も含めて検討する必要があるだろう。笠井洋祐・今井哲哉〔2021〕は、信濃川流域の石器製作遺跡と非製作遺跡の関係を広域的に検討し、下流域に消費遺跡が多いことを明らかにしているが、高田平野周辺の状況も、その脈絡で位置付けることができるのかもしれない。

5 狐宮遺跡と下割遺跡

1) 下割遺跡の埋没過程

狐宮遺跡の東方2.7kmに位置する下割遺跡（第1・3・4図）は、極めて重要な比較資料である。縄文時代後期前葉の遺跡が地下4mから検出されているが、遺物が単発的に出土するような状況ではない。明瞭な遺構が認められるなど、低地の生活様式を示すものと考えられる〔新潟県埋蔵文化財センター2022〕。狐宮遺跡の事例を考え合わせると、これは偶発的な存在ではなく、高田平野における低地利用を示す資料と評価できる。寺崎裕助〔2002a・b〕のいう「沖積地埋没型」の遺跡立地といえる。

一方、地下4mに埋没した背景について考える必要がある。沖積平野は、断層の活動や圧密などに起因する沈降と、河川が運搬した土砂の堆積の繰り返しにより形成されている。下割遺跡における縄文時代後期の遺構面についても、沈降と堆積を繰り返す過程を経て、地下4mという深部に埋没した可能性を想定できる。産業技術総合研究所〔2006〕によれば、高田平野東縁断層帯の上下変位速度は約0.9m/1000年であり、沈降の背景といえるかもしれない。しかし、平野のほぼ中央に位置する狐宮遺跡では、地下0.6mという浅い深度から縄文時代後期の遺跡を検出している。すなわち、狐宮遺跡では著しい沈降を認めることができず、ほかの要因を検討する必要があると考えた。

2) 狐宮遺跡と下割遺跡

沖積地から縄文時代後期前葉の資料が得られた狐宮遺跡と下割遺跡ではあるが、両者では検出状況が著しく異なる。縄文時代後期の深度は、下割遺跡で地下4m、狐宮遺跡で地下0.6mである。縄文時代後期以降の約4,000年間の堆積速度に大きな相違があることは明白である。堆積速度を単純に年平均に置き換えると、下割遺跡で1mm、狐宮遺跡では0.15mmとなる。この相違を検討するために、遺跡間の標高を比較

してみたい。

現地表面の標高は、狐宮遺跡が約8m、下割遺跡が約14mであり、その差は6mほどである。一方、縄文時代後期前葉の標高は、下割遺跡が約10m、狐宮遺跡が約7.5mで、標高差は2.5mほどしかない。縄文時代後期においては、遺跡間の傾斜が、現在よりも緩やかであった可能性がある（第7図）。縄文時代後期には、現在ほどの高低差はなく、その後の堆積量の相違により、埋没深度の違いが生じたと考えられよう。

すなわち、下割遺跡付近においては、縄文時代後期以降により多くの土砂が堆積し、その結果として地下深部に埋没したといえる。下割遺跡の東側を流れる飯田川を6kmほど遡ると、東頸城丘陵の縁辺に明瞭な扇状地が形成されている（第1図）。扇状地形成に伴う土砂の供給量が、より多い環境にあったと考えることができよう。一方、狐宮遺跡は、扇状地からより離れていることに加え、東頸城丘陵と直結した河川に面さないことから土砂の供給量が少なく、その結果として遺跡の深度が浅いといえる（第1・7図）（註5）。

したがって、両遺跡をめぐる縄文時代後期の深度の相違は、堆積環境の相違がより反映された結果と考えたい。飯田川の上流部に当たる東頸城丘陵は、不動地を捜すことが困難なほど地すべり地が集中しており〔永田ほか1974〕、このことは堆積速度の速さの一因と考えることができる。

6 高田平野における沖積層の層序区分と縄文時代草創期の深度

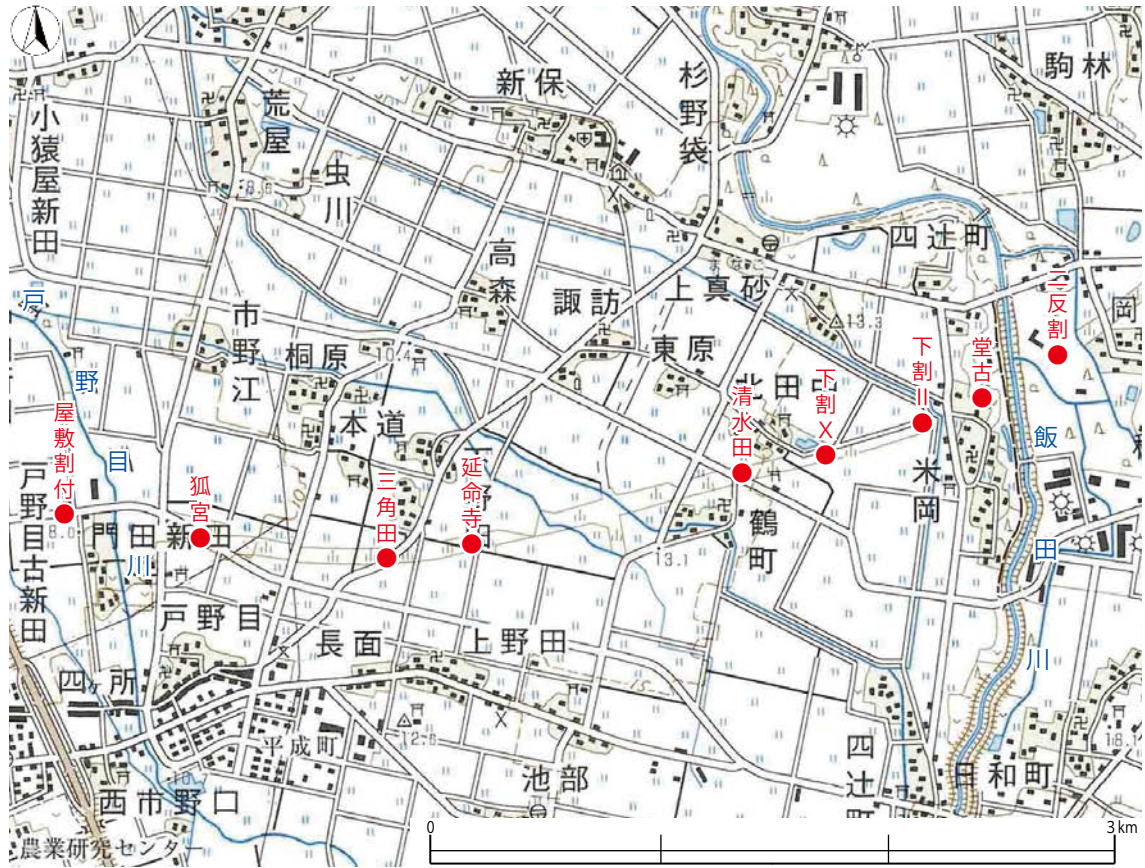
それでは、縄文時代草創期の深度は、どの程度であったのであろうか。

高田平野を形成する沖積層は、ボーリング調査の結果をもとに、高田礫層・高田層に区分されている（第8図）。高田礫層は、「最終氷期の海面低下期に形成された扇状地性の礫層」とされ、直上の放射性炭素年代測定では20,000年前（非較正值）の値が得られている。高田層は、「更新世後期の最終氷期2万年前以降の地層であり、晩氷期を経て完新世（1万年前以降）までの地層」とされ、更新世と完新世の「境界より下位の高田層を「下部高田層」、境界より上位の地層を「上部高田層」と定義されている〔長谷川2002〕。すなわち、本稿で課題とした縄文時代草創期は、下部高田層と上部高田層の境界付近に相当することになる。

長谷川正〔2002〕が作成した地質断面図を第8図下段に示した。狐宮遺跡に最も近い「寺」のボーリングデータを見ると、上部高田層と下部高田層の境界が地下30mほどとなっており、草創期の遺跡が存在するとすれば、その程度の深度であることが想定される。なお、この地点のボーリング調査では、放射性炭素年代測定が行われており、上部と下部の境界深度の妥当性が裏付けられている。

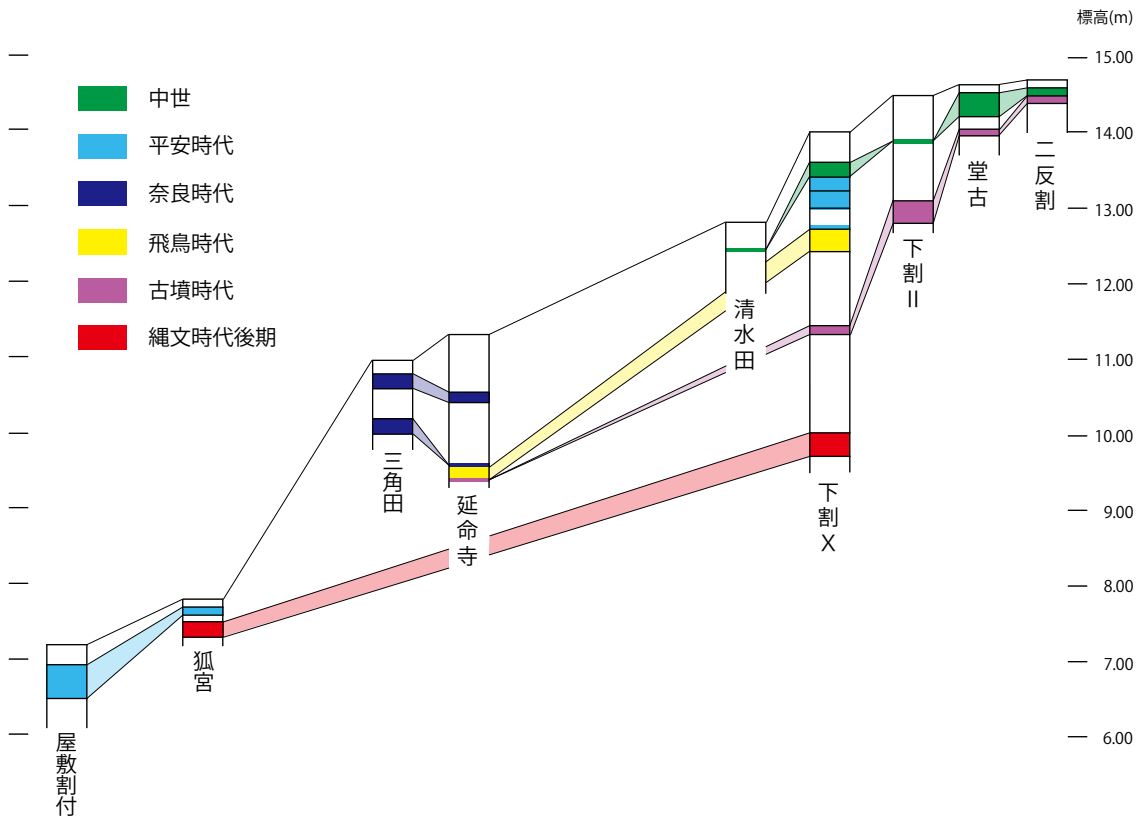
第8図上段右は、地質断面図をもとに復元された上部高田層下面の旧地形である。狐宮遺跡における上部高田層下面の標高を、この等高線から算出すると-17mほどであり、現地表面からの深度は25mほどとなる。いずれにしても発掘調査で掘削可能な深度から、草創期の遺跡が発見される可能性は極めて低いといえる（註6）。

また、仮に比較的浅い深度に草創期の遺跡が存在するのであれば、埋没した扇状地や丘陵先端の張り出しが存在し、その上の堆積物が浅いというような条件が必要となる。しかし、遺跡は沖積平野の中央に当たり、復元された旧地形（第8図上段右）からは、そのような条件を想定することはできない。

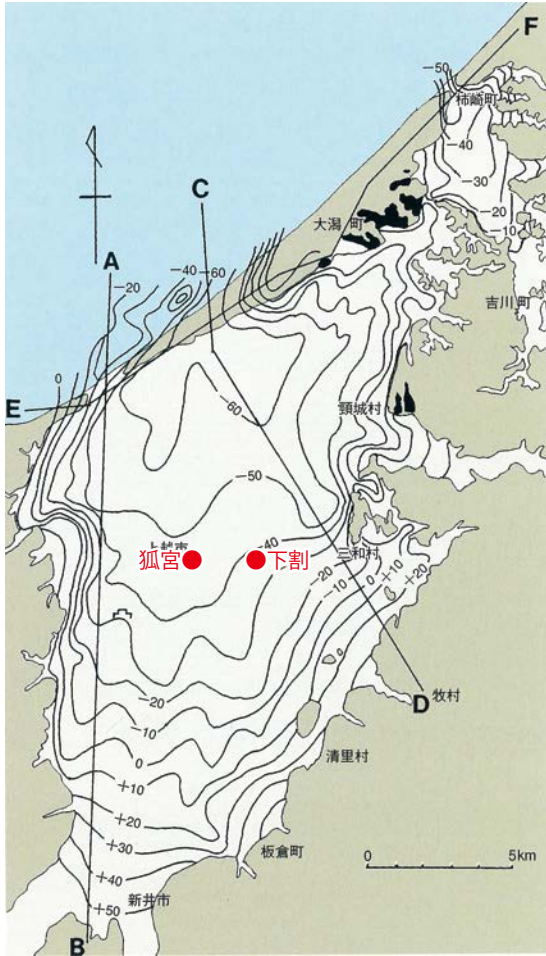


← 関川

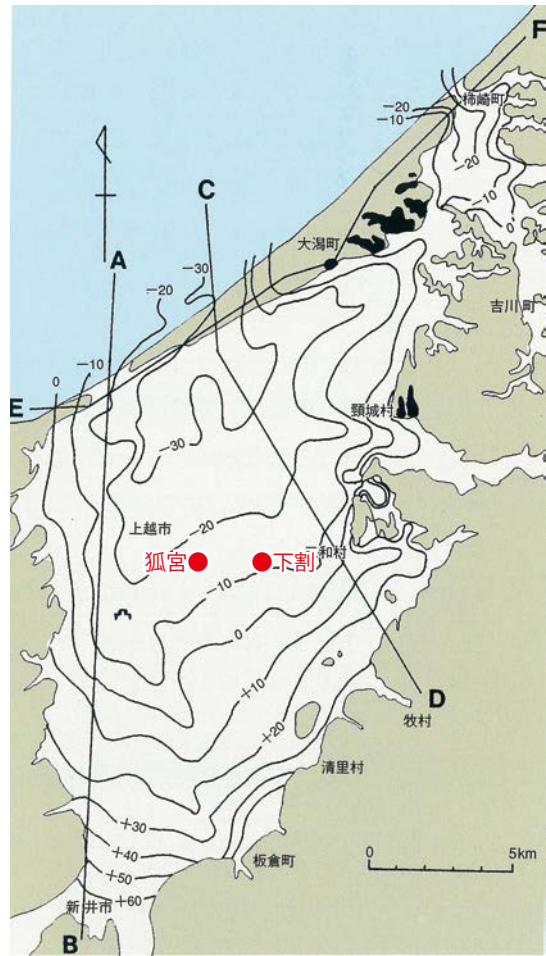
東頸城丘陵 ⇨



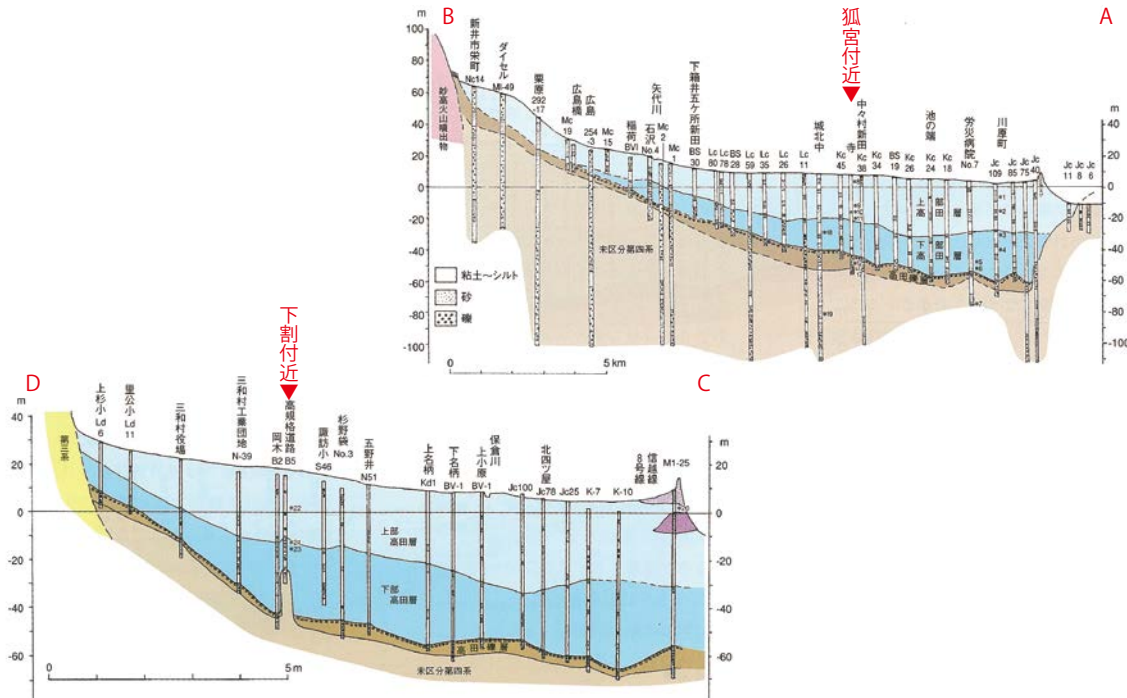
第7図 上越三和道路関連調査で発見された遺跡の深度
『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 令和4年度』掲載予定



高田礫層上位面の地形
数字は標高、単位はm



上部高田層下底面の地形
数字は標高、単位はm



ボーリング資料の解析による地質断面図

第8図 高田平野の古地形と地質断面図 (〔長谷川2002〕を一部改変)

7 おわりに ―草創期資料が混在した背景―

以上のように、狐宮遺跡における縄文時代後期の地層が浅い深度から発見された背景は、堆積環境に由来すると考えた。一方、草創期に相当する層準は、地下25～30mという深部に存在することが想定される。すなわち、後期と草創期の深度が大きく異なることは明らかであり、後期の包含層中またはその前後の地層に、草創期資料が一次堆積物として混入することは考えられない。また、後世の人為的な攪拌等により、草創期資料が当時の地表に持ち上げられたケースも想定できるが、それを想定できる深度に草創期相当層が存在するとは考えられない。すなわち、草創期資料は、何らかの要因で二次的に混入したと考えざるを得ない(註7)。二次的な混入の背景として、自然的要因と人為的要因を想定できる。

自然的要因は、洪水などにより運搬されたことが考えられるが、遺物にはローリングによる摩耗は認められない。また、堆積物に礫などを含んでおらず、遺物を遠方から運搬するほどのエネルギーを伴う洪水の影響を受けたとは考えられない。したがって、自然的要因による混入は、極めて考えにくい状況にある。

人為的要因は、後世に運び込まれたことが考えられる。包含層準の年代を踏まえれば、縄文時代後期・晩期に遺跡を築いた人々が、丘陵で草創期の尖頭器を採集し、それを狐宮遺跡に持ち込んだと想定できる(註8)。検証は困難であるが、得られている情報を整理すると、このように理解するのが最も合理的である。

そうであれば草創期の尖頭器は、縄文時代後期・晩期における丘陵での活動を示すこととなり、沖積地と丘陵を往来したことを示唆するものといえる。活動拠点が、丘陵と沖積地のどちらにあったのか、現状では判断できないが、丘陵上に拠点があり、そこに草創期の遺跡が重複していれば、稀有な存在である尖頭器が、複数持ち込まれた背景を説明できる。

屋上屋を架す想定にはなるが、沖積地から出土した縄文時代草創期の尖頭器は、縄文時代後期・晩期の遺跡形成や行動領域について、様々な課題を示唆する資料といえるのかもしれない。

註

- (1) 報告書に出土地点の深度に関する記録はないが、最も近い地点の基本層序(第2図)を見ると、有舌尖頭器(第5図1)が出土した付近に当たる⑥では60cm、尖頭器(第5図2)が出土した付近に当たる⑰⑱では20～40cmほどである。V層の深度は、地点によって異なり、かつては凹凸のある地形であったと見られる。
- (2) 報告書では、基本層序の記載でV層出土、遺物の記載及び観察表でⅢ層・Ⅳ層出土となっている。調査担当者に確認したところ、V層出土との認識であり、層位認識の変更などが反映されていなかったと見られる。
- (3) 貝喰遺跡の有舌尖頭器2点については板倉町史編さん時に実見し、筆者は草創期の資料と考えた。この所見を踏まえ、『板倉町史』を執筆した岡本郁栄ほか[2003]は、有舌尖頭器と報告している。その後、同資料は岡本郁栄・白井雅明[2017]による再実測を経て、石鏃と再評価されているが、筆者の所見に変更はなく、現在でも有舌尖頭器と考えている。また、2017年報告では、この2点のほかにも草創期の尖頭器である可能性がある石器が「石鏃」として提示されているが、資料を実見していないので、評価は保留しておきたい。なお、貝喰遺跡からは、有舌尖頭器のほかにも北方系の細石刃核が報告されており、旧石器時代終末から縄文時代開始期の重要な遺跡が埋没している可能性がある。
- (4) 妙高山麓では、表層が火砕流堆積物に厚く覆われているため、基本的には火砕流に含まれる粗粒の火山岩しか採取できない。このような状況にあるものの、片貝川のみで堆積岩(頁岩・砂岩・チャート)や無斑晶ガラス質安山岩が認められる。火砕流堆積物中には存在し得ない石材構成であり、表層では観察できない基盤層に由来すると見られる。石材構成は関田山脈における河川の状況とよく似ており、火砕流下に魚沼層群が埋没している可能性がある。
- (5) 第7図は、上越三和道路建設に伴い発掘調査が行われた遺跡の深度をとりまとめたものである。現地表より縄文時代後期の方が、傾斜が緩やかであったと見られる。また、①狐宮遺跡と三角田遺跡の間、②清水田遺跡と下割遺跡Xの間に傾斜変換点が認められるが、そこを境に遺跡の年代に差が認められる。①より東側では飛鳥時代・奈良時代、②より東側では古墳時代・中世の遺跡が特徴的に認められる。堆積の進行により微高地が形成されたことを受けて、新たな土地利用が始まったことを示しているのかもしれない。

- (6) 沖積平野が広がる新潟県においては、地下深部に埋没した遺跡の発掘調査事例が多い。例えば、新発田市青田遺跡の川跡では最大で地下6m [新潟県教育委員会ほか2004a]、下割遺跡では地下4m [新潟県埋蔵文化財センター2022a] まで調査しているが、この掘削深度では草創期相当層に届かない。沖積平野で草創期相当層に手が届くとすれば、丘陵の縁辺部など、沈降・堆積の速度が遅い範囲に限られる。
- (7) 報告書では、丘陵上でも稀有な存在である尖頭器が複数出土したこと、表面が摩耗していないことから、二次堆積物でないと考えたが、本稿の検討をもって所見を修正する。
- (8) 村上市アチャ平遺跡では、段丘形成以前の年代を示す細石刃核の出土が報告されているが [朝日村教育委員会2002]、これも後世の人為的な搬入による可能性がある。地形の形成年代から、その存在を合理的に説明できない資料であることが指摘された数少ない事例であり、狐宮遺跡の類例といえる。

引用・参考文献

- 朝日村教育委員会 2002『朝日村文化財調査報告書 第21集 アチャ平遺跡上段』
- 岡本郁栄・秦 繁治・小林義廣・大平理恵 2003「第二編 通史 原始・古代」『板倉町史 資料編』板倉町 pp.1-130
- 岡本郁栄・白井雅明 2017「上越市板倉区貝喰遺跡採集の細石刃核と石鏃」『新潟考古』第28号 新潟県考古学会 pp.71-76
- 笠井洋祐・今井哲哉 2021「千曲川—信濃川流域の種子柴・長者久保石器群」『千曲川—信濃川流域の先史文化』津南町教育委員会 pp.175-191
- 加藤 学 2000「縄文時代における石器形態と使用石材—新潟県和泉A遺跡下層出土石器群の実践的検討—」『石器に学ぶ』第3号 石器に学ぶ会 pp.55-86
- 神田五六・永峯光一 1958「奥信濃・横倉遺跡」『石器時代』5 石器時代文化研究会 pp.48-55
- 佐藤信之 2017「本ノ木遺跡における石材利用及び遺跡周辺の石材環境について」『座談会 60年目の本ノ木遺跡—要旨集—』津南学叢書 第31輯 津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会 pp.125-128
- 佐藤雅一 2017「信濃川流域における尖頭器石器群の様相」『座談会 60年目の本ノ木遺跡—要旨集—』津南学叢書 第31輯 津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会 pp.65-124
- 澤田 敦 2004「第二編 原始 第一章 旧石器時代」『上越市史 通史編1 自然・原始・古代』上越市 pp.198-214
- 産業技術総合研究所 2006「高田平野断層帯の活動性および活動履歴調査」『「基礎的調査観測対象断層帯の追加・補完調査」成果報告書No.H17-2』独立行政法人産業技術総合研究所
- 立木宏明 2001「上越市山屋敷I遺跡出土の局部磨製石斧二例」『上越市史研究』第6号 上越市 pp.87-88
- 立木宏明 2003「17 山屋敷I遺跡 縄文時代草創期の石器」『上越市史 資料編2 考古』上越市 pp.135-142
- 津南町教育委員会 2016『本ノ木遺跡第一次・二次発掘調査報告書—山内清男資料整理報告—』津南町文化財調査報告書 第70輯
- 寺崎裕助 2002a「新潟平野の遺跡」『新潟考古学談話会会報』第24号 新潟考古学談話会 pp.1-7
- 寺崎裕助 2002b「沖積地における縄文時代遺跡の調査」『新潟考古』第13号 新潟県考古学会 pp.1-6
- 中里村教育委員会 2001『久保寺南遺跡』中里村文化財調査報告書 第9輯
- 永田 聡・神田 章・馬場一雄・須田光治 1974「新潟県の地すべり分布と地形について」『地すべり』11(3) 日本地すべり学会 pp.19-22
- 中村由克 1986「野尻湖・信濃川上流域の旧石器時代遺跡群と石器石材」『信濃』第38巻第4号 信濃史学会 pp.237-252
- 新潟県教育委員会 2019『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第284集 本ノ木・田沢遺跡群総括報告書』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2002『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第111集 黒田古墳群』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2004a『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第133集 青田遺跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2004b『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第134集 下割遺跡II』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第151集 蛇谷遺跡・炭山遺跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第154集 三角田遺跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2007『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第171集 狐宮遺跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2008『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第201集 延命寺遺跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2012『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第236集 二反割遺跡・延命寺遺跡II』
- 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第251集 清水田遺跡』
- 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2017『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第269集 堂古遺跡・下割遺跡VI・二反割遺跡II』
- 新潟県埋蔵文化財センター 2022「下割遺跡—高田平野の縄文集落—」『発掘!新潟の遺跡2021』
- 長谷川正 2002「第1章 地形・地質 第3節 上越市と周辺地域の地質 1 沖積平野と大地の地質 (1) 沖積平野の地質」『上越市史資料編1 自然』上越市 pp.53-61
- 水嶋陸男 1973「つめ石に学ぶ」『国土と教育』3(6) 築地書館 pp.259-263
- 御堂島正 1991「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離」『古代』第92号 早稲田大学考古学研究会 pp.79-97

田上町行屋崎遺跡出土の北関東型須恵器

田中 祐樹

1 はじめに

これまで筆者は、田上町行屋崎遺跡にかんする研究を継続的に進めてきた（田中2018・2019ほか）。これまでの取り組みのキーワードの一つが「移民」であり、即ち、考古資料の分析を通じて「移民のムラ」としての行屋崎遺跡の具体像を素描することを目標としている。小稿はその取り組みの一つとして、本遺跡から出土した北関東型須恵器と推定される資料について紹介する。

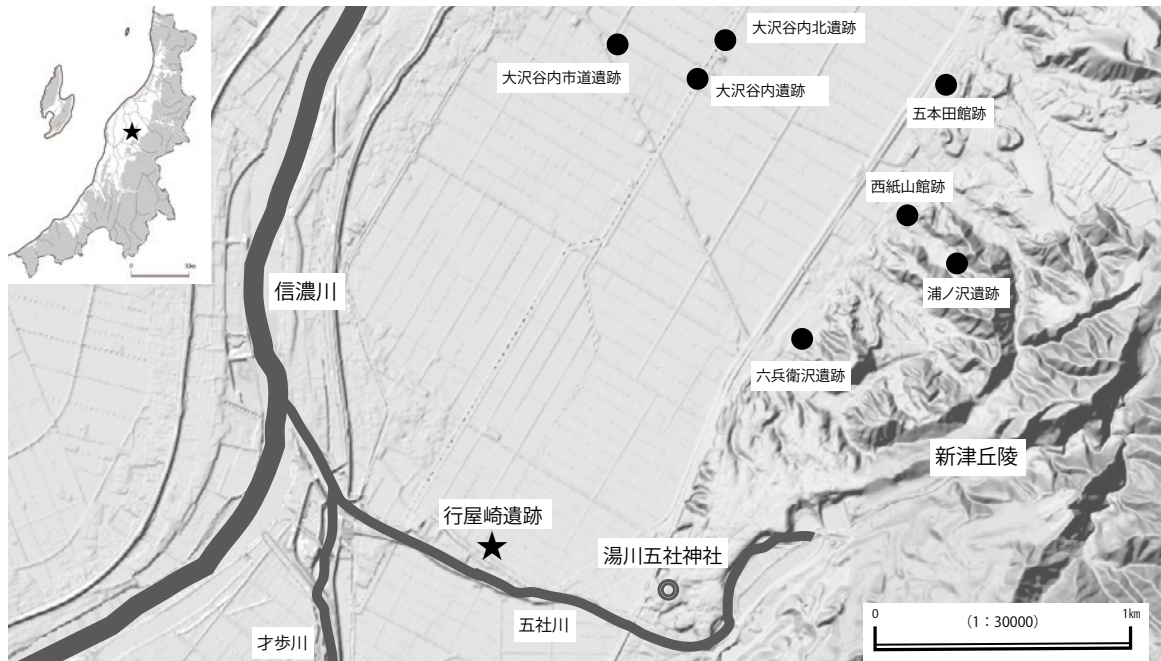
2 行屋崎遺跡の概要と遺跡の評価

行屋崎遺跡は、新津丘陵を望む五社川右岸の自然堤防及び、旧五社川流路に所在する（第1図）。平成24（2012）年に、一般国道403号道路改築工事に伴う試掘確認調査で、土坑、ピットといった遺構と9世紀代の土師器や木製品が確認されたことから新発見遺跡「行屋崎遺跡」が登録されている。この試掘確認調査の結果を受けて、翌年5月から、田上町教育委員会による本発掘調査が実施されている（田畑ほか2015）。調査では、旧五社川流路であるSR400と、その北側の自然堤防上に展開する掘立柱建物を中心とした集落域を確認しており、帰属時期が概ね飛鳥Ⅲ段階であることが明らかになっている。

飛鳥時代の遺構は、五社川旧流路（SR400）、掘立柱建物16棟、溝11条、土坑129基、ピット300基、杭28基である。遺物は、五社川旧流路（SR400）を中心に、土器（須恵器、土師器）、石製品（紡錘車、権状錘、砥石、凹石）、木製品（農耕具、把手付槽、丸木弓、皿等）、金属製品（銅鈴、雁股鎌、錫製耳環、鉄斧、鉄製鏝）、土製品（羽口、人形土製品、馬形土製品、円筒形土製品、板状土製品、移動式カマド）が出土している。

このように行屋崎遺跡では、多様な出土遺物が認められるが、特筆すべきなのは一般的な農耕具が少なく、儀礼祭祀色の強い遺物が目立つ点である。行屋崎遺跡に近接するほぼ同時期の集落遺跡である新潟市大沢谷内遺跡（前山ほか2012）が、律令的祭祀色が強いのに対し、古墳時代的な様相を多分に留める構成といえる。このような点から、一般的な農業生産に依拠した集落ではなく、製鉄・鉄器生産、木器生産といった手工業生産を生業とした集落との評価がある（田畑ほか2015）。筆者は、城柵設置前後の新潟県内における外来系土器を「東北北部系（北方系）」・「東北南部系（栗田式）」・「関東系」に峻別し、分析を行う中で、行屋崎遺跡の土器についても検討をおこなっている。行屋崎遺跡のヘラ削り整形の小型台付甕2点を関東系、有段の杯・高杯や脚部に透かしを施した須恵器模倣高杯を東北南部要素を持つ土器としたほか、東北系全般にみられる要素を持つ土器として、頸部を巡る段をもつ甕や、底部側面が著しく張り出す甕、底面に木葉痕を持つ土器を挙げた。また、透かし入り高杯が太平洋側の城柵官衙関連遺跡から出土する傾向が強いことを含め、集落の中に柵造営に伴い東北南部から政策的に動員された「移民」が含まれていた可能性を指摘する（田中2018、2019）。

さらに遺跡周辺に目を転じてみると、行屋崎遺跡の北東約1.8kmには前述した新潟市大沢谷内遺跡、丘陵上では平安時代の須恵器窯跡である六兵衛沢遺跡、中世城館の西紙山館跡などが所在する。



第1図 行屋崎遺跡の位置と周辺遺跡

3 北関東型須恵器について

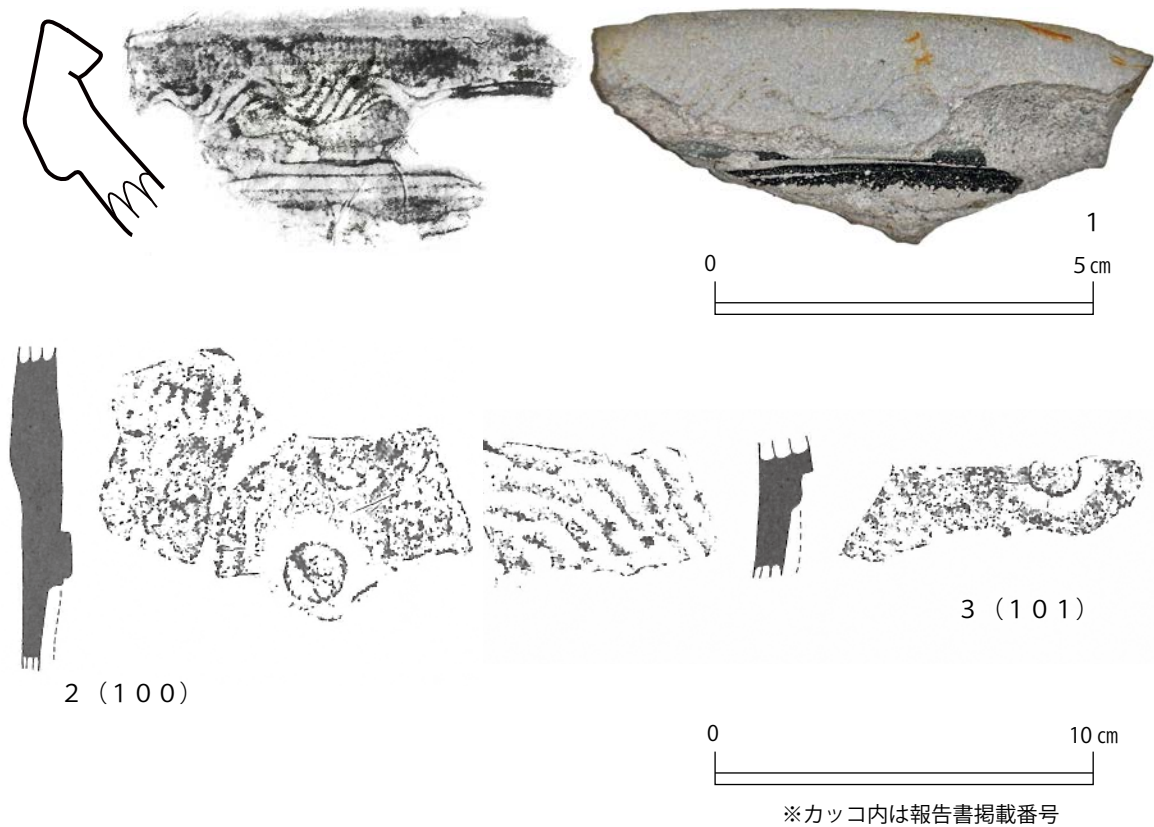
本用語は、群馬県域を中心とする北関東地域において散見される特徴的な形態を有する須恵器の総称であり、酒井清治によって見出された（酒井1988、1991ほか）。その後、酒井の研究を継承した藤野一之によって再検討がなされており、その特徴は第1表のとおり整理できる。北関東系須恵器の分布域において最も早くその特徴を見出せる資料は群馬県域であることから、その特徴は群馬県域で成立し、近隣地域への製品、技術の拡散したことが指摘されている（藤野2009、2019）。

第1表 北関東型須恵器の特徴

器種	特徴	時期（藤野編年）	主な出土遺跡
蓋坏	「八」の字状口縁部坏蓋	Ⅳ期～	綿貫観音山古墳（群馬県高崎市）
	手持ちヘラ削り	Ⅴ期～	入宿遺跡（群馬県太田市）
	受け部の短い坏身	Ⅲ期～	黒井峯遺跡（群馬県渋川市）
高坏	1段透かしの残存	～Ⅴ期	菅ノ沢窯（群馬県太田市）
	脚端部の開く高坏	Ⅱ期～	築瀬二子塚古墳（群馬県安中市）
	交互透かし	Ⅲ期～	黒井峯遺跡（群馬県渋川市）
ハソウ	肩部に凸線が巡るハソウ	Ⅰ～Ⅴ期	井出二子塚古墳（群馬県高崎市）
	樽形ハソウの残存	～Ⅳ期	館野遺跡（群馬県渋川市）
提瓶	絞り技法	Ⅱ期orⅢ期～	金山窯（群馬県太田市）
	環状把手の残存	Ⅱ期～Ⅶ期	金山窯（群馬県太田市）
	平底瓶	Ⅱ期～	恵下古墳（群馬県伊勢崎市）
壺	脚付長頸壺の存在	Ⅴ期	綿貫観音山古墳（群馬県高崎市）
甕	補強帯	Ⅳ期～	菅ノ沢窯（群馬県太田市）
	口唇部波状文	Ⅳ期～	井出二子塚古墳（群馬県高崎市）
	口縁部内波状文	Ⅳ期～	綿貫観音山古墳（群馬県高崎市）
	格子文の叩き具	Ⅴ期～	中筋遺跡（群馬県渋川市）
	渦巻き文の当て具	-	引切塚遺跡（群馬県前橋市）
	ラセンナデ	Ⅰ～Ⅳ期	白藤古墳群（群馬県前橋市）

第2表 参考 編年表 (藤野2019)

時 期	概 要	年代比定	主な出土資料
I 期	群馬県内での須恵器生産開始	TK47	三ツ寺遺跡 (群馬県高崎市)
II 期	提瓶・平底瓶の生産開始 群馬県内での横穴式石室導入	MT15	前二子古墳 (群馬県前橋市) 恵下古墳 (群馬県伊勢崎市)
III 期	横瓶の出現か	TK10 (古)	久保遺跡 (群馬県富岡市) 伊熊古墳 (群馬県渋川市)
IV 期	Hr-FP	TK10 (新)	黒井峯遺跡 (群馬県渋川市)
V 期	大型器台の生産停止	TK43	菅ノ沢窯 (群馬県太田市) 綿貫観音山古墳 (群馬県高崎市)
VI 期	平瓶の出現か	TK209	八幡観音塚古墳 (群馬県高崎市)
VII 期	坏Gの出現	飛鳥 I	奥原古墳群 (群馬県高崎市)



第2図 行屋崎遺跡出土の北関東型須恵器

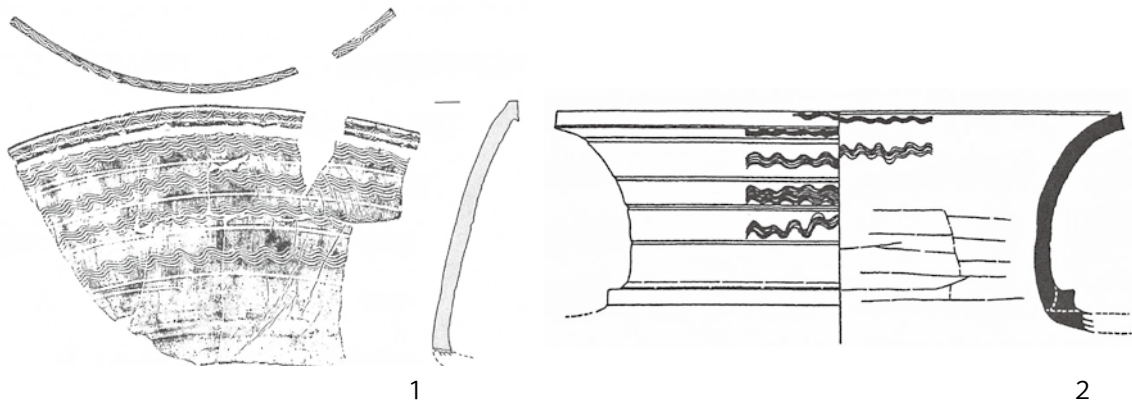
4 資料の概要

4-1 口縁部に波状文を持つ須恵器甕 (第2図-1)

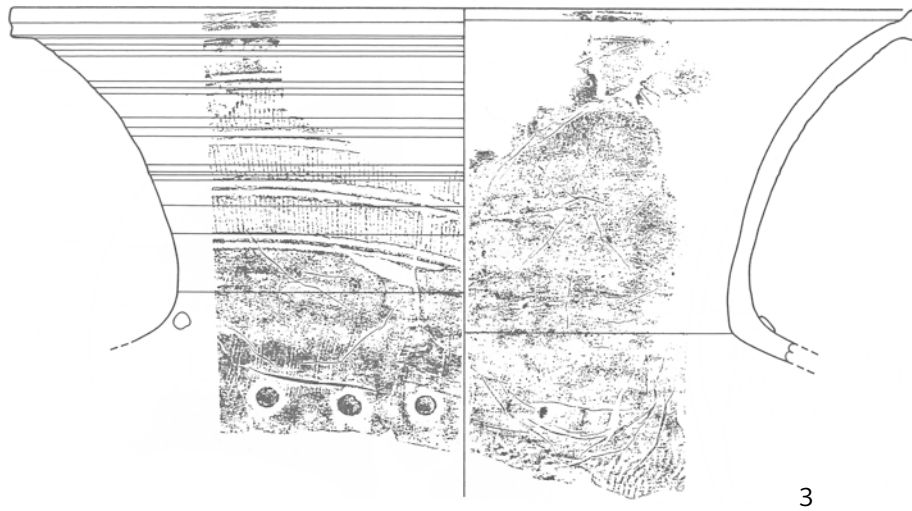
飛鳥時代の自然流路であるSR400出土の須恵器甕の口縁部である。二条の沈線から上位の口縁部端部(口唇部)に4条の波状文が描かれる。小片のため時期比定は困難だが、SR400出土資料の大半が7世紀第ⅢⅣ半期に位置づけられることから、本資料も概期の所産と考えられる。この口唇部外面の波状文という特徴は、北関東型須恵器にも散見されるもので、類例としては、群馬県高崎市井出二子山古墳(高崎市教育委員会2009)、茨城県筑西市丑塚Ⅲ号墳(協和町小栗地内遺跡調査会1986)などがある(第3図)。

4-2 外面肩部に円形浮文をもつ須恵器甕（第2図-2・3）

肩部に円形の浮文（ボタン状貼り付け）が確認される。いずれも外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が残る。小片のため詳細な時期比定は困難であるが、飛鳥時代の包含層であるⅡC層出土なので飛鳥時代に帰属する可能性が高い。この肩部外面に円形浮文という特徴は、酒井清治や藤野一之らが提唱する北関東型須恵器の特徴には該当していないが、既に奈良佳子が指摘するように、同様の特徴を持つ資料が群馬県高崎市少林山台遺跡（飯塚・徳江1993）から出土している（奈良2022）（第3図）。さらに、少林山台遺跡の須恵器は群馬県高崎市乗附窯跡群の製品の可能性が高いという奈良の指摘を踏まえ、北関東型須恵器の範疇で把握すべきと考える。



1 口縁部上端に波状文を有する須恵器甕



3 肩部外面に円形浮文を有する須恵器甕

- 1：丑塚古墳群Ⅲ号墳石室周辺
- 2：埼玉県神川町No.200古墳
- 3：少林山台遺跡
- ※いずれも縮尺不同

第3図 北関東型須恵器の類例

6 まとめにかえて－今後の課題－

小稿では行屋崎遺跡から出土した北関東型須恵器と考えられる須恵器3点について、その概要を述べた。管見ではこれまで新潟県域で明確な北関東型須恵器の出土例は確認されておらず、新潟県域で初めて北関東型須恵器が確認されたことになる。行屋崎遺跡では、東北系土器（田中2018、2019）、関東系土器（田中2019）に代表される外来系土器の出土が目立つことがこれまでの調査研究で明らかになりつつあるが、小稿で取り上げた北関東型須恵器の存在もそれを裏付ける証拠の一つと捉えている。引き続き地道な資料検索をおこなうと共に、越後の7世紀後半、すなわち城柵造営前後の時期に「移民のムラ」として行屋崎遺跡が担ったであろう、その役割と史的背景について考察を深めていくことを今後の課題としたい。

謝辞

小稿は、令和3年12月8日に新潟県埋蔵文化財センター主催水曜日の職員講座「移民のムラ？田上町行屋崎遺跡」の内容の一部を活字化したものである。

小稿執筆にあたって田上町教育委員会の田畑弘氏には、行屋崎遺跡の調査にかんするご教示と多大なるご協力を賜りました。また下記の機関、個人の方々からは資料調査や文献調査等でお世話になりました。ここにご芳名を記して感謝申し上げます。

田上町教育委員会 新潟県埋蔵文化財センター 田畑弘 奈良佳子 小林弘 田海義正

引用・参考文献

- 飯塚 誠・徳江 秀夫 1993『少林山台遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
神川町教育委員会 1984『神川町遺跡群発掘調査報告Ⅲ』
協和町小栗地内遺跡調査会 1986『丑塚古墳群・寺山古墳群・裏山遺跡』
酒井清治 1988「関東における古墳時代の須恵器生産－群馬・埼玉を中心に－」『考古学雑誌』第73巻第3号 日本考古学会
酒井清治 1991「須恵器の編年 関東」『古墳時代の研究』6 須恵器と土師器 雄山閣
高崎市教育委員会 2009『史跡保渡田古墳群 井出二子山古墳』高崎市文化財調査報告書第231集
田中祐樹 2018「透かし入り土師器高杯の新例－田上町行屋崎遺跡出土資料の紹介－」『新潟考古学談話会会報』第36号 新潟考古学談話会
田中祐樹 2019「田上町行屋崎遺跡出土遺物にみられる外来系要素について」『研究紀要』10号 公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
田畑弘ほか 2015『行屋崎遺跡』田上町教育委員会
奈良佳子 2022「やきものから考える新津丘陵周辺の古代」企画展関連講演会当日資料
藤野一之 2009「北関東型須恵器の成立と展開」『群馬・金山丘陵窯跡群Ⅱ』駒澤大学考古学研究室
藤野一之 2019『古墳時代の須恵器と地域社会』六一書房
前山精明ほか 2012『大沢谷内遺跡Ⅱ 第7・9・11・12・14次調査』新潟市教育委員会

図版出典

- 第1図 国土地理院地図をベースに筆者作成
第2図 筆者作成
第1・2表 藤野2019を基に筆者作成
第3図 飯塚・徳江1993、神川町教育委員会1984、協和町小栗地内遺跡調査会1986を改変

富山県東部の佐渡小泊産須恵器

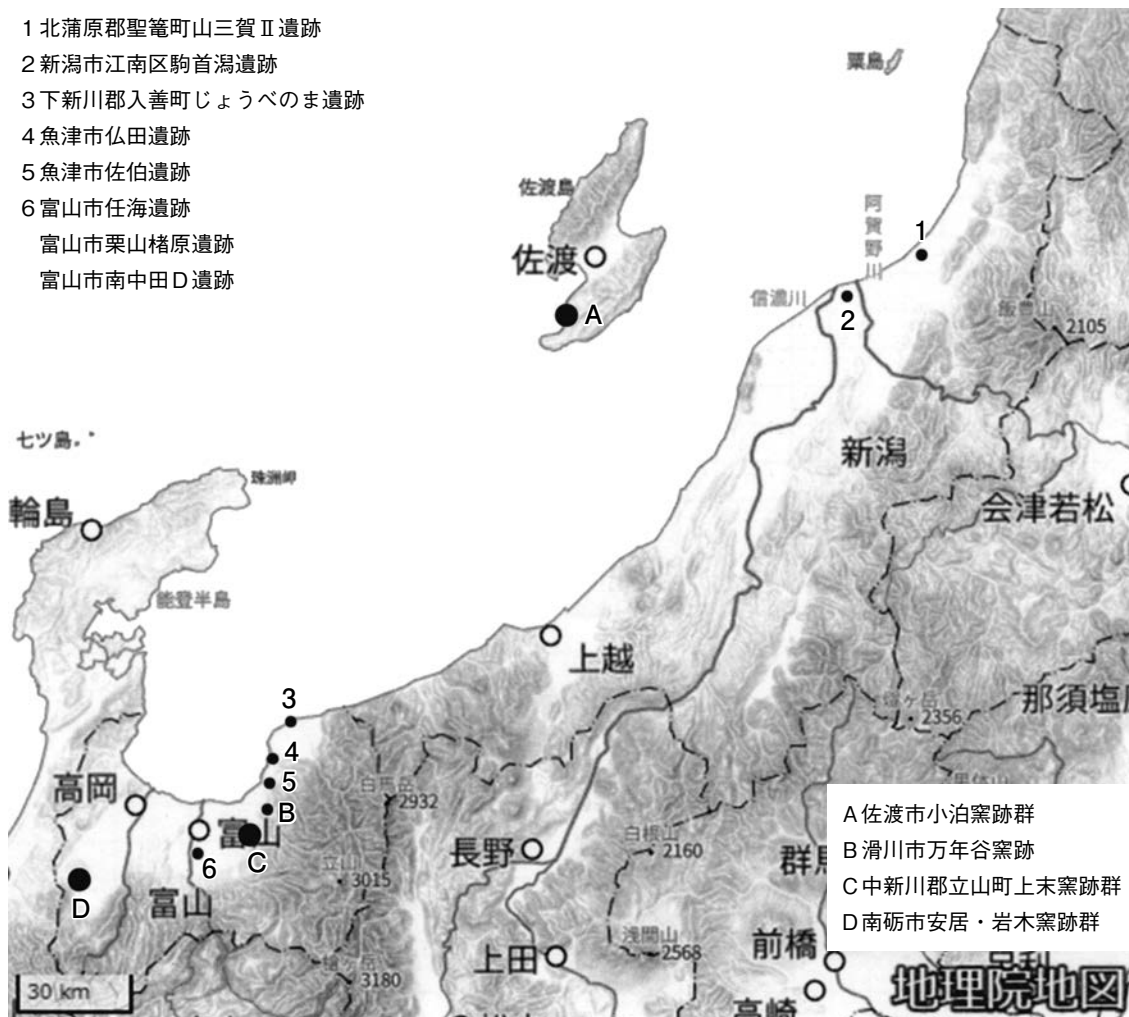
春日 真実

はじめに

佐渡市羽茂地区にある小泊窯跡群は9世紀を中心に稼働した新潟県内最大の須恵器窯跡群(註1)であり、小泊窯跡群で生産された須恵器は佐渡島内だけでなく、越後やその周辺にも流通している。小稿で富山市・魚津市・入善町に所在する遺跡から出土した小泊産須恵器を示し、小泊窯跡群で生産された須恵器(以下「佐渡小泊産須恵器」とする)の流通状況を確認するとともに、富山県東部と越後・佐渡の9世紀を中心とする時期の土器編年の平行関係についてもふれる。

第2・3・7図の遺物番号は各報告書の報告番号に一致する。佐渡小泊産須恵器か否かの判断は筆者が目視で行い、小泊産須恵器と判断した須恵器は遺物番号の下あるいは右にkを付した。小泊産須恵器の時期表記は筆者の編年(春日2019、第1表)を用いる。

- 1 北蒲原郡聖籠町山三賀Ⅱ遺跡
- 2 新潟市江南区駒首潟遺跡
- 3 下新川郡入善町じょうべのみ遺跡
- 4 魚津市仏田遺跡
- 5 魚津市佐伯遺跡
- 6 富山市任海遺跡
- 富山市栗山椿原遺跡
- 富山市南中田D遺跡



第1図 主な遺跡の位置

1 佐渡小泊産須恵器を確認した遺跡（第2・3図）

(1) 魚津市仏田遺跡（公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所2013）

魚津市仏田に所在し、片貝川左岸の微高地上に立地する。現在の海岸線からは約1km内陸である。富山県下で最も多くの佐渡小泊産須恵器が出土している遺跡と考えている。魚津市仏田遺跡出土の土師器のうち、遺物（報告）番号の左側に○がついているものは赤彩土師器、●がついているものは黒色土器である。

SK2113

長軸1.42m、短軸1.32m以上、深さ0.53mの不整形の土坑で、覆土は3層に分かれる。出土土器は16点が報告されている。54～57は須恵器杯蓋で、口径は11.2～11.8cmで、頂部はヘラ切り後ロクロナデである。375～383は有台杯で口径11cm台のもの（375～379・381・382）と14cm台（380・383）のものがある。281・283は無台杯で、このうち282は佐渡小泊産須恵器で、口径は10.9cm、焼成は還元軟質、ロクロ回転は左（反時計回り）、時期は8期である。678は土師器小甕で口縁端部は摘まみ上げている。

SP2334

長軸0.88m、短軸0.77m、深さ0.44m、SB12の柱穴である。覆土は2層に分かれるSB12は過半が調査区外にのびる桁行3間（7.9m）以上の掘立柱建物である。SP2334の出土土器は8点報告されている。26は須恵器杯蓋で内面に墨痕がある。226・227は須恵器無台杯で2点とも佐渡小泊産須恵器である。ロクロ回

第1表 本稿で用いる時期区分と主な資料

時期区分		年代など
600	1期古	上越市峪ノ上遺跡SI1
		上越市一之口遺跡SI17
	1期新	上越市延命寺遺跡SI006
		上越市津倉田遺跡SI417
	2期	上越市津倉田遺跡SI1・53・80・102 田上町行屋崎遺跡
3期	上越市津倉田遺跡SI62B・SX97 新潟市秋葉区大沢谷内遺跡SX945	
700	4期	妙高市栗原遺跡SD25 上越市柿崎区木崎山遺跡2号竪穴住居
	5期	長岡市八幡林遺跡A地区IV層 長岡市下ノ西遺跡SD201 長岡市下ノ西遺跡SD202 上越市延命寺遺跡SD1700
	6期	上越市今池遺跡SK24 長岡市八幡林遺跡H地区
	7期	上越市滝寺7号窯跡 上越市今池遺跡SK102
	8期	聖籠町山三賀II遺跡SI1320・753ほか 阿賀野市山口遺跡SI2368・3048
800	9期	新潟市江南区駒首湯遺跡旧河川 新潟市西区釈迦堂遺跡IX層 阿賀野市蕪木遺跡SD21・32・110 長岡市八幡林遺跡I地区上層
	10期	上越市子安遺跡SI354 新潟市江南区牛道遺跡SE234
	11期	村上市西部遺跡SD1377
	12期	長岡市門新遺跡SD152
	13期	上越市四ツ屋遺跡SK63
900	14期	上越市一之口遺跡東地区SD1
	15期	糸魚川市角地田遺跡SK577・698
	16期	上越市延命寺遺跡SD1700
1,000	17期	上越市今池遺跡SK24
	18期	上越市延命寺遺跡SD1700
	19期	上越市延命寺遺跡SD1700
	20期	上越市延命寺遺跡SD1700
	21期	上越市延命寺遺跡SD1700

転は左で、226は見込み外縁が窪む。時期は2点とも9期である。551・552は土師器無台椀で「三」または「川」の墨書が見られる。630は土師器皿の口縁部、631・632は土師器有台皿で、630には「三」または「川」の墨書が見られる。632は631に比べ高台径が小さく、高台の高さも低い。SB12を構成する他の柱穴にはSP2294・2682・2305があり、このうちSP2682から黒色土器の鉢(712)、SP2305から土師器有台皿(633)が出土している。

SF2672

南北方向の道路(状遺構)である。西側にのみ側溝がある。出土土器は10点報告されている。46は須恵器杯蓋で頂部に「北」と考えられる墨書が確認できる。363・364は須恵器有台杯で、364は363に比べ器高が高く、底部外面に「三」または「川」の墨書がある。243～246は須恵器無台杯で、243・245は底部が丸底気味になる。244・246は佐渡小泊産須恵器で、内面の口縁端部付近に稜線が巡る。時期は9期である。557・558・598は土師器無台椀。器高が低く、口径・底径が大きい598と598に比べ器高が高く口径・底径が小さい557がある。557はP2334出土の552と形態が類似する。245・246・598は下記のSD2649出土の土器と接合している。

SD2649

SF2672の側溝で、幅0.96m、深さ0.15mである。「遺物取り上げ時にSD2648出土遺物と混ざってしまい時代に幅がある」との記述がある。SD2648はSD2649を切る溝である。出土土器は20点報告されているが、第2図には18点を示した。除いた2点は判読が難しい墨書のある土師器小片である。92・93は須恵器杯蓋。93は摘みが見つからない。394～396は須恵器有台杯。394・396は365に比べ器高が高い。270～273は須恵器無台杯。270は佐渡小泊産須恵器で、内面の口縁端部付近に稜線が巡る。時期は9期である。271～273は底部が丸底気味になる。589～595は土師器無台椀。591は他の土師器無台椀に比べ底部が厚い。594は口径15.8cm、高さ6.0cmと大型で、外面下半にはヘラケズリが施されている。595は「南」の墨書がある。689は鍋。外面は上半ロクロナデ、下半ヘラケズリ、内面は上半カキメ、下半ハケメである。口縁端部は玉縁状である。705は黒色土器の無台椀である。

SK2341

長軸0.44m、短軸0.36m、深さ0.30mの楕円形で、覆土は黒褐色砂質シルトの単層である。出土遺物は3点が報告されている。75は須恵器杯蓋。低く径の大きい摘みがつく。佐渡小泊産須恵器で時期は9期の可能性が高いが10期に下る可能性もある。259は須恵器無台杯で底部は丸底気味である。639は土師器有台皿で高い高台を持つ。

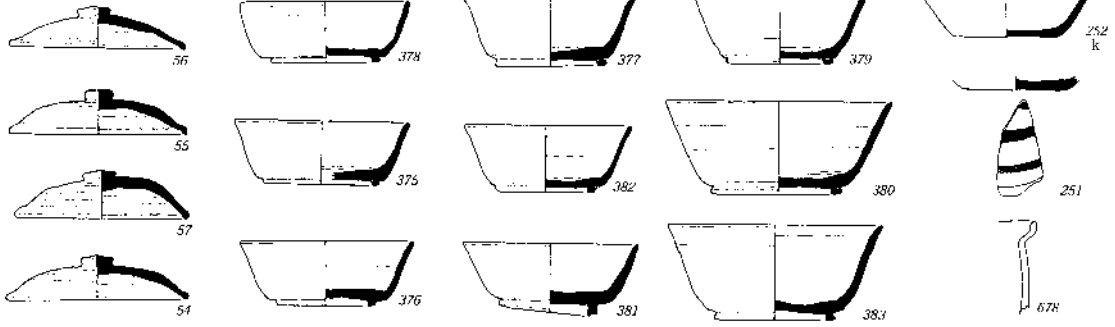
SK1688

長軸1.54m、1.36m、深さ0.36mの円形で、覆土は3層に分かれる。「覆土に大きめの炭化物が混じること、下層を行ったと考えられるSK2529よりは小規模だが、周囲の土坑と比べると大きいことから、SK2529と同様、火葬をおこなった土坑と思われる」と報告されている。出土土器は1点が報告されている。47は須恵器杯蓋で環状で中央が盛り上がる摘みがある。佐渡小泊産須恵器で、時期は9期である。報告者は「胎土は、肉眼観察では上末産のものと思われたが、つまみが上末では見られない形をしており、胎土分析をしたところ、少なくとも上末の釜谷窯のものではなく、上末の釜谷以外の窯かあるいは産地不明という結果がでている」と報告している。

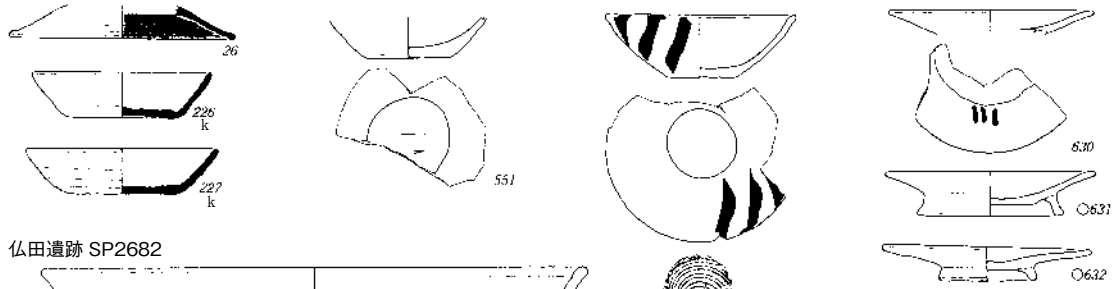
遺構外出土

187・300～332・337・338・540は遺構外から出土した小泊産須恵器である。187は杯蓋で「つまみが上

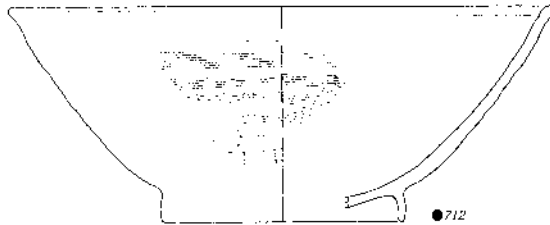
魚津市仏田遺跡 SK2113



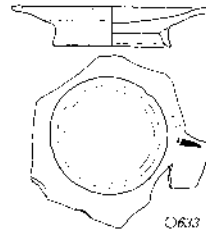
仏田遺跡 SP2334



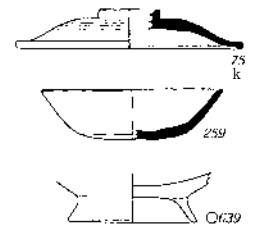
仏田遺跡 SP2682



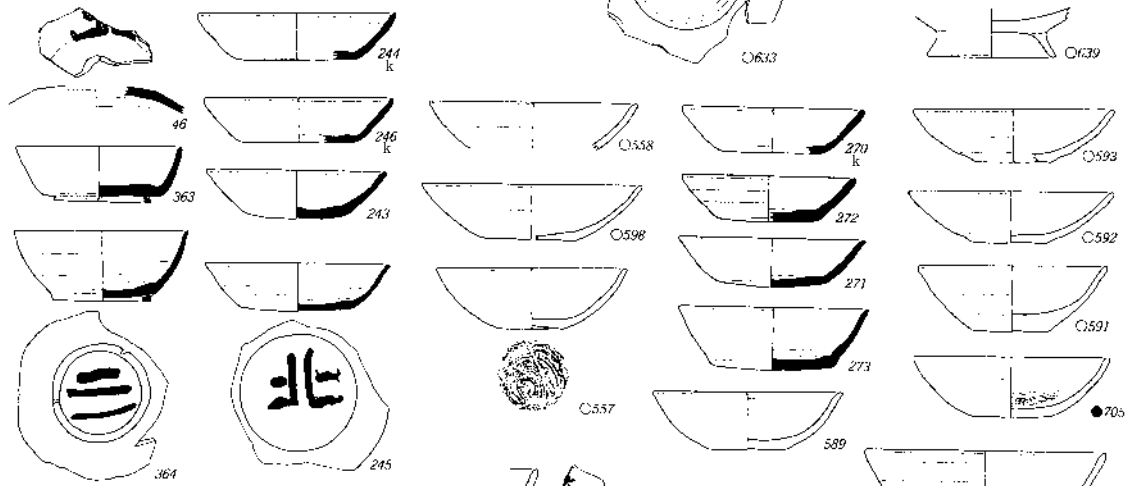
仏田遺跡 SP2305



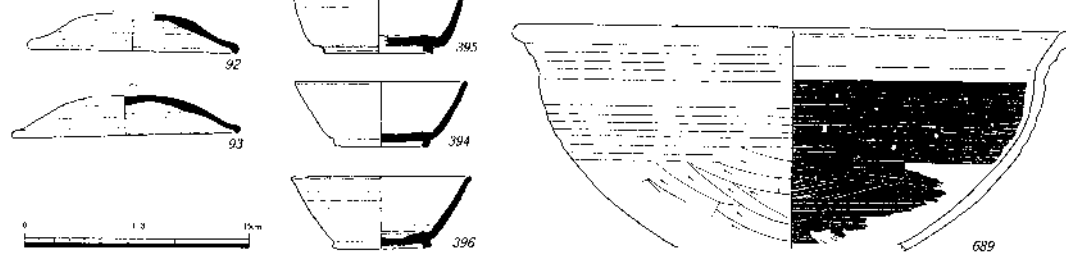
仏田遺跡 SK2341



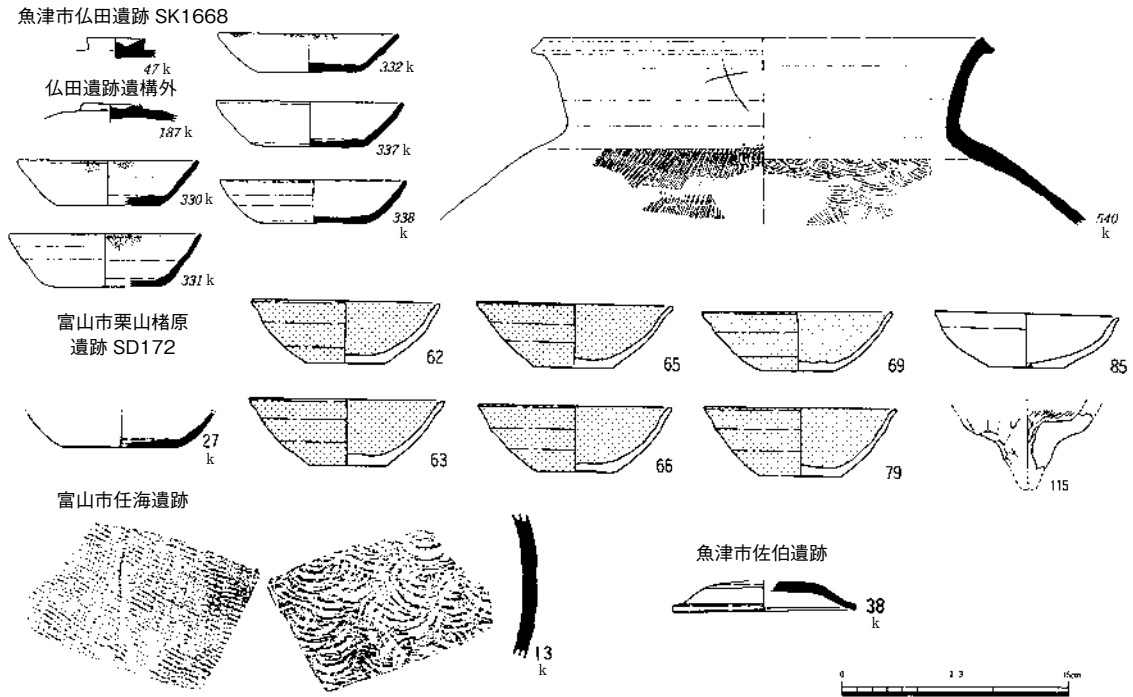
仏田遺跡 SF2672



仏田遺跡 SD2649



第2図 富山県東部の佐渡小泊産須恵器と関連資料1



第3図 富山県東部の佐渡小泊産須恵器と関連資料2

末では見られない形をしており、また、胎土も他の個体と比べ白色粒が特に多く入っている」と報告されている。時期は10期である。

330～332・337・338は無台杯である。時期は9期のものが大半と考えている。540は甕。外面に格子叩きが見られる。

(2) 富山市栗山楮原遺跡 (富山県埋蔵文化財センター1990)

富山市南中田に所在し、神通川右岸の扇状地に位置する。現在の海岸から約15km内陸である。9・10世紀を中心とする集落遺跡である。

SD172

幅60cm、深さ30cmの溝で、道路状遺構(SF173)の側溝である。出土土器は製塩土器を含め9点報告されている。27は須恵器無台杯で、佐渡小泊産須恵器である。仏田遺跡SP2334・SF2672出土のものに比べ器壁が薄く時期は10期と判断した。62・63・65・66・69・79・85は土師器無台椀で、62・63・65・66・69・79は赤彩土師器と報告されている。85は赤彩されない土師器無台椀で、ほかのものに比べ器高が低い。115は棒状尖底の製塩土器である。

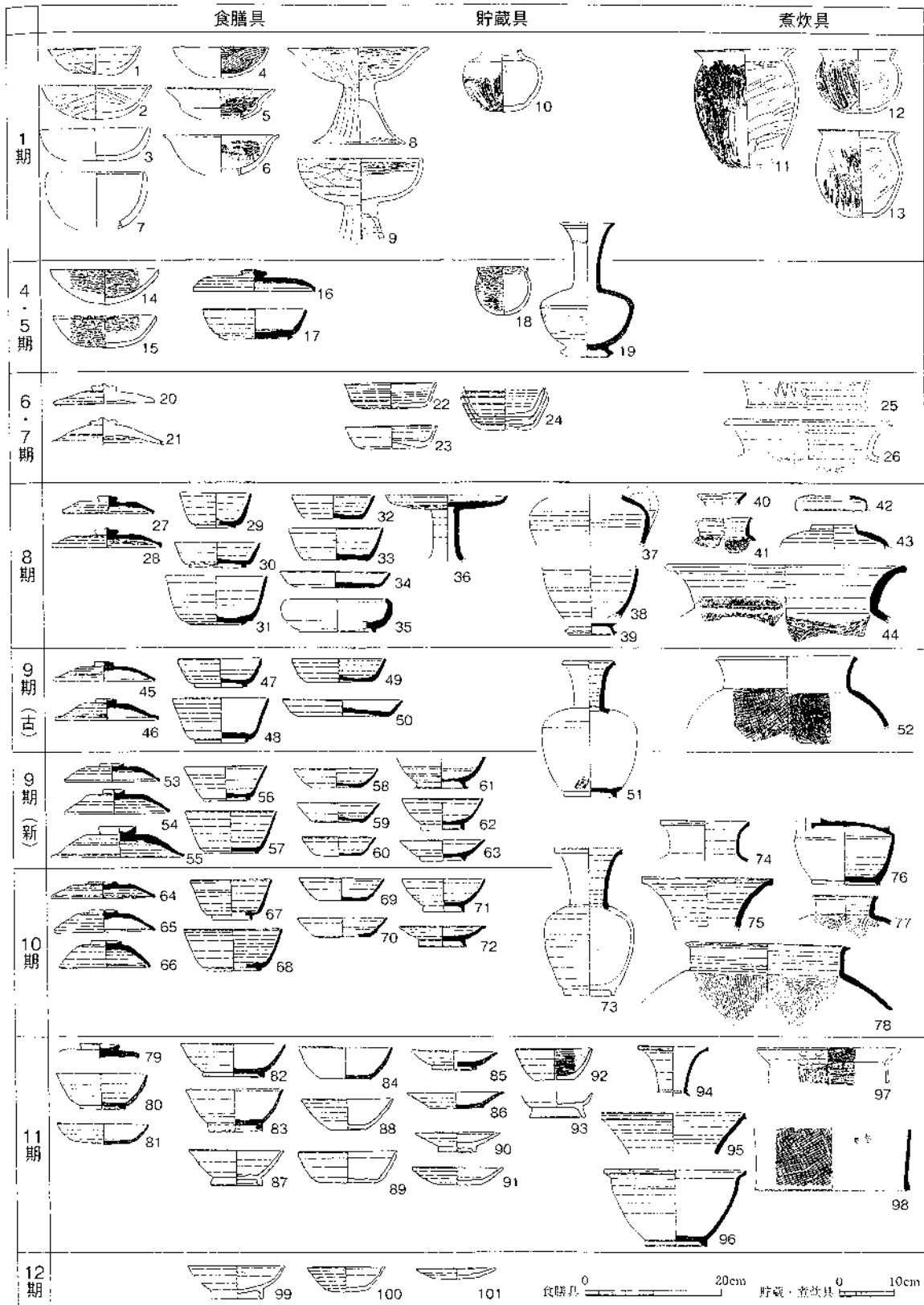
(3) 任海遺跡 (富山県埋蔵文化財センター1993)

富山市任海に所在し、神通川右岸の扇状地に位置する遺跡である。栗原楮原遺跡の北側に近接する。1992(平成4)年の調査では土坑・溝など9世紀代の土器が出土している。

13は須恵器横瓶で佐渡小泊産須恵器である。時期は8～10期のいずれかであろう。

(4) 魚津市佐伯遺跡 (富山県教育委員会1979)

魚津市佐伯地内に所在し、早月川右岸の丘陵先端付近に位置する。縄文時代・弥生時代・古代の遺跡である。古代は竪穴建物1軒、掘立柱建物26棟が検出されている。38は須恵器杯蓋で小泊産須恵器である。時期は8期ないしは9期である。内面の重ね焼きは北野分類(北野1988)のIIa類だが、外面先端付近が



第4図 佐渡島における7～10世紀の土器の変遷
 (春日2019cを縮小転載 土器の縮尺は食膳具1:8、貯蔵・煮炊具1:10だったものを91%縮小)

降灰、内面が中央部を除き黒化しており、倒位に置いた有台杯の底部に正位に杯蓋を置き、その上に倒位の有台杯を置いたものと考えられる。

(5) 下新川郡入善町じょうべのま遺跡 (入善町教育委員会1975)

下新川郡入善町田中に所在し、黒部川右岸の扇状地末端付近に位置する。現在の海岸までの距離は約50mである。入善町町民会館に出土遺物の一部が展示されている。ガラス越しに土器を見たが、佐渡小泊産須恵器の可能性が高い杯蓋・甕などが確認できた。報告遺物のどれに当たるかは判断できていない。出土した須恵器の中に佐渡小泊産須恵器が複数存在している可能性が高い。

2 仏田遺跡の報告書内での胎土の分類と蛍光X線分析の結果

仏田遺跡の報告書では須恵器の胎土について10種(胎土番号1～10)に分類している。分類の内容に関する記述は確認できなかったが、典型例について表面や断面のカラー写真が掲載されている。また、三辻利一により蛍光X線分析が行われ、K、Ca、Fe、Rb、Sr、Naの数値とこれに基づく推定産地が示されている。

第2表に1-(1)で佐渡小泊産須恵器とした須恵器と仏田遺跡の報告書内での胎土の分類(胎土番号)と三辻が示した推定産地を示した。

第3表に筆者が佐渡小泊産須恵器と判断し、かつ蛍光X線分析が行われている報告番号47・187・540の3個体4点(540については2点の分析が行われている)の元素の数値を示した。

第4表に山三賀Ⅱ遺跡の報告書(新潟県教育委員会1989)の中で三辻が示した佐渡小泊産須恵器の主要元素(K・Ca・Fe・Rb・Sr・Na)の数値を示した。

第4図には仏田遺跡で蛍光X線分析を行った須恵器の全体と胎土番号毎(胎土番号9・10は少数のため省略)のK-Ca、Rb-Sr分布図を示した。分布図上の「釜谷領域」は富山県中新川郡立山町に所在する上末窯跡群の釜谷3・4号出土須恵器のK-Ca、Rb-Sr分布領域、「万年寺領域」は滑川市に所在する万年寺窯跡出土須恵器のK-Ca、Rb-Sr分布領域、ぐみ谷奥領域は南砺市に所在する安居・岩木窯跡群のぐみ谷奥窯跡出土須恵器のK-Ca、Rb-Sr分布領域である。

以下、第2～4表、第4図から確認できたことを列挙する。

- 1 第2表を見ると、筆者が佐渡小泊産須恵器と判断した15点には、仏田遺跡の胎土番号1・2・4・7・8の5種があり、1が4点、2が3点、4が3点、7が4点、8が1点である。仏田遺跡の胎土番号(胎土の分類)と筆者の目視による判断は、あまり調和的でない。
- 2 佐渡小泊産須恵器と判断した須恵器のうち報告番号47・187・540は蛍光X線分析が行われており、推定産地は47が「不明」、187は釜谷、540は「小泊か」となっており、筆者の目視による判断と三辻の推定産地は、あまり調和的でない。
- 3 第3表を見るとCaとSrの数値は報告番号47・187と540で大きく異なるがK、Rbの数値は近似している。Kの値が0.334～0.376、Rbの数値が0.401～0.496の範囲にあり、主要元素の数値はある程度まとまりがある。
- 4 第4表は仏田遺跡の報告書が刊行された2013年からは20年以上前のデータであるが、第3表の数値を第4表に当てはめると、比較的近似した数値ともいえる。
- 5 第4図を見ると蛍光X線分析を行った須恵器の多くは釜谷領域に含まれるが、これから外れるものも少量存在する。

6 胎土番号1～7の大半は釜谷領域に含まれる。このうち胎土番号1・5・6は釜谷領域の中かこれに近いもので占められるが、胎土番号2・3・4・7にはこれから大きく外れるものもある。

7 報告番号47・187・540のKは全て0.4以下、Rbは0.5以下で釜谷領域からは外れる。こうした須恵器は仏田遺跡出土の須恵器の中では少数である。

以上のように筆者が目視で判断した「佐渡小泊産須恵器」は仏田遺跡の胎土分類（胎土番号）や三辻による推定産地とは調和的でない。一方、3個体4点と点数は少ないものの、蛍光X線分析による主要元素の数値を見ると、これら3個体は佐渡小泊産須恵器と判断することも可能である。

第2表 仏田遺跡の「小泊産須恵器」・「胎土番号」・「推定産地」

番号	器種	出土地点	胎土番号	試料No.	推定産地
47	杯蓋	SK1688	2	15	不明（32・81と同じ）
75	杯蓋	SK2341	2		
187	杯蓋	X50Y80 II層	4	34	釜谷
226	無台杯	SP2334	7		
227	無台杯	SP2334	2		
244	無台杯	SF2672	7		
246	無台杯	SF267・SD2649	7		
252	無台杯	SK2113	1		
270	無台杯	SD2649	1		
330	無台杯	X60Y88 II層	4		
331	無台杯	X61Y89 II層	4		
332	無台杯	X58Y89 II層	1		
337	無台杯	X59Y88 II層ほか	7		
338	無台杯	X79Y92 II層	1		
540	甕	X61Y89 II層ほか	8	97・98	小泊か

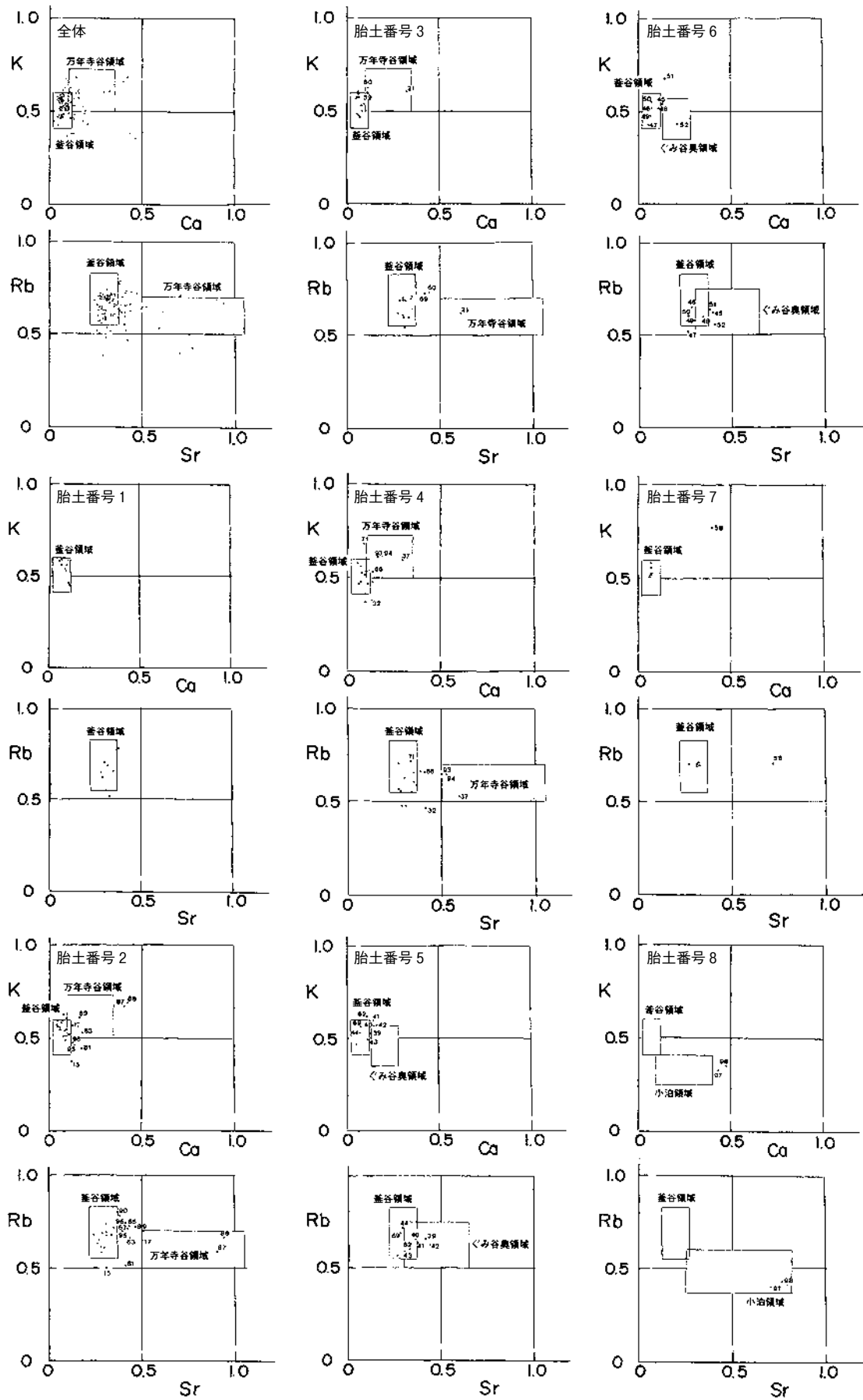
* 胎土分析No.32は胎土番号4、胎土分析No.81は胎土番号2

第3表 仏田遺跡出土佐渡小泊産須恵器の胎土分析データ




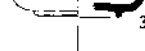
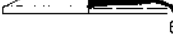
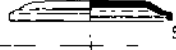


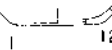
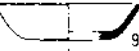

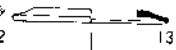



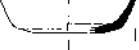


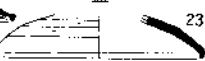



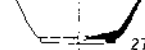





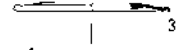


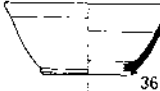
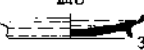


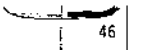

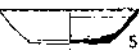

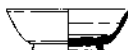
試料No.	報告No.	種類	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	胎土番号	推定産地
15	47	須恵器	杯蓋	0.376	0.123	2.84	0.496	0.306	0.123	2	不明
34	187	須恵器	杯蓋	0.366	0.096	2.99	0.476	0.294	0.084	4	釜谷
97	540	須恵器	甕	0.334	0.433	2.74	0.401	0.705	0.287	8	小泊
98	540	須恵器	甕	0.356	0.469	2.67	0.431	0.771	0.295	8	小泊

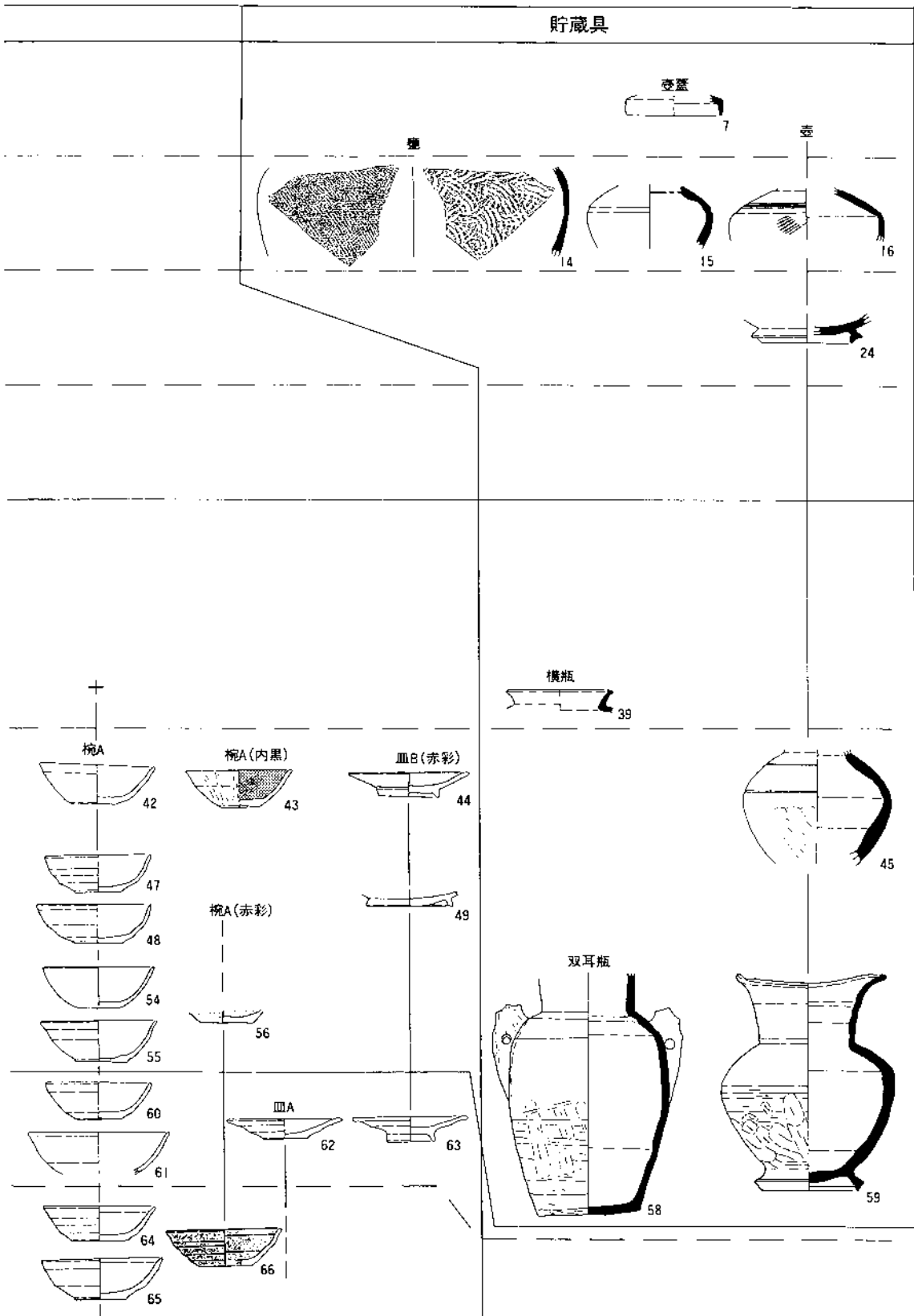
第4表 佐渡小泊産須恵器の主要元素の数値

元素	K	Ca	Rb	Sr
数値	0.371 ± 0.051 (0.422～0.320)	0.216 ± 0.084 (0.300～0.132)	0.463 ± 0.070 (0.533～0.393)	0.436 ± 0.142 (0.578～0.294)



第5図 魚津市仏田遺跡出土須恵器のK-Ca、Rb-Sr分布 (三辻2013の一部を転載)

期	杯A (b手法)	食膳具	杯B蓋 (b手法)
I ₁		杯Ba (b手法)	
			
			
I ₂			綠釉杯A 
			
I ₃			杯Bc 
			  蓋 
I ₄		杯Bb (b手法)	
		 	
II ₁			
		杯A (c手法)	
		  	
II ₂			
			
		杯Ba (c手法)	
		 	
III ₁			
III ₂			



第6図 富山市南中田D遺跡の土器編年 (岡本1991を縮小転載、土器の縮尺1:6を88%縮小)

まとめ

前章の検討を踏まえると、筆者が目視で確認した佐渡小泊産須恵器は問題点がないわけではないが、以下では佐渡小泊産須恵器との前提で記述を進める。

(1) 佐渡小泊産須恵器の流通

佐渡小泊産須恵器は富山県東部では魚津市佐伯遺跡、同市仏田遺跡、富山市任海遺跡、同市栗山楮原遺跡の4遺跡で出土しており、下新川郡入善町じょうべのま遺跡でも出土している可能性が高い。確認できた点数は魚津市仏田遺跡を除くと、1点のみである。ただし下新川郡入善町じょうべのま遺跡では複数の佐渡小泊産須恵器が出土している可能性がある。同じ魚津市内でも東端に近い片貝川左岸の仏田遺跡では一定量の佐渡小泊産須恵器が確認できるが、西端に近い早月川右岸の佐伯遺跡では1点のみの出土で、出土量に差がある可能性がある。富山市の2遺跡も1点のみの出土で、一定量流通したのは魚津市の西部あたりまでであった可能性が高い。

器種を見ると仏田遺跡では杯蓋・無台杯・甕が確認でき、杯蓋が確認できることから有台杯も存在した可能性がある。佐伯遺跡では杯蓋、任海遺跡では横瓶、栗山楮原遺跡では無台杯が確認できた。また、じょうべのま遺跡では杯蓋・甕が出土している可能性がある。以上のように富山県東部で出土する小泊産須恵器には杯蓋・無台杯・横瓶・甕があり、杯蓋が存在することから有台杯も存在した可能性が高い。また越後では一定量確認できる長頸瓶は富山県東部では未確認である。

時期を確認すると、仏田遺跡では8～10期のものが確認でき、9期のものが多い。佐伯遺跡は8期、栗山楮原遺跡は10期、任海遺跡のものは8～10期である。越後でも佐渡小泊産須恵器は8期には相当量確認でき、11期には大幅に減少している。流通しはじめる時期と流通しなくなる時期は越後と類似した状況と考えられる。

(2) 編年の位置

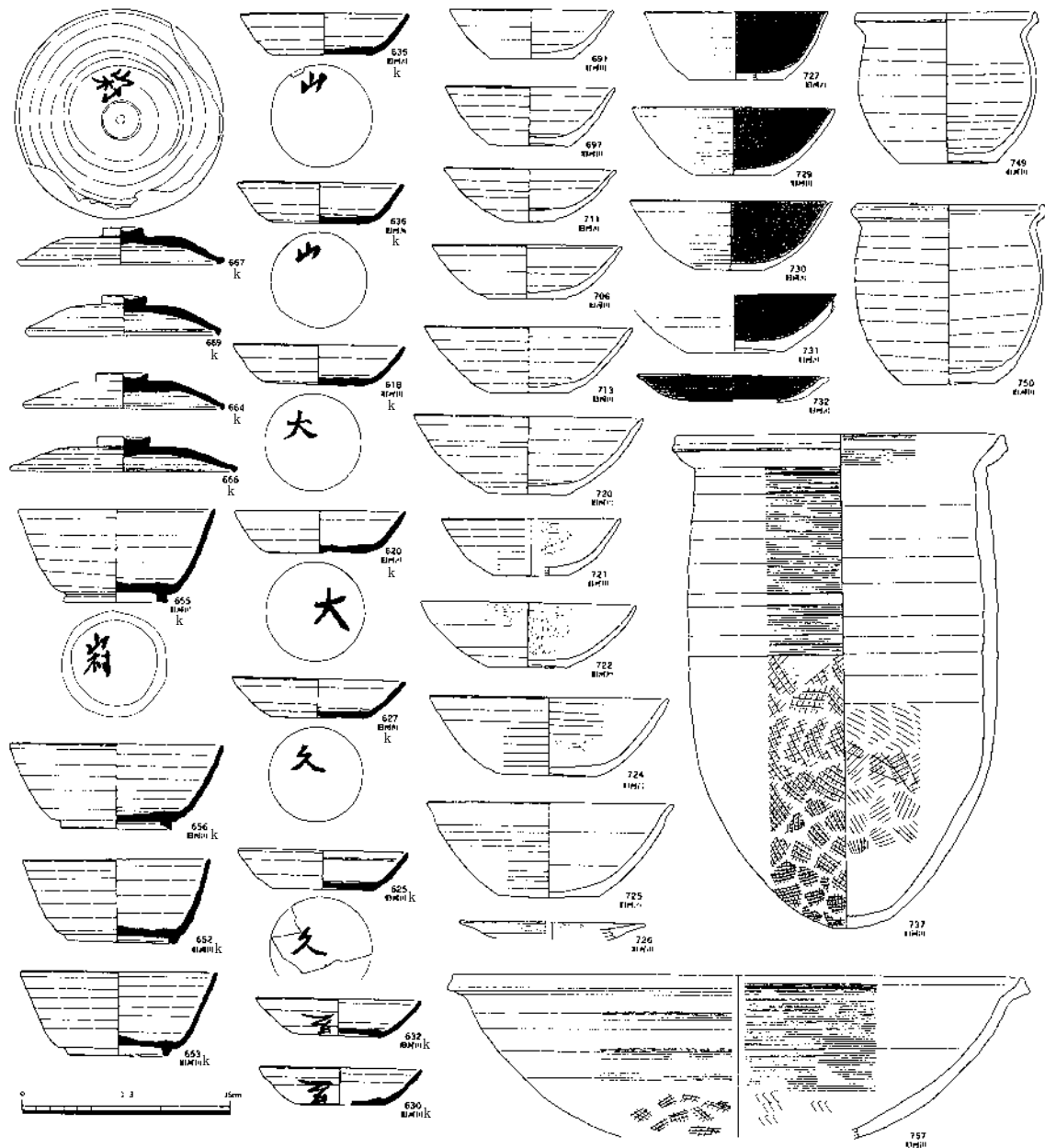
仏田遺跡では8・9期、栗山楮原遺跡では10期の佐渡小泊産須恵器が在地産と推測される須恵器・土師器が同一遺構から出土している。これらについて南中田D遺跡の発掘調査報告書で示された岡本淳一郎の編年（岡本1991、第6図）との対比を行いたい。

8期の佐渡小泊産須恵器が伴った仏田遺跡SK2113出土土器（第2図）は土師器食膳具を伴っていない。大型の有台杯（380・383）の形態は第6図28よりも36に近い。このことからSK2113出土土器は岡本編年のⅡ1期の土器群と考える。

9期の佐渡小泊産須恵器が伴ったSP2334・SF2672・SD2649出土土器（第2図）は須恵器食膳具のほかに土師器食膳具が一定量みられる。またSF2672出土の小型の須恵器有台杯364は第6図52に、SD2649出土の須恵器無台杯273は第6図40に、SP2334出土の土師器有台皿631は第6図49に形態が似ている。このことから岡本編年のⅡ2期の土器群と考える。

10期の佐渡小泊産須恵器が伴った栗山楮原SD172出土土器（第3図）は食膳具のほとんどが土師器であり、須恵器食膳具は佐渡小泊産須恵器の27のみである。岡本編年のⅢ期の資料と考えられる。土師器無台碗の形態は64・65よりも60に近いものが多い。Ⅲ期中でもⅢ1期の土器と考える。

第7図には9期の資料である新潟市江南区駒首潟遺跡旧河川出土の出土土器を示した。駒首潟遺跡旧河川からは3点の習書木簡が出土しているが、このうち3号木簡には「大納言阿倍大夫殿資人」の文字があり、「大納言阿倍大夫殿」は安倍安仁と考えられ、安倍安仁の大納言就任期間は天安元年～貞観元年（857～859）である。これは9期の年代の一端を示すものと考えうる。8期と10期の暦年代を示す良好な資料



第7図 新潟市江南区駒首潟遺跡旧河川出土土器（9期）

は現在のところ無いが、9期の年代の一端が天安元年～貞観元年（857～859）とすれば8期は9世紀第2四半期頃、10期は9世紀第4四半期頃の暦年代が考えられる。岡本はⅡ期の年代を9世紀中頃～末、Ⅲ期を9世紀末～10世紀と想定しているが、これは駒首潟遺跡旧河川出土木簡から想定される8～10期の暦年代と概ね一致する。

本稿作成に際し、安念幹倫、岡本淳一郎、境 洋子、田中道子の各氏から資料閲覧についてご配慮いただきました。また岡本淳一郎氏からは仏田遺跡出土土器の年代について、田中道子氏からは富山県の古代須恵器の重ね焼きや須恵器窯の分布についてご教示をうけました。お礼申し上げます。

文末になりましたが、筆者に吉田町史資料編1を執筆する機会を与えていただいた本間敏則さんが、昨年古希を迎えられましたことお祝い申し上げます。これからもお元気で、日々愉しく考古学を研究される事を心から祈念しています。

註

(1) 瓦も生産している。

引用参考文献

- 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』資料編
岡本淳一郎 1991「C 古代土器について」『富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告書』富山県埋蔵文化財センター
公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2013『富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書 第58集 仏田遺跡発掘調査報告』
- 春日真実 2019a「第5章古代 第1節 総論」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
春日真実 2019b「第5章古代 第2節第1項 土師器・須恵器の器種分類」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
春日真実 2019c「第5章古代 第2節第8項 佐渡」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
春日真実 2022「新潟県における年代定点資料」『東国古代遺跡研究会第11回研究大会 古代東国における年代定点資料の検討』東国古代遺跡研究会
- 北野博司 1988「重ね焼きの観察」『石川県能美郡辰口町 辰口西部遺跡群Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター
富山県教育委員会 1979『富山県魚津市佐伯遺跡』
富山県埋蔵文化財センター 1990『富山県総合運動公園内遺跡群発掘調査概要Ⅰ 栗山楮原遺跡 南中田A遺跡 任海鎌倉遺跡 南中田C遺跡』
富山県埋蔵文化財センター 1991『富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告書』
富山県埋蔵文化財センター 1993『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(3) 任海遺跡 吉倉A遺跡 吉倉B遺跡』
新潟県教育委員会 1989『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集 山三賀Ⅱ遺跡』
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 1999『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第91集 牛道遺跡』
新潟市教育委員会 2009『駒首遺跡 第3・4次調査』
入善町教育委員会 1975『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)』
三辻利一 1989「1 山三賀Ⅱ遺跡出土須恵器の胎土分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会
三辻利一 2013「須恵器、土師器の蛍光X線分析」『富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書 第58集 仏田遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

新潟県内の出土木製発火具の形態と用途について I

—発火具の集成・火鑽板の分類—

葎原佳純

はじめに

我々が目にする遺物の中には、火によって加工したものが多数見つかる。また、加工だけではなく、調理・灯り・暖・儀式などにも用いていたことは多くの出土品から明らかである。遺跡からは火鑽板、火鑽杵が出土品として見つかるが、これらがどのような目的で用いられたかは、未解明の部分が多い。

新潟県内で出土した木製発火具は125点にのぼり、全国的にみても（伊東・山田編2012）上位の出土数と思われる。しかし県内では発火具について盛んに検討されてこなかった。そこで筆者は新潟県内の発火具を対象にし、その用途について検討することを考えた。まず本稿では、対象資料の提示と火鑽板の分類を試みることを目的とする。

1 木製発火具の研究と課題

木製発火具は、さまざまな民俗例から回転摩擦式・直線往復摩擦式などが知られている。国内の民俗例および出土品としてみられるのは回転摩擦式（キリモミ・弓キリ・マイキリ）である。回転摩擦式とは、木の棒を回転させて火を起こす方法で、摩擦熱を起こすための木の棒と、それを受けるための板で構成される。

発火方法が分かる民俗例としては、アイヌ文化圏のユミキリ・ヒモキリ・キリモミ（内田1989）（松浦1860）、沖縄県八重山諸島のピーウス・ピーイナイキ（工藤1983）、三重県伊勢神宮のマイギリ、鳥根県出雲大社のキリモミ、長野県諏訪大社のキリモミ（文化庁1981）などがある。出土品としては火鑽板、火鑽杵が知られるが、見た目の焦げ付きが類似するため、回転摩擦式のどの方法で発火させたのか判断が難しい。そのため、発火方法を明らかにするため盛んに議論が行われてきた。

いっぽうで、発火具そのものの形状に着目した研究は少ない。発火具の寸法については、1980年代に高嶋幸男・岩城正夫が全国の収集データを元に復元実験を行った（高嶋・岩城1981）。高嶋幸男はそれらを元に著書『火の道具』1985年にて、効率的に発火させるための道具の寸法について次のように述べている。火鑽板は「V字の刻みのつけ方次第で発火効率が左右される」「ヒキリギネの太さは10mm前後が発火効率がよく」「ヒキリ板の厚さが13mmぐらいまでが発火効率がよく、それを越えると発火効率が急速に低下」し、使用する樹種によっても発火効率が変化する。そして利用する材はスギや針葉樹が多いことを明らかにした。高嶋幸男はこれらの実験をふまえ、出土発火具は「身近な材で」「発火効率のよい寸法」で作



図1 回転摩擦式
板に窪みをつくり、そこに木の棒を当て回転させる。

られていることを指摘した。

発火具の分布傾向や火鑽臼の割り付けについては、中村弘が述べている（中村2005）。中村弘は論考の中で兵庫県内の発火具を集成し、古墳時代～鎌倉時代までの10遺跡88点の出土を確認した。そのうちの71点が律令祭祀が行われた袴腰遺跡・砂入遺跡（古代）からの出土であると明らかにし、これらが「祓」の儀式で使用された可能性を推測している。また、同県の川除・藤ノ木遺跡（中世）の火鑽臼が中央に1か所開けられていることに着目し「1箇所の臼は火を付けるのを目的としたものではなく、煙を立てることを目的として設置され、使用された」可能性を指摘した。

以上の先行研究から、筆者は次のような課題を見出した。出土発火具の用途についての検討である。新潟県内出土の火鑽板の中には、上記で確認された1か所の臼のものや、十数か所の臼も存在する。それらの用途は同一なのだろうか。例えばその中に日用で用いたものは存在するのだろうか。そこで筆者は発火具の用途について、形状の視点からアプローチすることを考えた。

2 新潟県内の木製発火具

(1) 本稿における木製発火具の位置付け

木製発火具を集成するにあたり、名称や形の位置付けを提示する。木製発火具は、さまざまな名称で呼ばれることが指摘されている（山田2006）。県内の例をあげると、火鑽板に対して「火鑽臼」（文献No32）、「火鑽板」（文献No40）という名称がある。本稿では板にあげられた穴・火鑽臼についても着目したいため、混同を避けたい。よって、全国的な収集を行った高嶋幸男・岩城正夫（高嶋・岩城1981）が用いた名称を参照し、次のように位置付ける。

A：漢字表記の方法

- ・下記『広辞苑 第7版』2018年岩波書店 を参照し、発火具の目的に合致した「鑽」を用いる。
 - ・「鑽る（き・る）」「金と石とを打ち合わせ、また、木と木とをすって発火させる。」p792
 - ・「錐（きり）」「①柄をもんで板などに穴をあける、先端に尖った刃のついた工具。」p786
 - ・「切り（きり）」「①切ること。切ったもの。また、切ったものを数える語。」p785

B：火鑽板の位置付け（図2-1）

- ・発火具の板で、V字の切れ込みと棒を当てるための穴があいているもの。
- ・板の形状は、板状や棒状など形や寸法を問わないが以下の条件に当てはまるもの。
 - ・棒を当てる穴が、貫通・不貫通・破損を問わないが円状であること。
 - ・V字の切れ込みが板を縦断したもので、かつ穴の直径約1～1.5cmを考慮した間隔のもの。
- ・火鑽板の手前方向はV字の切れ込みがある方とし、臼が多いほうを手前・上面とする。

C：火鑽臼の位置付け（図2-1, 4）

- ・火鑽板にあげられた棒を当てるための穴で、明確なくぼみがみられるもの。
- ・ただし実測図上でくぼみが無くV字の切れ込みのみものは、火鑽臼と判断しない。
- ・穴の開け方は多様なため（図3-下段）方法は問わないが、以下の条件に当てはまるもの。
 - ・板を縦断しているV字の切れ込みの頂点付近にあり棒の直径約1～1.5cmを考慮したもの。
 - ・使用済みのくぼみは、円状を呈していること（図3上段）。
- ・未使用のくぼみは使用を考慮し、形は問わないが板の厚みの3分の2以上で深すぎないこと。

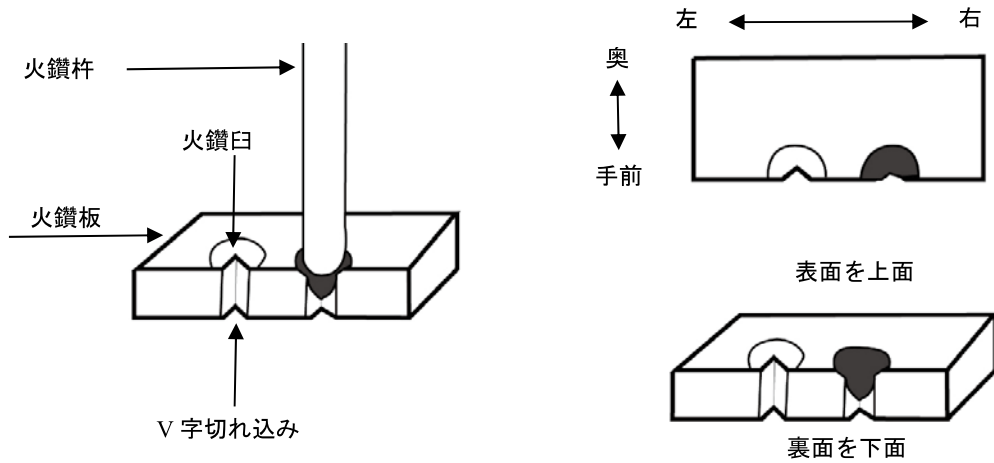


図 2-1 名称

板目	柁目	流れ柁目

図 2-2 木取り (荒川ほか2004) 参考に筆者作成

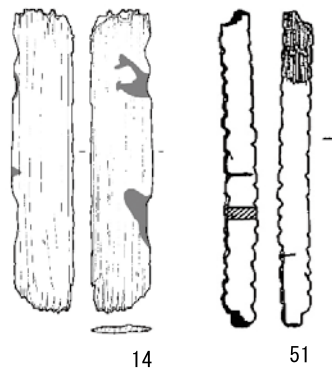


図 2-3 位置付けに当てはまらなかった資料



図 2-4 筆者実験 (左)・出土品 (右)

図 2 発火具分類の位置づけ



図3 使用済み臼（上）未使用臼（下）V字の切れ込みと使用済みの臼（右）

D：火鑽杵の位置付け（図2-1, 4）

- ・円状の断面をした直線の棒で、回転させる際に支障のない程度に歪みがないもの。
- ・破損品が多いため長さは問わないが、以下の条件に当てはまるもの。
 - ・下端に円状の焦げ付きがあるもの。ただし後に円状の先端部と接合する場合は除く。
 - ・円状の焦げ付きがないが、火鑽板とセットで見つかり組み合わせが明らかなもの。

E：木取り（図2-2）

- ・上記で位置づけた向き（図2-1）をふまえ、（荒川ほか2004）を参考に木取りを観察する。

F：位置付けに当てはまらなかった資料（図2-3）

例）火鑽板…火鑽臼やV字の切れ込みがないもの（図2-3 No14）。

多数の切れ込みがあり火鑽臼が配置できないもの（図2-3 No51）。

火鑽杵…両端部が破損しているもの。

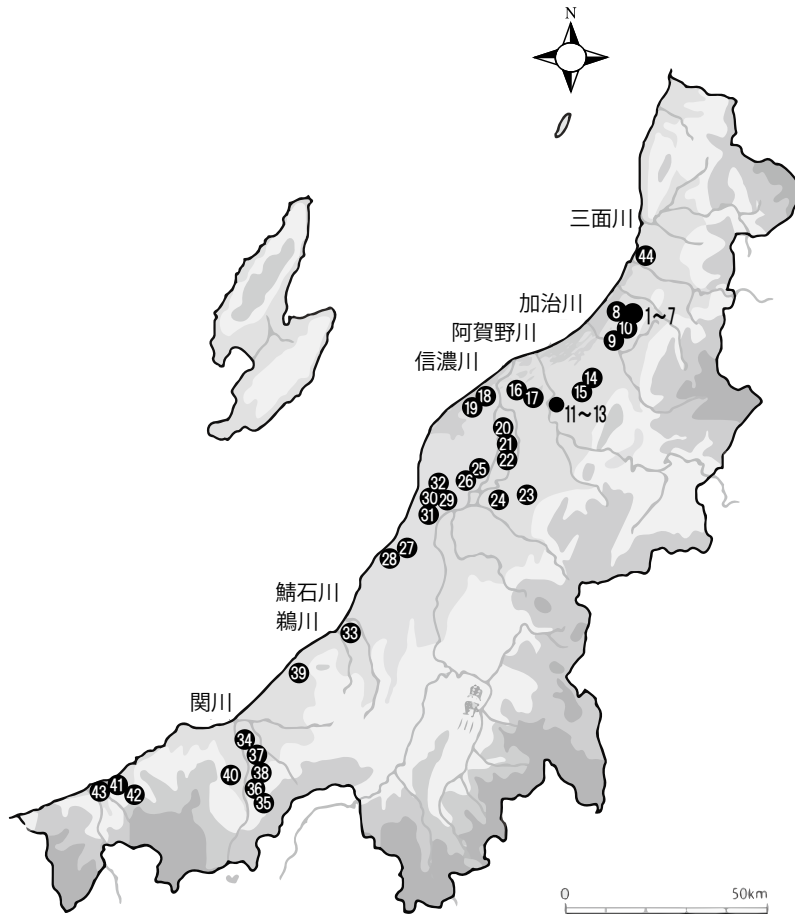
なお、本稿では全て実見できなかったため、実見を経て対象・対象外とするものがある。また、時代については、報告書の記載、遺構、共伴遺物により設定した。

（2）新潟県内の木製発火具の概略

新潟県内では44遺跡125点の発火具が確認できた（表1、表4）。内訳は火鑽板85点、火鑽杵40点、集計に入れていないが位置づけにあてはまらなかった資料が17点ある。出土遺跡は県北から糸魚川地域の沖積地で見つかる。時代は古代が最も多く、次に続く中世とは54%の差がある（図4-1）。この他に、時代がはっきりしないものが数点ある。古代では飛鳥時代（延命寺107, 108）が古く、11世紀前半（一之口）が新しい。多数が8～10世紀のものである。中世は12～14世紀（浦廻46）、15～16世紀（馬場屋敷下層49～52）など時期は幅広い。現地点で古代以前からの出土は見つけられなかったが、古墳～古代（腰廻27, 28）の2点を考慮に入れる必要がある。

遺跡内での出土地点を時代別にまとめたものが、（図4-2）である。主に古代は溝、自然流路、河川跡、中世では井戸、溝、河川跡などから出土する。井戸出土は中世が大半で、古代の出土地点と明確な差が出た。

（図4-3）は火鑽板の長さを示したものである。破損品が多く、現地点では長さで特徴を見出すことは難しい。これは火鑽杵も同様である。一方、発火効率に関わる火鑽板の厚さ・幅（図4-4）、火鑽杵の径



遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代
1 蔵ノ坪	古代	16 駒首湯	古代	31 八幡林	古代
2 船戸桜田2次	古代	17 牛道	古代	32 大武Ⅱ	中世
3 船戸桜田5次	古代	18 的場	古代	33 箕輪Ⅱ	古代
4 船戸川崎4次	古代	19 緒立C	古代	34 一之口	古代
5 船戸川崎6次	古代	20 浦廻	中世	35 仲田	中世
6 屋敷2次	古代	21 小坂居付	中世	36 今池	中世
7 下町・坊城V	中世	22 馬場屋敷下層	中世	37 子安	中世
8 青田	古代	23 鬼倉	古代	38 延命寺	古代
9 住吉	中世	24 石田Ⅱ	古代～中世	39 新保	中世
10 野中土手付	古代	25 江添C	古代	40 海道	中世
11 曾根	古代	26 北小脇	中世	41 田伏山崎	古代
12 曾根Ⅱ	古代	27 寺前	中世	42 山岸	古代・中世
13 曾根Ⅲ	古代	28 番場	不明	43 六反田南V	古代
14 腰廻	古墳～古代	29 姥ヶ入製鉄	不明	44 窪田	中世～近世
15 発久	古代	30 山田郷内	中世		

表1 出土遺跡

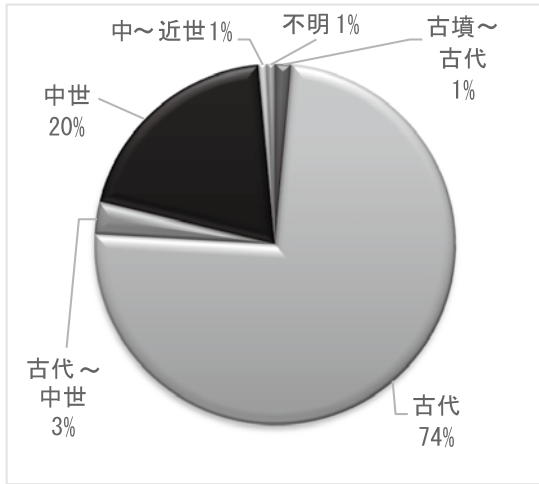


図 4-1 出土発火具の時代

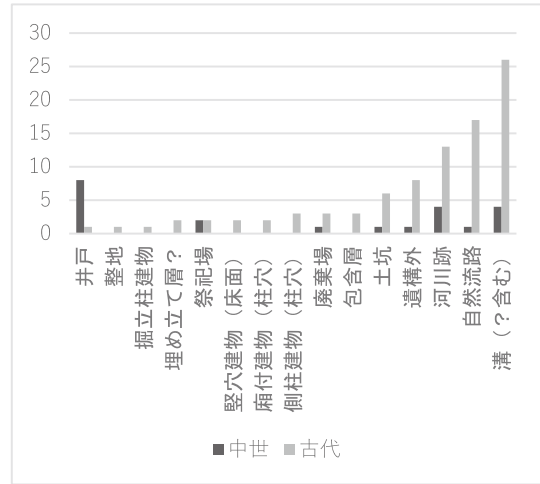


図 4-2 時代別の出土地点と点数

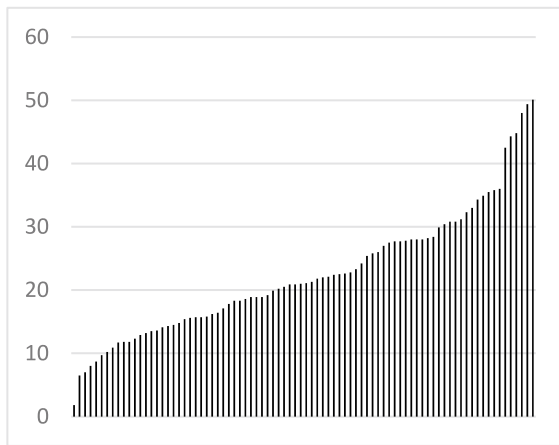


図 4-3 火鑽板の長さ (cm)

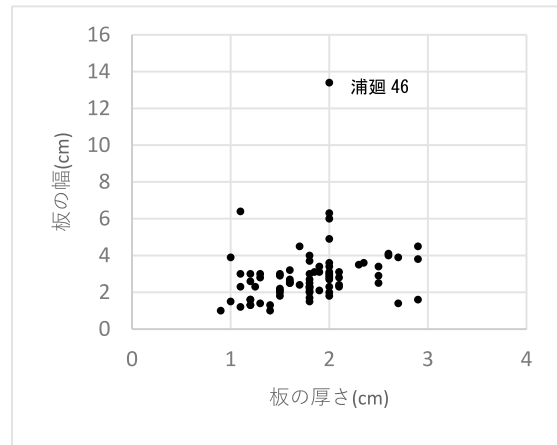


図 4-4 火鑽板の厚さ・幅 (cm)

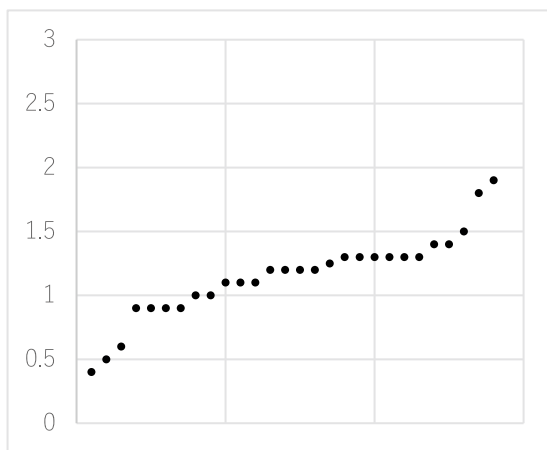


図 4-5 火鑽杵の径 (cm)

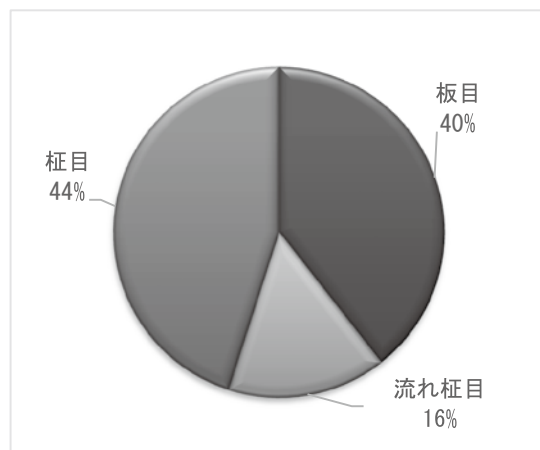


図 4-6 火鑽板の木取り

図 4 木製発火具の分布傾向

(図4-5)は、数値の幅は小さくいずれも類似した傾向が見えた。

火鑽板・火鑽杵の樹種は樹種同定された40%のうち、クリ1点(新保120)、ヒノキ科2点(駒首潟37、海道126)、ヒノキ亜科1点(駒首潟38)の他はスギ・針葉樹が占めた。火鑽板の木取りは図4-6のとおり、柾目44%、板目40%、流れ柾目16%で、柾目と板目がほぼ半分ずつである。火鑽杵は判別できたものは全て削り出しで、枝材はなかった。これら樹種と木取りについて、地域・時期的な特徴は見出すことはできなかった。

(3) 新潟県内の主な出土遺跡

新潟県内の地域区分を示したあと、44遺跡の中で主な遺跡の概要を示す。

新潟県内は上越・中越・下越地方に分けられるが、それをさらに細分する。地域区分は「第5章 古代」『新潟県の考古学Ⅲ』(2019)で使用されているものを、筆者が5地域(阿賀北地域、信濃川地域、柏崎地域、高田平野、糸魚川地域)に分けた(図5)。

阿賀北地域は下越地方にあり、阿賀野川以北に位置する。現在の村上市から新潟市北区が該当する。発火具は16遺跡から出土した。信濃川地域は下越・中越地方にあり、信濃川流域に位置する。現在の新潟市から長岡市が該当する。発火具は16遺跡から出土した。なお当地域は『新潟県の考古学Ⅲ』(2019)ではさらに細分されているが、出土遺跡が分散しているため本稿では一括している。柏崎地域は中越地方にあり、鶴川・鯖石川流域に位置する。現在の柏崎地域が該当する。発火具は1遺跡のみである。高田平野は上越地方にあり、現在の上越市、妙高市が該当する。発火具は7遺跡から出土した。糸魚川地域は新潟県最西端地域の沿岸部に位置する。現在の糸魚川市が該当する。発火具は4遺跡から出土した。

A：阿賀北地域

胎内市 蔵ノ坪遺跡(古代)(図19-1、表4(1)-1, 3) [文献No40]

新潟平野の北東部、櫛形山脈西縁の扇状地に立地する。平安時代の遺構・遺物、縄文時代・中世の遺物がある。平安時代が中心で、8世紀後葉から9世紀後葉を中心とする土器、木製品などが出土した。木簡のうち1点は、国司の「少目」の館宛ての荷に付けられていた荷札木簡である。また、「津」と書かれた墨書土器の出土から、当遺跡が古代の津に関連した施設の可能性が指摘されている。発火具は2点あり、いずれも包含層出土である。

胎内市 下町・坊城遺跡(中世)(図19-10、表4(1)-10) [文献No17, 18]

多量の青磁、白磁、緑釉陶器などが出土した。当遺跡は越後国奥山の和田氏の屋敷跡とされ、江上館以前の奥山荘の中心地の政所条の可能性が指摘されている。発火具が見つかった川跡からは、卒塔婆、木製

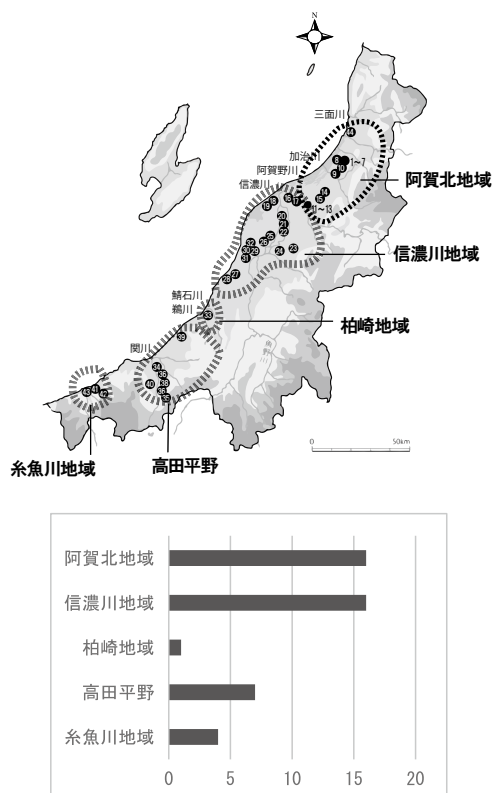


図5 県内の地域区分(上) 出土遺跡数(下)

仏像、漆器、下駄など多量の木製品が出土した。

新潟市 野中土手付遺跡（古代）（図18-16、図19-17, 18、表4（1）-16～20）〔文献No40〕

新潟平野の北東部、沖積地の自然堤防上の微高地に位置する。時代は古墳時代前期、古墳時代後期、奈良・平安時代である。古墳時代の竪穴建物のほか、古墳時代～古代まで流れていた自然流路から多量の土器や木製品・木簡が出土したが、木製品は各層混在のため時期が判断できないとのことである。

阿賀野市 発久遺跡（古代）（図19-29、図21-33, 34、表4（1）-29～36）〔文献No20〕

阿賀北南部、丘陵地帯を離れた旧福島潟の自然堤防上に位置する。兵庫の可能性が指摘されている。当遺跡の周辺には古代の遺跡が多く点在し、隣接の曽根遺跡は須恵器の生産流通に関連する官衙関連遺跡として知られる（田中2019）。発火具が出土した下層からは土器のほかに木簡、祭祀具等が出土した。

B：信濃川地域

新潟市西区 緒立C遺跡（古代）（図21-43、表4（1）-42～45）〔文献No4〕

新潟平野の新砂丘列と信濃川の間位置する。砂丘の内陸側に形成された後背湿地と河川の氾濫により、周辺は近年まで広大な湿地帯となっていた。南西には古墳時代前期の円墳がある緒立A遺跡が、東には組織的漁業を行ったとされる官衙的性格を持つ場遺跡が位置する。8世紀～9世紀には倉庫で構成された官衙関連集落として機能することが推定されている。低地部には水際の祭祀が行われたと思われる遺物出土した。発火具は4点出土し、うち火鑽板（43）火鑽杵（44）は大量の木製品、祭祀具、木簡が見つかった祭祀場からの出土である。なお隣接の的場遺跡からも発火具が出土している（表4（1）-40, 41）。

新潟市南区 浦廻遺跡（中世）（図18-46、表4（1）-46）〔文献No28〕

旧白根市に所在し、越後平野中央部、信濃川と中ノ口川間の低湿地に位置する。中世の大型土坑、畝状遺構などから遺物が出土した。「南無阿弥陀仏」等の卒塔婆、呪符、人骨等の出土や遺跡の立地から、「鎌倉時代後期（13世紀後半から14世紀前半）、水辺における葬送・供養に関連した遺跡と考えられる」と評価されている（本間2003）。火鑽板（46）は8か所の臼がある。差歯下駄の歯を転用した可能性が指摘されている。

新潟市南区 馬場屋敷下層遺跡（中世）（図18-52、図19-49, 50、表4（2）-49～52）〔文献No13〕

旧白根市に所在し、近隣に浦廻遺跡が位置する。中世（鎌倉時代後期）の建物跡や溝のほかに、細杭によって保護または区画された墓址群や、木串等を用いた祭祀跡が見つかった。木串で囲った内部にあった多量の炭や骨片の存在から、火を用いた祭祀の可能性が指摘されている。遺物は「急急如律令」が記された呪符木簡、人形、馬形をはじめ、大量の箸状木製品が出土した。

出雲崎町 寺前遺跡（中世）（図20-60、表4（2）-59, 60）〔文献No38〕

主に中世、平安時代、縄文時代後期、晩期の遺構や遺物が出土した。主な時代は12～15世紀にわたるもので、建物群や井戸、木道などがある。珠洲焼、青磁、白磁、硯のほかに、鍛冶関連遺物も多数あり、鋳型や鍋、梵鐘、文教法具などを生産していたことが推測されている。また、卒塔婆や呪符などの木簡も見つかったことから、街道に面した在地有力者の屋敷の可能性が指摘されている。火鑽板（60）は溝から出土し、須恵器、土師質土器、珠洲焼、下駄、箸、漆器、曲物などが共伴する。

長岡市 山田郷内遺跡（中世）（図18-63、図21-64、表4（2）-63, 64）〔文献No1〕

旧和島村に所在し、島崎川流域に位置する。周辺は中世城館や塚が多く見つかっている。当遺跡はその中で発見数の少ない一般集落とのことである。鍛冶工房、建物、水田などの遺構、土師器、青磁、珠洲焼、呪符等多種の遺物がある。また、仏教寺院の作法に則った曲物の出土がある。発火具は火鑽板が2点（63, 64）SX30の祭祀信仰エリアから出土した。呪符木簡、舟形、馬形、刀形、鐮、青磁、白磁、土師器、銅

製仏具土器、人面墨書、下駄などが共伴する。

長岡市 八幡林遺跡（古代）（図19-65、表4（2）-65, 66）〔文献No2〕

旧和島村に所在し島崎川の谷に向かって半島状に突出した低丘陵と、その周辺に広がる湿地の上に位置する。周辺は古代の遺跡が多く、『延喜式』に記載された古志郡の神社6座のうち3座が所在し、中核的な地域である。当遺跡は石屋城・古志郡郡衙関連遺跡として知られる（田中2019）。発火具は、火鑽板（65）火鑽杵（66）が多量の木製品や土器とともに見つかった。

C：柏崎地域

柏崎市 箕輪遺跡（古代）（図20-72、図21-69, 75、表4（2）-67～75）〔文献No42〕

柏崎市鶴川右岸の丘陵先端付近の沖積地に位置する。奈良・平安時代（8～11世紀）と中世（12～16世紀）の遺構と遺物が多量に見つかった。古代では馬駅に関する木簡や「上殿」の墨書土器があることから、馬駅村に関する館衙関連遺跡と考えられている。発火具は主に流路14から見つかった。流路14からは、黒漆塗壺鐙や木簡、多量の木製品や土器などが出土した。

D：高田平野

上越市 一之口遺跡東地区（古代）（図19-83、図21-84, 86、表4（2）-76～90）〔文献No22〕

上越市高田平野西側の関川左岸の沖積地上に位置する。時代は古墳時代前期・後期・古代・中世である。古代は、計画区画された9世紀後半以前の掘立柱建物のほか、11世紀前半の祭祀が行われた溝SD1・SD1'、井戸がある。溝からは発火具のほか多量の木製品や木製祭祀具が出土した。同じ遺構から見つかった灯明皿は、木製発火具との結びつきを断言できないまでも関係を無視できない（鈴木1994）と評価されている。

上越市 延命寺遺跡（古代）（図18-94, 95, 97, 107、図19-106、図20-93, 99, 101, 102, 104、図21-105、表4（2）-92～96、表4（3）-97～117）〔文献No29〕

上越市飯田川左岸の沖積地に位置する。時代は古墳・飛鳥・奈良時代である。飛鳥時代では竪穴建物、平地建物、掘立柱建物があり、周溝をとまなうものがある。奈良時代は飛鳥時代と同様の掘立柱建物、祭祀行為がみられる溝、土坑、素掘りの井戸がある。土坑SK26では律令祭祀具が一括廃棄された状態で見つかった。木簡や帯金具、祭祀遺物の存在から、奈良時代では頸城郡（役所）の出先機関の可能性が高まった（山崎2008）と評価されている。発火具の出土は県内で最も多い。火鑽板（107）、火鑽杵（108）は飛鳥時代の竪穴建物SI006からセットで出土した。

上越市 新保遺跡（中世）（図19-121、表4（3）-120, 121）〔文献No34〕

高田平野の北東部、独立丘およびその南・東側に位置する。縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世、近世の遺構や遺物が見つかった。平安時代では木炭郭木棺墓が見つかり、副葬品などから有力者の近親や縁者の可能性が指摘されている。中世では掘立柱建物の柱穴や素掘りの井戸が多数見つかり、遺物は珠洲焼、青磁、白磁などが少量出土した。発火具は中世のもので、井戸から出土した。

上越市 仲田遺跡（中世）（図20-122、表4（3）-122）〔文献No39〕

頸城平野の南東端、別所川・大熊川によって作出された扇状地の末端に位置する。時代は古墳時代・古代・中世で、ほとんどが中世（11世紀後半～15世紀）の遺構である。木製品のうち、漆器・曲物などは搬入品とされる。素掘りの井戸が多数あり、そのうちSE265からは火鑽板（122）がヒョウタンの仲間・果実と出土した。ヒョウタンの仲間が出土することから「水に関連する祭祀的な意味合いで沈められたことや、井戸として機能しなくなって埋め戻しの際に投棄されたこと」が推測されている（新山2003）。

E：糸魚川地域

糸魚川市 田伏山崎遺跡（古代）（図20-128、表4（3）-128）〔文献No37〕

日本海へ向かって舌状に張り出した丘陵の末端部に位置する。弥生時代、古墳時代、中世の遺物や遺構が見つかった。古墳時代前期の遺物のなかには、畿内系屈折脚の高杯や、管玉、管玉未製品がある。古代の自然流路からは、墨書土器の小壺、斎串、八稜鏡、腰帯などが見つかったことから、祭祀が行われていた可能性が推測されている。

糸魚川市 六反田南遺跡（古代）（図18-139、表4（3）-139）〔文献No44〕

糸魚川市海川右岸の沖積地に位置する。時代は弥生後期・古墳前期・後期、古代、中世と幅広い。古代は竪穴建物、掘立柱建物などが検出され、出土土器から8世紀前半～9世紀中頃と報告されている。建物の規模などから8世紀中頃では「上位階層有力者の関与が想定でき、官衙関連遺跡に準ずるような、糸魚川地域の中心的な集落」と推測されている（中川2016）。火鑽板（139）が見つかった流路1からは古墳前期～古代の木製品が多数あり、下駄、刀子、箸状木製品、呪符木簡、人形、建築部材などが出土した。

糸魚川市 山岸遺跡（古代～中世）（図18-135、図20-132、図21-131、表4（3）-130～138）〔文献No43〕

遺跡は谷の中に位置し、中央に独立丘陵がある。縄文時代早期末～近世までの遺物があり、中世（13～14世紀）が中心である。古代から中世にかけて灰釉陶器・緑釉陶器・木製祭祀具など多様な遺物があり「比較的豊かな集落であった可能性が高い」と評価されている。13世紀中葉頃では傘紋入の長柄の銚子などの出土から「北条氏一門の名越氏に関連する人物と関わりをもった」可能性が指摘されている。遺跡が縮小した14世紀以降では「調査区南東付近に宗教関連施設が存在した可能性」があるとのことである（春日2012）。木製発火具9点のほかに、火打鎌が1点出土した。火鑽板（132, 135）はSR3194出土で、灰釉陶器・須恵器・土師器・挽物・荷札状木製品・斎串・刀子形・下駄・扇子等が共伴遺物である。時代は10世紀頃とされている。火鑽板（131）は中世だが破損しており詳細は不明である。

3 火鑽板の観察と記号化・分類の視点と方法

（1）観察と記号化の視点

火鑽板85点のうち、寸法が分かる83点を対象とする。火鑽板はバラエティがあり、例えば板材の形・白の個数だけではなく、白が左右中央どちらに配置されるのかなど多様である。これらは詳細な用途の検討することができる可能性を考える。まず火鑽板の情報を記号化し、そこから分類を行う。（1）では記号化を行う観察項目6項目と内容を提示する。なお、項目が多いため記号は観察内容の頭文字をとった。

A：観察項目① 火鑽板の形

火鑽板の形を観察し、板状（大）、板状、棒状、転用、その他の5種類に分ける。棒状、板状の基準は県内出土の火鑽板幅（図6）をもとに、棒状（2.9cmまで）、板状（3～4.4cm）、板状（大）（4.5cm以上）とする。転用は下駄や天秤棒など製品を転用したもので火鑽板（46）が該当する。その他については、他県で見られる火受けの付いた火鑽板など特殊な火鑽板が該当し、必要に応じて付け加えていくことを想定した項目である。

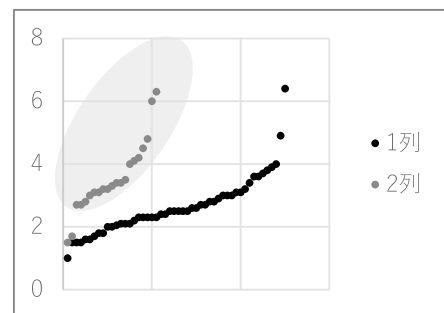


図6 白列に対する板の幅 (cm)

B：観察項目② 火鑽臼の個数

火鑽臼の個数を分ける。本稿では最終的な記号化で得られたデータ（図8）から、I（臼が5個以上）・II（臼が4個以下）に分ける。（図8）は火鑽臼の配置の偏り・使用面の有無を示したもので、4個を境に使い方の変化が分かる。つまり、5個以上は板の両端部まで使用されるため偏りがなく、4個以下は板の長さ対して臼が少ないため、左右や中央に必然的に偏りができる。この中には破損により板の長さが短く判断が難しいものも含まれるものの、本稿では上記の考え方からこのように分ける。

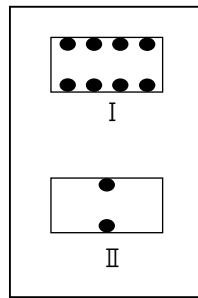


図7 模式図

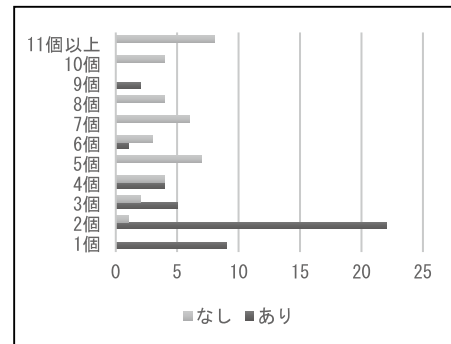


図8 臼数別・臼配置の偏り
（観察項目⑤⑥）の該当の有無

C：観察項目③ 火鑽臼の列

火鑽板にあげられた臼の列を分ける。平行は火鑽板に対して平行に並んでいるもの、不整形は台形等の火鑽板で、火鑽板（46）のように平行に臼が並んでいないものが該当する。

D：観察項目④ 火鑽臼の間隔

火鑽臼どうしの間隔を、連続、単発で分ける。連続は臼が隣接してあげられたもの、単発は主に火鑽臼が隣接しないもの、連単は上記の要素を併せ持つものが該当する。なお、V字の切れ込みのみで臼があげられていないものも「1」とし、臼1つとV字の切れ込みが隣接する場合は「連続」とする。

E：観察項目⑤ 火鑽臼の偏り

火鑽板の中心部を基準に、主に単発の火鑽臼が火鑽板のどの部分に偏っているかを分ける。両端に偏る場合は「rl（右左）」（84）、または「lr（左右）」と示し、2列の臼のうち手前の1列が連続で奥が単発の場合は、手前を優先にし「×r（単発の偏る方向）」※「×（ハツ）」無しの意とする。基準となる向きは（第2項（1））で示したとおりである。

F：観察項目⑥ 火鑽臼の位置

火鑽板の平面・側面どの部分に火鑽臼があげられているかを、上面、両・両側面で分ける。基準となる向きは（第2項（1））で示したとおりである。

（2）分類の視点

以上の観察項目をもとに、本稿では類1・類2・類に属するものに位置づけ分類名とする。

類1は「観察項目①火鑽板の形」、類2は「観察項目②火鑽臼の個数」、そして臼の列を示すため類に属するものとして「観察項目③火鑽臼の列」「観察項目④火鑽臼の間隔」とする。類の2項目は火鑽板において大きく大別することができるもので、分類名はこれらをつなぎ合わせた「①・②-③④」とし、例えば図10-107の場合「板形（PP）・5個以上の臼（II）-臼が1列（1）の連続したもの（連）」の意となる。その他の観察項目⑤⑥は、個々の火鑽板をより細分した項目である。当該項目は分類名に入れず、個別で検討する際の判断材料とする。このような視点から、記号化と分類は図9で示したプロセスで行う。

(3) 記号化と分類の方法

火鑽板85点のうち寸法と火鑽臼の数が判別できた83点を対象として、(1)で示した6つの観察項目をもとに記号化と分類を行う。記号化は、ひとつの火鑽板に対し各観察項目に該当するものを選択し完成した記号列である。その記号列のうち、類1・類2・類に属するものを分類名とする。観察項目の一覧表は(表2)に示し、観察項目に該当する例を表中に記載した(表2「該当例」の項目、図10と対応)。分類方法を模式的に示したものは(図11)に示した。

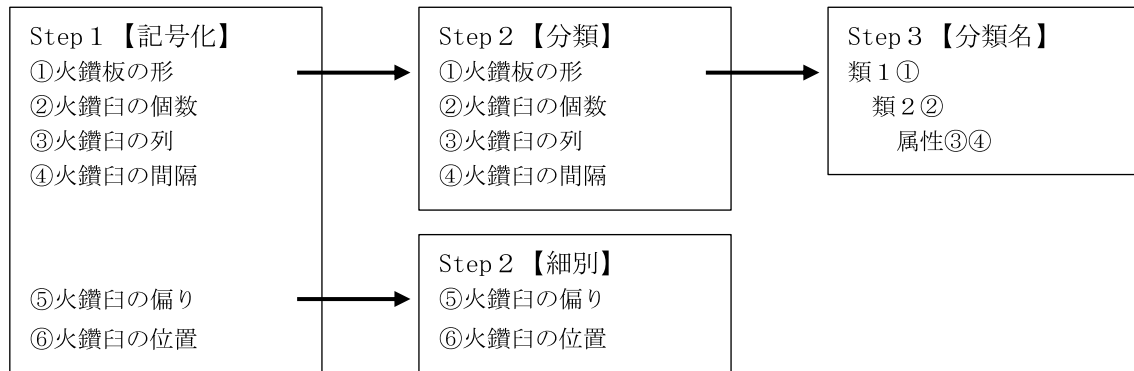


図9 火鑽板の観察と記号化・分類のプロセス (案)

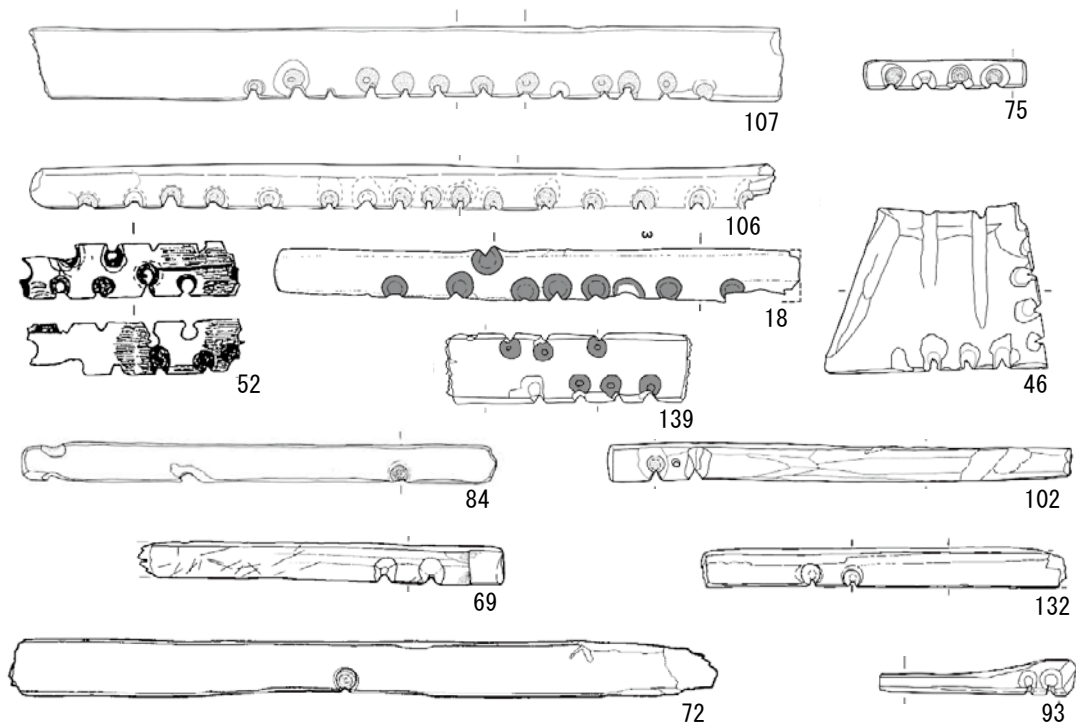


図10 観察項目の該当例
表2と対応
遺跡名は本文末の実測図参照

下記観察項目における火鑽白は、使用・未使用は考慮していない。

表2 火鑽板の観察項目と分類の一覧表・該当例（該当例は図10と対応）

分類	記号化の観察項目	記号		該当例	観察の内容
類1	①火鑽板の形	・板状（大）	PP (Plate)	107	<ul style="list-style-type: none"> ・板状（大）は幅4.5cm以上。 ・板状は幅3～4.4cm。 ・棒状は幅2.9cm以下。 ・転用品は、下駄や天秤棒などの転用品。 ・その他は上記に当てはまらないもの。
		・板状	P (Plate)	52、72、139	
		・棒状	S (Stick)	18、69、84、106、132	
		・転用	D (Diversion)	46、93	
		・その他	O (Other)	75	
類2	②火鑽白の個数	・白多数	I	18、46、52、106、107、139	<ul style="list-style-type: none"> ・ I は白が5個以上。 ・ II は白が4個以下。
		・白少数	II	84、69、72、75、93、132	
類に属するもの	③火鑽白の列の数	・平行に1列	1	69、72、84、93、106、107、132	<ul style="list-style-type: none"> ・白が1つのみの場合も1列とする。 ・不整形は台形の転用品の端部に沿うように火鑽白があげられている場合を指す（例46）。
		・平行に2列	2	18、52、139	
		・不整形に1列	1'	※県内では該当なし	
		・不整形に2列	2'	46	
	④火鑽白の間隔	・連続	連	46、52、69、75、93、102、106、107、132	<ul style="list-style-type: none"> ・連続は、火鑽白が隣接しているもの。 ・単発は、火鑽白が隣接しないもの。 ・連続と単発は上記が混在するもの。
		・単発	単	72、84	
		・連続と単発	連単	18	
	⑤火鑽白の偏り	・右偏り	r (right)	69、93	<ul style="list-style-type: none"> ・火鑽板の中央を中心とした場合の偏り。 ・単発が左右端にある場合は、右寄り+左寄り「rl」となる（例84）。 ・2列の火鑽白のうち1列が単発の場合は「×」の次に偏りを示す。
		・左偏り	l (left)	102、132	
		・中央	m (middle)	72	
		・左右	rl	84	
		・なし	×	※×1…18（2列目の単発が左偏り）	
	⑥火鑽白の位置	・上面	/u (upper)	18、46、69、72、75、84、93、102、106、107、132	<ul style="list-style-type: none"> ・第2項の発火具の位置づけに基づき向きを決定し、分類する。
		・両、両側面	/bs (both side)	52	

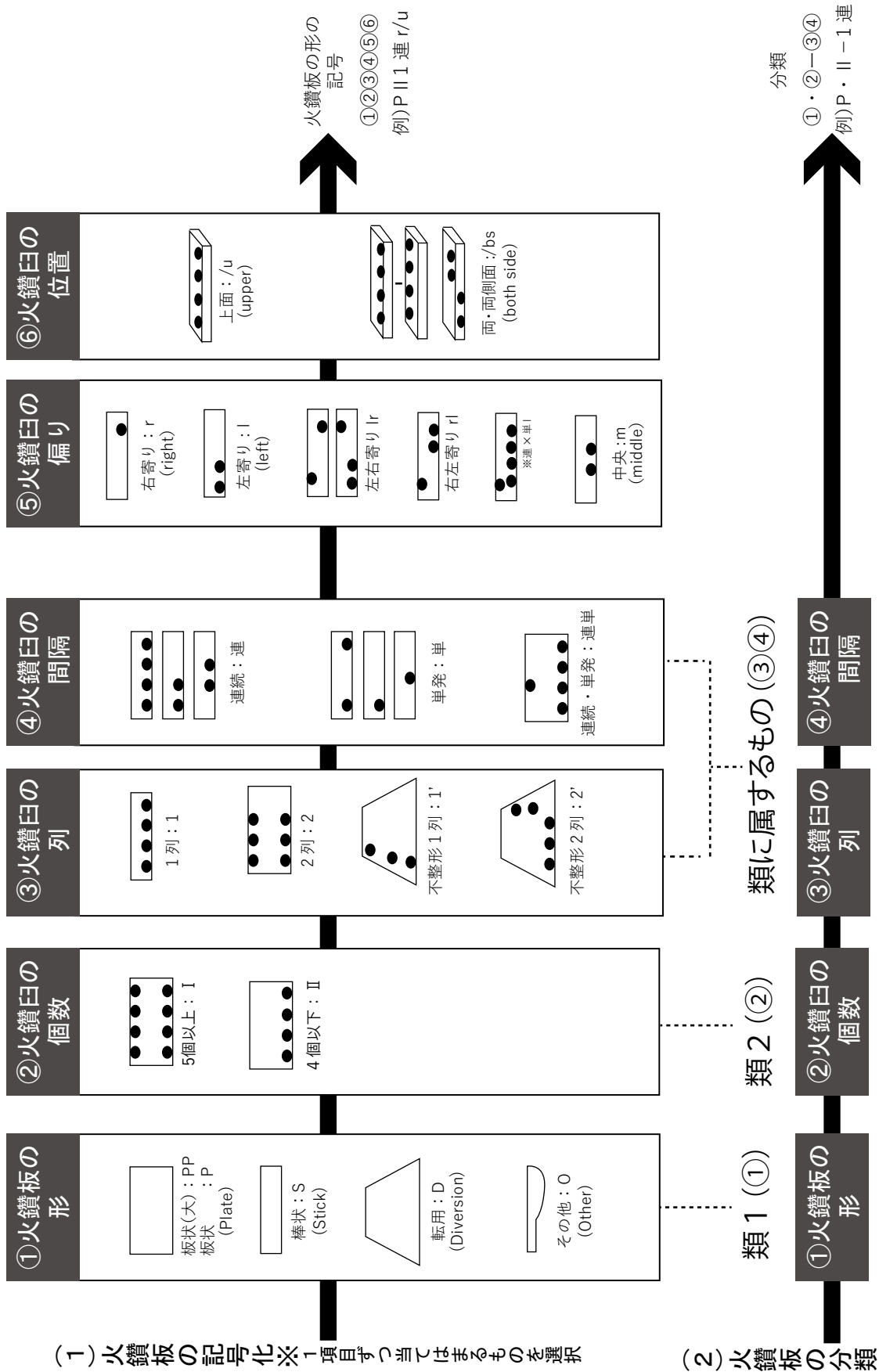


図11 記号化と分類のチャート(案)

4 火鑽板の分類結果と考察

(1) 火鑽板の分類結果

36種、16類に分類できた。本項(1)では類の説明を行う。該当資料の提示は、(第2項(3))で提示した主な遺跡出土の火鑽板を中心に記載する。提示場所は本稿末尾の実測図(図18~21)である。

表3 分類結果一覧表

記号化							分類
① 板形	② 臼数	③ 列	④ 間隔	⑤ 偏り	⑥ 位置	該当数	
D	I	2'	連	×	u	1	D・I-2'連
D	II	1	連	r	u	1	D・II-1連
O	II	1	連	r	u	1	O・II-1連
O	II	1	連	×	u	1	
PP	I	2	連	×	u	3	PP・I-2連
PP	I	2	連	rl	bs	1	
PP	I	1	連	×	u	1	PP・I-1連
P	I	1	連	×	u	2	P・I-1連
P	I	2	連	×	bs	3	P・I-2連
P	I	2	連	×	u	7	
P	I	2	連	×l	u	1	
P	I	2	連単	×r	u	1	P・I-2連単
P	II	1	単	×	u	1	P・II-1単
P	II	1	単	l	u	1	
P	II	1	単	m	u	2	
P	II	1	単	rl	bs	1	P・II-1連
P	II	1	連	×	u	1	
P	II	1	連	m	u	1	
P	II	1	連	r	u	6	
S	I	1	連	×	u	8	S・I-1連
S	I	1	連	×	bs	2	
S	I	2	連	×	u	4	S・I-2連
S	I	2	連単	×l	u	1	S・I-2連単
S	II	1	単	×	u	1	S・II-1単
S	II	1	単	l	u	3	
S	II	1	単	m	u	1	
S	II	1	単	r	u	2	
S	II	1	単	rl	u	2	
S	II	1	連	×	u	3	S・II-1連
S	II	1	連	m	u	1	
S	II	1	連	l	u	8	
S	II	1	連	r	u	7	
S	II	1	連	rl	u	1	
S	II	1	単	rl	bs	1	S・II-1連単
S	II	1	単	lr	bs	1	
S	II	2	単	rl	u	1	S・II-2単

板形Dのグループ

報告書内で製品の転用とされているものである。

D・II-1連

図20-93(古代)が該当する。長さ11.8cm、幅2.1cmの完形品で、連続する臼が2個並ぶ。取手の転用と報告されている。持ち手の部分にはさらに細く、火鑽板として使用するには不慣れた作りである。その他に分類できそうだが、本稿では転用とした。

D・I-2'連

図18-46(中世)が該当する。差歯下駄の転用品で台形状の板である。臼が不整形に2列に連続に並ぶ。

板形Oのグループ

その他の板形である。

O・II-1連

図21-75(古代)、64(中世)が該当する。長さ9.7cm、11.8cmでいずれも完形品と思われる。連続する臼が4個並ぶ。火鑽板の中でも極端に短く、かつ完形品のためその他に分類した。

板形PPのグループ

4.5cm以上の板幅で、全てI類である。臼が2列のものが多い。

PP・I-2連

図18-95, 97, 139(古代)などが該当する。板幅が広い資料で、139は4.5cm、95, 97は6cm以上である。臼は平行2列で連続に並ぶ。

PP・I-1連

図18-107(古代)が該当する。板

幅が4.9cmと広く、白は平行1列で連続に並ぶ。

板形Pのグループ

3～4.5cmの板幅で、I類が14点、II類が13点である。白の列は1列2列がほぼ半数ずつである。

P・I－1連

図18-94など（古代）が該当する。板幅平均が約3cm、白は平行1列で連続に並ぶ。

P・I－2連

図18-16, 63, 52, 135（古代）、図19-49など（中世）が該当する。類の中で中世が最も多く、他に比べて両・両側面の使用率が高い。当類の板幅は3.1～4.1cm、白は平行2列で連続に並ぶ。

P・I－2連単

図19-17（古代）が該当する。板幅3.4cm、白は平行に2列に並ぶ。そのうち手前1列の白は連続で、奥側1列は単発の右偏りである。類似したものにS・I－2連単（図19-18）があり、この2点は野中土手付遺跡出土である。

P・II－1単

図20-72, 128など（古代）、図20-60（中世）が該当する。板幅3～3.9cm、長さ18.9～44.3cmと比較的大きな板だが、白が1～3個と少数のものである。白が複数の板もあるが間隔が広いので単発としている。類の中で白の偏りは統一的ではない。60のみ両面使用である。

P・II－1連

図20-40, 41, 104など（古代）が該当する。幅3～4cmの板で、白が連続している。白の数は1個が1点、2個が6点、4個が1点である。偏りにやや類似性があり、右偏りが優勢である。なお100は右端部の破損で分類が不確定のため図示していない。

板形Sのグループ

3cm以下の板幅で、I類が15点、II類が32点で、白の列は2列が6点、1列が41点である。

S・I－1連

図19-1, 29, 65, 106（古代）、図19-121（中世）などが該当する。中世は（121）と図示していないが（表4（1）-47）の2点は両・両側面使用である。当類の板幅は1.6～2.7cm、白は1列に連続で並ぶ。（106）は板の長さ44cm、白が16個で最も大きい。

S・I－2連

図19-50（中世）など、図示していないが時期がはっきりしないものが2点（表4（1）-28、表4（2）-62, 91）該当する。当類の板幅は1.5～2.8cm、白は2列に連続で並ぶ。比較的狭い板幅に6～16個の白が2列で並んでいるため、密集している。

S・I－2連単

図19-18（古代）が該当する。板幅は2.7cm、白は2列に並ぶ。手前1列の白は連続で、奥側1列は単発の左偏りである。類似したものにP・I－2連単（図19-17）があり、この2点は野中土手付遺跡出土である。

S・II－1単

図21-33, 34, 84, 86, 105など（古代）、図示していないが124（中世）が該当する。5遺跡中3遺跡が遺跡内で複数点見られる。幅1.4～2.8cmの板で、1～4個の白が単発であけられている。白の数は1個が最も多く、図示していないものも合わせると6点ある。類の中で白の偏りに類似性はない。

S・II-1連

図20-99, 101, 102, 132、図21-69, 43 など（古代）、図20-122（中世）が該当する。16類の中で最も多い20点が該当する。幅1～2.9cmの板で、2～4個の臼が連続する。臼の数は2個が最も多く、図示していないものを合わせると12点ある。類の中での臼の偏りに類似性はない。なお延命寺遺跡の火鑽板16点中6点が当類に該当する。

S・II-1連単

図21-56（古代～中世）が該当する。幅2.1cm、1.8cmの板で、3個の臼が連続する。図示していないものも合わせると、全て両・両側面を使用している。

S・II-2単

図21-131（中世）が該当する。板幅2.3cmで、2個の臼が2列に1個ずつ並ぶ。ただし破損が激しく、判別できているもの以外に臼が存在する可能性がある。

（2）火鑽板の使い分けについての考察

A：類1の傾向

板状（P）が27点、棒状（S）が47点と棒状が多くを占めた。そこから臼の個数（I・II）で見ると、板状はI類が14点、II類が13点、棒状はI類が15点、II類が32点である。つまり、板状の火鑽板は幅が広い分バラエティがあり、一方で棒状は幅が狭い分4個以下の臼のものが多。このことから、板を選択する際にある程度の発火回数を決めていた可能性がある。

B：類1・2と出土位置

発火具の出土地点の性格は第2項で示したとおり、自然流路、溝、土坑、井戸など主に6地点に大別できる。16類のうち該当数が多かったP・I-2連（11点）、S・II-1連（20点）を見ると多様な出土位置（図12）であり、全体的に同様の傾向がみられる。例が少ない類もあるため一概に言えないが、複数点該当している類のなかで、特定の類が特定の出土地点のみから見つかることはなく、板の形で廃棄場所の限定はされないとと言える。

出土地点の視点から類を概観すると、「類2（I・II）」の視点で若干の傾向が見えた項目がある。（図13）は中世の火鑽板を類別に示したもので、井戸・溝で異なった傾向が見えた。井戸出土（赤枠）は4分の3がI、溝出土は4分

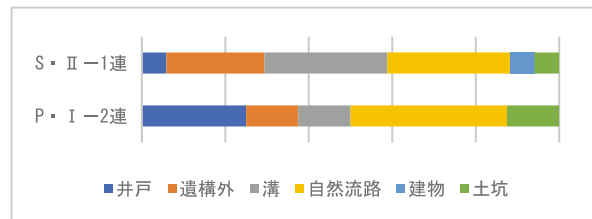


図12 類別・多様な出土位置

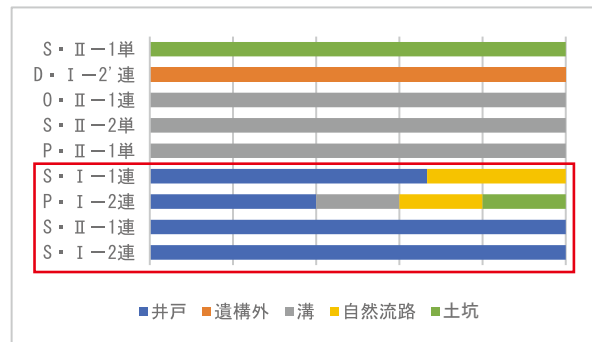


図13 井戸で出土する4類（中世）

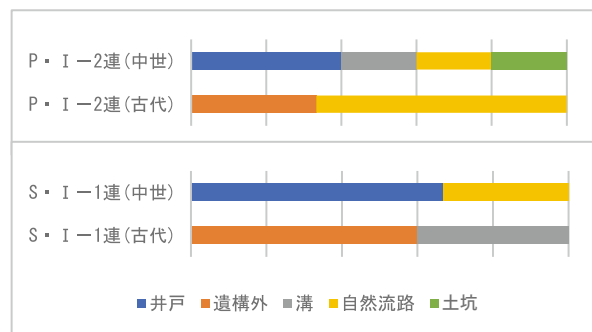


図14 時代別で異なる同じ類の出土位置

の3がⅡであった。つまり、井戸からは多数の火鑿臼のあるⅠが、溝からは少数の火鑿臼のあるⅡが出土していることが分かった。

また、(図14)はP・Ⅰ-2連、S・Ⅰ-1連を時代別に示したもののだが、ともに時代をとおして同様の出土傾向はみえなかった。

つまり、ある類や時代において、何らかの傾向が見える可能性が分かった。

C：類と時代・地域

まず、視点を地域に広げて、傾向が顕著にみえた類の分布を時代別に考察する。

(図17-1, 2)は分類したもののうち、該当数の多かったP・Ⅰ-2連11点、S・Ⅱ-1連20点を時代別に地図に示したものである。(図17-1)はP・Ⅰ-2連の分布図である。当類は類のなかで中世が最も多い6点が該当し、うち4点が信濃川流域に集中する。(図17-2)はS・Ⅱ-1連の分布図である。20点中19点が古代で、中世が多いP・Ⅰ-2連と対称的である。このふたつの類からは、特定の時代で多用された火鑿板の形の存在をうかがわせる。

さらに視野を広げて、「類2(Ⅰ・Ⅱ)」を時代別に考察する。出土数をみると、Ⅰは35点(古代17点、中世13点、その他5点)、Ⅱは48点(古代42点、中世5点、その他1点)で、出土点数の大きな違いはあるものの、古代と中世で類の比率が変化する結果が得られた(図15)。これらを時代別に示したものが(図17-3, 4)である。

(図17-3)はⅠを示したものである。県内の地域区分である、阿賀北、高田平野、糸魚川地域は古代が多く、信濃川地域は中世が多い。(図17-4)はⅡ類を示したもので、古代は分散するのに対し、中世は島崎川流域(図17-4地点a)より西側にしか分布しない。

ⅠとⅡで顕著な違いが見えたのが信濃川流域の分布である(図17-3, 4地点b)。Ⅰは信濃川下流の河口付近より南側にある信濃川と中之口川の間の後背湿地に多いが、Ⅱは信濃川下流の河口付近に多い。分布の変化は信濃川流域だけで見られる傾向である。信濃川流域で特徴的な項目をもう一つ提示したい。(図16)は同一遺跡内から2点以上の火鑿板がある場合の、類の一致・不一致を示したグラフである。出土遺跡44遺跡中、15遺跡で複数の火鑿板が出土しており、信濃川流域は遺跡内での類の一致率が高い傾向がある。

以上のことから、火鑿板は地域の視点でも使い分けの検討ができる可能性が分かった。

D：発火具と遺跡の性格

最後に、遺跡の性格の視点から考察する。着目する遺跡の性格は2点ある。それは第1項で提示した先行研究(中村2005)において、多量の発火具が出土した遺跡として取り上げられていた兵庫県岸狭遺跡と砂入遺跡の性格である。前者は「多量の律令祭祀具の出土」、そして後者は「律令祭祀具の出土」と併せて、筆者が参照した報告書で評価されていた「官衙関連」である。

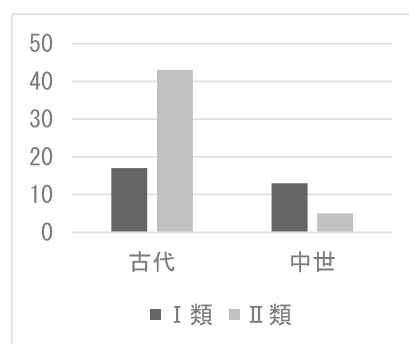


図15 時代別「類」の該当数

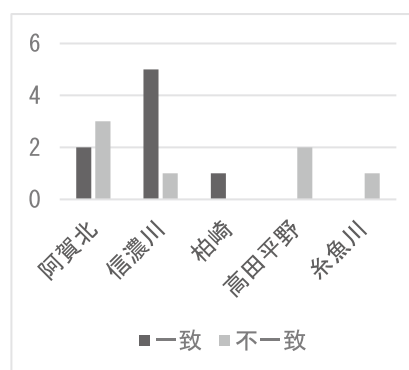


図16 同一遺跡内での「類」の一致

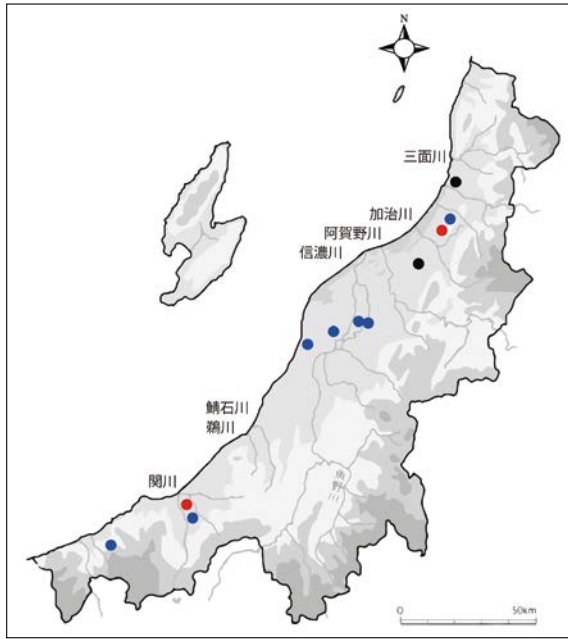


図17-1 P・I-2連

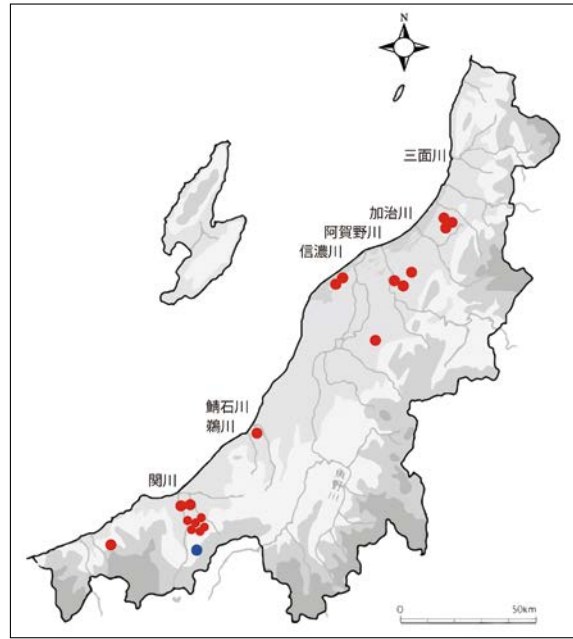


図17-2 S・II-1連

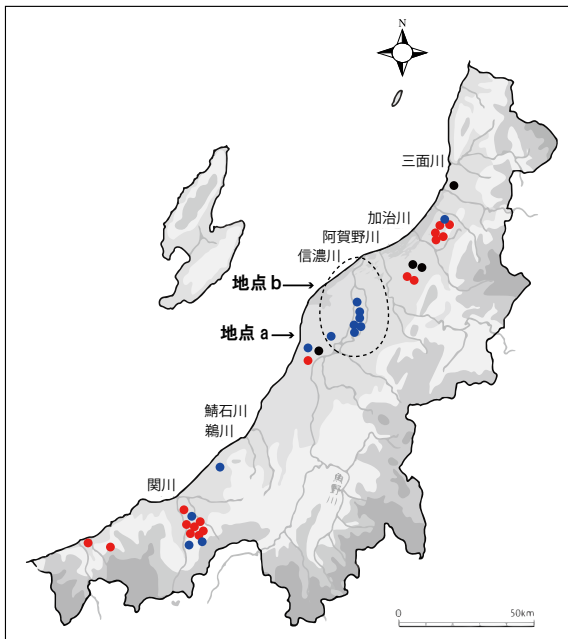


図17-3 I

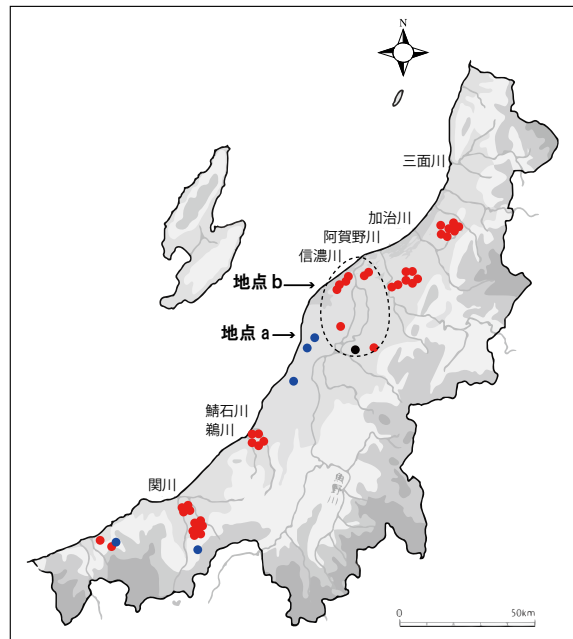


図17-4 II

図17 類・類の時期別分布図
 凡例：赤…古代、青…中世、黒…その他時代がはっきりしないもの

本項では先行研究をあらためて提示したあと、新潟県内ではどのような性格の遺跡からの出土が見られるのか、簡単にまとめる。

まず、発火具の出土遺跡の性格についての論考を再提示する。兵庫県内の発火具を集成した中村弘は、出土発火具の大半が律令祭祀が行われた袴狭遺跡・砂入遺跡（古代）の遺跡出土であると明らかにした（中村2005）。報告書を参照すると、これら2つの遺跡の評価について次のことが言われている。袴狭遺跡は「但馬国府、及び国府所在郡としての出石郡衛の所在地であり、国府移転後も出石郡衛はここに置かれていた」と考えられ、官衛の中核ではないものの周辺地域にあった可能性が指摘されている（中村2000）。砂入遺跡は袴狭遺跡と並び多量の木製祭祀具が出土したことが報告され「中央で体系化された大祓をほぼ忠実に模倣したといえる」と評価されている（藤田1997）。この2遺跡はそれぞれ、「祭祀関連具の出土」「官衛関連」の性格を持つことが分かる。

次に、火鑽板が出土している新潟県内の遺跡の性格をまとめる。

古代の火鑽板出土遺跡は22遺跡ある。そのうち『新潟県の考古学Ⅲ』（田中2019）で官衛関連遺跡と評価されているのは8遺跡（蔵ノ坪、曾根Ⅰ・Ⅱ、発久、的場、緒立C、八幡林、箕輪、延命寺）である。このほか、官衛関連遺跡に準ずるような遺跡と評価された六反田南遺跡、有力者の存在が示唆された山岸遺跡がある。そして斎串、人形、馬形等木製祭祀具が1点でも出土しているという視点でみた場合、22遺跡のうちほぼ全てが該当する。次に中世の火鑽板出土遺跡は12遺跡ある。そのうち上記と同様の視点で祭祀・儀式・宗教関連具の出土をみた場合、ほぼ全てが該当する。

以上のことから、新潟県内でも古代・中世ともに木製発火具は祭祀関連遺物と出土する場合が多いこと、古代は官衛関連遺跡に該当する遺跡が見られることが分かった。発火具は遺跡の性格からも検討することができ、これらが火鑽板の類とどのように結びつくのか今後検討したい。

5 まとめ・課題

本稿では木製発火具の寸法、形、分類、傾向を概観し、次のことが分かった。

まず、火鑽板の厚み・幅、火鑽杵の径の寸法、樹種の類似性から、発火具の製作は発火に適した材を選択していたことが考えられる。板の幅は4.5cmまでのものが多く、板の形は、板状（3～4.5cm）より棒状（3cm以下）の火鑽板の方が臼の数が少ないため、板材を選択する際にある程度の発火回数を想定していた可能性がある。ただし板の厚みは1～2cm程度が多く、復元実験で発火効率の良いとされていた1.3cm（高嶋1985）とは若干異なる数値であった。

次に、火鑽板の記号化と分類を行い、出土地点・時代・地域ごとに傾向の考察を行った。出土位置からは、井戸・溝出土の中世の火鑽板に注目した。火鑽臼の数の多・少を位置付けた「類2（Ⅰ・Ⅱ）」に着目したとき、井戸からは臼の多い板が、溝からは臼の少ない板が出土しており傾向がみえた。また、ひとつの類のなかで時代によって出土地点が異なる例がみられることから、同じ形でも時代によって火鑽板の使い方が異なる可能性が考えられる。

地域に視点を広げると、時代・類で異なる傾向が得られた。分類結果のうち、該当数が多かったP・Ⅰ-2連11点（中世6点）、S・Ⅱ-1連20点（古代19点）を時代別に地図上で検討した。P・Ⅰ-2連の中世は信濃川流域に集中するが、S・Ⅱ-1連の古代は各地に分散する。時代による分布の違いは「類2（Ⅰ・Ⅱ）」の視点でも顕著である。例えば出土点数は、Ⅰは35点（古代17点、中世13点、その他5点）、Ⅱは48点（古代43点、中世5点）で、Ⅰは古代中世が半数ずつに対しⅡは古代が優勢である。また、信濃

川流域は時代によって分布が異なり、Ⅰは中世が信濃川下流の河口付近より南側の信濃川と中之口川の間の後背湿地に多く、Ⅱは古代が信濃川下流の河口付近に多い。このことから、火鑽板は地域の視点でも使い方の検討ができる可能性が考えられる。

最後に、遺跡の性格から検討を行った。先行研究（中村2005）で提示されていた多量に発火具が出土した兵庫県袴狭遺跡、砂入遺跡の「律令祭祀具の出土」「官衙関連」という性格に着目し、新潟県内でも同様の傾向が見られるかを簡単にまとめた。その結果、古代では官衙関連遺跡と評価されている遺跡が8遺跡（蔵ノ坪、曾根Ⅰ・Ⅱ、発久、的場、緒立C、八幡林、箕輪Ⅱ、延命寺）あり、他にも有力者の存在が考えられている遺跡が多数みられた。また、木製祭祀具の出土という視点からみると、古代・中世ともに大半の遺跡が該当した。このことから、新潟県内でも兵庫県の出土発火具と同様の傾向が考えられる。

一方で、本稿では明確な発火具の使い分けを考えるとできず、多くの課題を残した。

まず、出土地点の検討では、井戸や溝での使い分けを考えたが、その出土地点が遺跡内でどのような位置付けにあるのか検討を行わなかった。例えば出土傾向が分からなかった土坑や自然流路も、遺跡内の位置付けを検討することで傾向が分かる可能性がある。

次に、地域での検討では、「類2（Ⅰ・Ⅱ）」が時代別に出土数が異なること、分布の傾向が信濃川流域では時代で変化することが分かった。しかし、この傾向は発火具の使い方ではなく、同時期の遺跡分布状況とリンクする可能性もある。分布結果が当時の状況とどのように結びつくのか検討が必要である。

そして、遺跡の性格についてである。本稿では、県内で火鑽板が出土した遺跡のなかに官衙関連遺跡があること、大半で木製祭祀具の出土が見られることを指摘した。しかし、発火具と祭祀をすぐさま結びつけることは時期尚早である。例えば県内の木製祭祀具の分布の検討や、遺跡内での出土地点、発火具の相伴遺物などの検討を行う必要がある。

最後に、木製品という遺物の特性についての考慮である。県内では木製品が遺存しやすい沖積地で見つかったが、その他の地域でも単純に発見されなかった可能性もある。また、報告されている遺物は遺存状態から発火具と判断できたものである。その他に発火具が存在しないとも言い切れない。

本稿では以上のような課題を残した。本稿で得られた結果が発火具の形とどのように結びつくのか、そのためには多方面での検討が必要と考える。資料の把握、実見等もふくめ次稿検討していきたい。

おわりに

冒頭で述べたように、木製発火具は身近な道具であったと筆者は考える。本稿で集成した木製発火具が多様な形態をしていたのも、その表れのように感じられる。本稿では入り口程度の踏み込みだったが、さらに検討を進め、古代人の暮らしを覗くひとつの手がかりになれば良い。

引用参考文献

- 荒川隆史ほか2004「5 木製品」『新潟県埋蔵文化財調査報告書133集 青田遺跡』
伊東隆夫・山田昌久編2012『木の考古学 出土木製品用材データベース』星海社
内田ハチ編1989「百白の図（異文一） 陸奥國蝦夷洲の火鑽の圖」『菅江真澄民俗図絵 下巻』岩崎美術社 492頁
春日真実2012「Ⅶまとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第228集 山岸遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 175頁
工藤員功1983「火をおこす」『琉球諸島の民具』未来社 315頁
鈴木俊成1994「Ⅶまとめ 4. 祭祀遺構と遺物」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 219-227頁

- 高嶋幸男・岩城正夫1981『古代日本の発火技術—その自然科学的研究— Experimental Study on Fire-Making Techniques of Ancient Japan』群洋社 10頁
- 高嶋幸男1985a『火の道具』柏書房
- 高嶋幸男1985b「第2章 発火技術の復元」『火の道具』柏書房 27-33頁
- 高嶋幸男1985c「第3章 日本の摩擦式発火法をどう考えるか」『火の道具』柏書房 73頁
- 田中靖2019「第3項 官衙」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会 530-533頁
- 中川晃子2016「Ⅶまとめ 3. 総括」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第261集 六反田南遺跡Ⅴ』新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 134頁
- 中村2000『兵庫県文化財調査報告書 第197冊 袴狭遺跡 [本文編]』兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所195頁
- 中村弘2005「兵庫県出土の木製発火具について」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第4号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所67-78頁
- 新山雅広2003「Ⅳ章 自然科学分析 2 仲田遺跡から出土した大型植物化石」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第128集 仲田遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団41-42頁
- 文化庁文化財保護部1981『無形の民俗文化財 記録 27集 火鑽習俗 長野県・愛知県・島根県』
- 藤田1997「おわりに」『兵庫県文化財調査報告書 第161冊 砂入遺跡 [本文編]』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所79-90頁
- 松浦武一郎1860『久摺日誌』国立国会図書館デジタルコレクション<https://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/2534609/4> 5コマ
- 本間克成2003「Ⅶまとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第126集 浦廻遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団57-58頁
- 山田仁史2006「発火法と火の起源神話」『東北宗教学』2巻 197-199頁
- 山崎忠良2008「Ⅶまとめ 8 総括」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第201集 延命寺遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 162頁

報告書・文献No

- 1 長岡市教育委員会 2007『一般国道116号和島バイパス建設に伴う発掘調査報告書 山田郷内遺跡』
- 2 和島村教育委員会 1994『和島村埋蔵文化財調査報告書第3集 八幡林遺跡』
- 3 新潟市教育委員会 1993『新潟市の場遺跡 的場土地地区画整理事業用地内発掘調査報告書』
- 4 黒埼町教育委員会 1994『緒立C遺跡発掘調査報告書』
- 5 豊浦町教育委員会 1982『豊浦町文化財報告(四) 曾根遺跡Ⅱ』
- 6 豊浦町教育委員会 1997『豊浦町文化財報告(六) 曾根遺跡Ⅲ』
- 7 豊浦町教育委員会 1981『豊浦町文化財報告(三) 曾根遺跡Ⅰ』
- 8 吉田町教育委員会・山武考古学研究所 2000『吉田町文化財調査報告書 第5集 江添C遺跡』
- 9 燕市教育委員会・加藤建設株式会社 2008『燕市文化財発掘調査報告書 第3集 燕市北小脇遺跡 天神堂遺跡 館屋敷遺跡 小諏訪前B遺跡 大橋遺跡 (図版編)』
- 10 燕市教育委員会・加藤建設株式会社 2008『燕市文化財発掘調査報告書 第3集 燕市北小脇遺跡 天神堂遺跡 館屋敷遺跡 小諏訪前B遺跡 大橋遺跡 (本文編)』
- 11 中条町教育委員会 1999『中条町埋蔵文化財報告書 第22集 船戸桜田遺跡2次』
- 12 中条町教育委員会 2002『中条町埋蔵文化財報告書 第25集 船戸桜田遺跡4次・5次 船戸川崎遺跡6次』
- 13 白根市教育委員会 1984『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書 庄瀬地区 興野遺跡 若宮様遺跡 馬場屋敷遺跡 馬場屋敷下層遺跡 馬場屋敷の塚』
- 14 三条市市民部生涯学習課 2019『三条市文化財調査報告書 石田遺跡Ⅱ』
- 15 中条町教育委員会 2002『中条町埋蔵文化財報告書 第24集 船戸川崎遺跡4次調査』
- 16 中条町教育委員会 2004『中条町埋蔵文化財報告書 第31集 屋敷遺跡2次』
- 17 中条町教育委員会 2001『中条町文化財報告書 第21集 下町・坊城遺跡Ⅴ (C地点遺物編・写真図版編)』
- 18 中条町教育委員会 2001『中条町文化財報告書 第21集 下町・坊城遺跡Ⅴ (C地点遺構編・総論編—奥山荘政所条)』
- 19 笹神村教育委員会 2002『笹神村文化財調査報告13 腰廻遺跡』
- 20 笹神村教育委員会 1991『笹神村文化財報告書8 埋蔵文化財調査報告書 発久遺跡』
- 21 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2004『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第133集 青田遺跡』
- 22 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1994『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 一之口遺跡 東地区』
- 23 新潟県教育委員会 1984『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第35集 今池遺跡 下新町遺跡 子安遺跡』
- 24 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1999『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第91集 牛道遺跡』
- 25 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2010『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第208集 立野大谷 製鉄遺跡 姥ヶ入製鉄遺跡 姥ヶ入南遺跡』

- 26 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第165集 馬見坂遺跡 正尺A遺跡 正尺C遺跡』
- 27 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第150集 海道遺跡 大塚遺跡』
- 28 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2003『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第126集 浦廻遺跡』
- 29 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2008『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第201集 延命寺遺跡』
- 30 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2014『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第249集 大武遺跡Ⅱ(古代～縄文時代編)』
- 31 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2007『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第176集 窪田遺跡Ⅰ』
- 32 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2002『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第115集 蔵ノ坪遺跡』33、新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2012『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第238集 小坂居付遺跡』
- 34 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2001『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第103集 新保遺跡』
- 35 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第157集 住吉遺跡』
- 36 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2011『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第207集 姫御前遺跡Ⅱ 竹花遺跡Ⅰ』
- 37 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2009『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第205集 田伏山崎遺跡』
- 38 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2008『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第189集 寺前遺跡』
- 39 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2003『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第128集 仲田遺跡』
- 40 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第164集 野中土手付遺跡 砂山中道下遺跡』
- 41 新潟県教育委員会 1987『新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集 三島郡出雲崎町番場遺跡』
- 42 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第254集 箕輪遺跡Ⅱ』
- 43 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2012『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第228集 山岸遺跡』
- 44 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2016『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第261集 六反田南遺跡Ⅴ』
- 45 加茂市教育委員会 社会教育課 2001『加茂市文化財調査報告(13) 鬼倉遺跡発掘調査報告書』
- 46 新潟市文化スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財センター 2009『駒首潟遺跡 第3・4次調査』

図版

図1 筆者撮影

図2・1 筆者作成、2・荒川ほか2004を参考に筆者作成、3・No14馬見坂遺跡、No51馬場屋敷下層遺跡※報告書内で発火具か疑問視もされている資料である。4・筆者撮影。出土品(上)は延命寺遺跡、(下)は一之口遺跡。

図3 筆者撮影。(上段)一之口、延命寺、山岸、(下段)一之口、延命寺、箕輪、(右)山岸

図10各報告書の実測図をもとに筆者作成。延命寺遺跡107, 105, 106, 94、箕輪遺跡69, 72、馬場屋敷下層49、六反田南Ⅴ83、浦廻46、山岸132

表1～3、図4～9、図11～17筆者作成

表4 報告書を参照し筆者が作成したもの。「*」印は筆者が追記したもの、「※対象外資料」は筆者が発火具の位置付けに基づき対象外としたもの。本文内で記載したとおり、今後変更の可能性があるため記載したままとした。

図18～21各報告書の実測図をもとに筆者作成。遺跡名は各図版の下部に示した。

表4 発火具一覧表(1) ※筆者追記：* ※対象外資料は筆者が空白とした

No	報告No	種別	樹種	木取	時代	遺跡	地域	法量 (cm)		出土位置	遺構区分
								長さ	幅		
1	50-241	板	スギ	板目	8C後葉～9C後葉	蔵ノ坪	胎内市	14.5	2.5	1.8 23112	包含層
2	41-88	※対象外資料				蔵ノ坪	胎内市			SD221	掘立柱建物
3	50-242	杵	スギ	削出*	8C後葉～9C後葉	蔵ノ坪	胎内市	21.4	1.4	19125	包含層
4	48-638	板			8C～10C初頭	船戸桜田2次	胎内市	20.9	3	1.8 76 (H4)	川跡
5	38-138	板			8C～10C初頭	船戸川崎6次	胎内市	31.2	1.8	川	川跡
6	38-139	板			8C～10C初頭	船戸川崎6次	胎内市	30.8	1.5	川	川跡
7	24-44	板			8C～10C初頭	船戸桜田5次	胎内市			川4・29G	川跡
8	43-455	板			8C	屋敷2次	胎内市	18.3	2.3	21 11	川跡
9	70-580	板			9C第2～3	船戸川崎4次	胎内市	29.9	1.8	2 川2	川跡
10	71-1893	板			中世	下町・坊城V	胎内市	26	4	1.8 川1 (1 G15)	川跡
11	313-84	杵	スギ	削出	9C末葉～中葉	青田	新発田市	26.8	1.5	1.4 3 B20・VI層	遺構外
12	313-85	杵	スギ	削出	9C末葉～中葉	青田	新発田市	29.9	1.5	1.2 23B11・?層	遺構外
13	313-86	杵	スギ	削出	9C末葉～中葉	青田	新発田市	23.7	1.4	1.3 28F6・VI層	遺構外
14	12-106	※対象外資料				馬見坂	新発田市			自然流路23H区 2aトレンチ	自然流路
15	83-775	杵		削出*	中世	住吉	新発田市	32.9	1.4	1.3 SK 5	
16	32-145	板	スギ	板目	8C後半～9C後半	野中土手付	新発田市	13.2	3.1	21 12A25	遺構外
17	30-103	板	スギ	板目	8C後半～9C後半	野中土手付	新発田市	22.4	3.4	25 SD24-12A25	自然流路
18	30-85	板	スギ	柱目	8C後半～9C後半	野中土手付	新発田市	27.8	2.7	1.6 SD24	自然流路
19	29-67	板	スギ	柱目	8C後半～9C後半	野中土手付	新発田市	28	1.4	2.7 SD24-13B5	自然流路
20	記載外	※対象外資料				野中土手付	新発田市				
21	10-15	板			9C	曾根II	新発田市			記載なし	
22	10-16	杵			9C	曾根II	新発田市				
23	23-6	板			9C	曾根	新発田市	15.4	1	1.4	
24	52-49	杵	スギ	削出	9C	曾根III	新発田市	11.6	2.6	1 D-5	
25	52-50	板	スギ		9C	曾根III	新発田市			E-4	
26	63-343	板		流れ柱目*	中～近世	窪田	村上市	13.6	3.5	2.3 SR1・1層・8D20	河川跡
27	227-607	板	スギ	*	古墳～古代	腰廻	阿賀野市	22.5	3.4	2 B-45	遺構外
28	227-608	板	スギ	*	古墳～古代	腰廻	阿賀野市	15.7	2.8	21 C-44	遺構外
29	63-525	板	スギ		8C～9C	発久	阿賀野市	21	2	2 下層・B3-4	
30	63-526	板	スギ		8C～9C	発久	阿賀野市	28	3	1.3 下層・A3-3	
31	63-527	板	スギ		8C～9C	発久	阿賀野市	27	3	1.5 下層・B4-3	
32	63-528	板	スギ	柱目*	8C～9C	発久	阿賀野市	8	1.5	1 下層・1A-1号	
33	63-529	板	スギ	柱目*	8C～9C	発久	阿賀野市	36	2.5	2.5 下層・A4-4	
34	63-530	板	スギ	柱目*	8C～9C	発久	阿賀野市	19.2	2.5	1.6 下層・B1-4	
35	63-531	板	スギ	柱目*	8C～9C	発久	阿賀野市	12.9	2	1.5 下層・5B-8号	
36	564	板	スギ		8C～9C	発久	阿賀野市	1.8	3	1.1 下層・A1-3	
37	146-66	板	ヒノキ科	板目		駒首湯	新潟市江南区	30.8	3.4	1.9 旧河川・14J9	河川跡
38	146-67	板	ヒノキ科	流れ柱目*	9C	駒首湯	新潟市江南区	50.1	3.7	1.8 旧河川・15N21	河川跡
39	67-42	杵	スギ	削出*	9C第4四半～10C初頭	牛道	新潟市江南区	38.8		SE184	井戸
40	85-238	板		板目*	8世紀前半～10世紀前半	的場	新潟市西区	34.3	4	2.6 4 B18方	廃棄層
41	85-239	板		板目*	8C前半～10C前半	的場	新潟市西区	22.6	3.2	1.6 4 B23方	廃棄層
42	77	板		流れ柱目*	9C第2四半?	緒立C	新潟市西区	27.5	2.05	1.8 D4	包含層・溝
43	78	板		柱目*	9C第2四半?	緒立C	新潟市西区	27.7	2.3	2 A5-9	包含層
44	79	杵		削出*	9C第2四半?	緒立C	新潟市西区	14.8	1.15	A5-20	祭祀場・木製品集中地区
45	80	杵		削出*	9C第2四半?	緒立C	新潟市西区	30.3	1.25	E8-20	包含層
46	16-64	板	スギ	流れ柱目*	12C～14C	浦瀬	新潟市南区	10.2	1.34	2 4 B10VII	遺構外
47	68-51	板	スギ	柱目	13C末～14C代	小坂居付	新潟市南区	15.7	1.6	29 SR1・1層	河川跡
48	70-82	板	スギ	流れ柱目*	13C末～14C代	小坂居付	新潟市南区	22.1	4.5	1.7 SK335_S R1-2層	土坑

表4 発火具一覧表(2) ※筆者追記：* ※対象外資料は筆者が空白とした

No	報告No	種別	樹種	木取	時代	遺跡	地域	法量 (cm)		出土位置		遺構区分
								長さ	幅	厚さ	遺構	
49	19-1	板		榎目*	15~16C中心	馬場屋敷下層	新潟市南区	21.3	33		下層・詳細不明	不明
50	19-2	板		流孔榎目*	15~16C中心	馬場屋敷下層	新潟市南区	18.3	1.5		下層・詳細不明	不明
51	19-3					馬場屋敷下層	新潟市南区				下層・詳細不明	不明
52	19-4	板		榎目*	15~16C中心	馬場屋敷下層	新潟市南区	15.2	36		下層・詳細不明	不明
53	75-604	板	針葉樹	板目*	9C	鬼倉	加茂市	20.9	23		河川①・C4-⑤	河川跡
54	75-602	杵	スギ	削出*	9C	鬼倉	加茂市	17.8	1.5		河川①・C-3	河川跡
55	75-603	杵	スギ	削出*	9C	鬼倉	加茂市	6	0.9		河川①・C4-⑤	河川跡
56	62-315	板		榎目*	古代~中世	石田II	三条市	23.3	21		19 4-3区・NR4002・No6329・78層	田河遺
57	105-126	板		流孔榎目*		江添C	燕市	15.75	3.6		77号溝	溝
58	553-92	板		榎目*	中世	北小脇	燕市	22	3.1		H区SE5 No141	井戸
59	118-707					寺前	出雲崎町				ゴミ捨て場	廃棄場
60	91-140	板	スギ	榎目	中世	寺前	出雲崎町	32.3	3.6		2 SD311, 10C20	溝
61	29-22	板		板目*		番場	出雲崎町	17.1	2.6		1.2 A・B2区 B2坑付近	
62	51-280	板	針葉樹	榎目	時期不明	姥ヶ入製鉄	長岡市	11.7	1.6		1.2 3, 4, FG・層位不明	沢
63	45-514	板		板目	11C後半~13C	山田郷内	長岡市	17.8	3		1.2 SX30	溝・祭祀信仰エリア?
64	45-515	板		板目	11C後半~13C	山田郷内	長岡市	11.8	2.2		1.5 SX30	溝・祭祀信仰エリア?
65	19-224	板		板目*	9C前半	八幡林	長岡市	13.5	2.6		1.6 I地区・11T III層	埋め立て層?
66	19-225	杵		削出*	9C前半	八幡林	長岡市	70.7	0.8		I地区・11T III層	埋め立て層?
67	100-441	杵	針葉樹	削出*	9C~10C	箕輪II	柏崎市	31	1.5		1.5 流路14下層	自然流路
68	76-166	板	針葉樹	板目*	9C~10C	箕輪II	柏崎市	21.1	2.8		1.3 D区・H7b14VI	自然流路
69	81-226	板	針葉樹	板目*	9C~10C	箕輪II	柏崎市	21.8	2.3		1.25 流路14・上層	自然流路
70	95-365	板	針葉樹	榎目*	9C~10C	箕輪II	柏崎市	22.8	2.7		1.8 流路14・下層	自然流路
71	95-364	板	針葉樹	榎目	9C~10C	箕輪II	柏崎市	35.8	2.9		1.5 流路14・下層	自然流路
72	74-138	板	スギ	流孔榎目*	9C~10C	箕輪II	柏崎市	44.3	3.6		2.35 流路2.5 d	自然流路
73	95-366	杵	スギ	削出	9C~10C	箕輪II	柏崎市	23	1.25		1.25 流路14・下層	自然流路
74	<欠番>											
75	85-266	板	スギ	板目	9C~10C	箕輪II	柏崎市	9.7	1.7		1.8 流路14・中層	自然流路
76	80-328	板	スギ	板目*	11C前半	一之口	上越市	10.9	2		1.8 SD1'	溝
77	68-64					一之口	上越市				SD603	溝
78	74-187	杵	スギ	削出*	11C前半	一之口	上越市	35.0	1.5		SD1'	溝
79	80-319	杵	スギ	削出*	11C前半	一之口	上越市	39.8	1.6		SD1'	溝
80	80-320	杵	スギ	削出*	11C前半	一之口	上越市	18.9	1.3		SD1'	溝
81	80-321	杵	スギ	削出*	11C前半	一之口	上越市	17.9	1.2		SD1'	溝
82	80-325	板	スギ	板目*	11C前半	一之口	上越市	14.8	2.5		1.6 SD1'	溝
83	80-324	板	スギ	板目*	11C前半	一之口	上越市	16.2	3.1		2.0 SD1'	溝
84	80-327	板	スギ	板目*	11C前半	一之口	上越市	28.4	2.2		1.8 SD1'	溝
85	80-322	杵	スギ	削出*	11C前半	一之口	上越市	34.1	1.5		SD1'	溝
86	74-185	板	スギ	板目*	11C前半	一之口	上越市	34.9	2.4		1.7 SD1'	溝
87	80-323	杵	スギ	削出*	11C前半	一之口	上越市	36.0	1.3		SD1'	溝
88	80-326					一之口	上越市				SD1'	溝
89	83-362					一之口	上越市				SD1'	溝
90	88-453	杵	スギ	削出*	11C前半	一之口	上越市	30.2	1.0		SD1'	溝
91	54-17	板		板目*	中世	分池	上越市	7.0	2.5		SE508・B地区	井戸
92	86-771	板		榎目	8C	延命寺	上越市	6.5	1.8		1.5 SD1700	溝
93	86-770	板		榎目	8C	延命寺	上越市	11.8	2.1		1.5 SD1700	溝
94	86-769	板		榎目	8C	延命寺	上越市	14.3	3.1		SD1700	溝
95	77-641	板		流孔榎目*	8C	延命寺	上越市	15.6	6.3		2 SB002 (SD1361)	扉付欄柱建物
96	90-879	板		板目	8C	延命寺	上越市	16.4	2.9		2 SK1698	土坑

表4 発火具一覧表(3) ※筆者追記: * ※対象外資料は筆者が空白とした

No	報告No	種別	樹種	木取	時代	遺跡	地域	法量 (cm)		出土位置	遺構区分
								長さ	幅		
97	76-640	板		流れ柱目*	8C	延命寺	上越市	18.6	6	2 SB002 (SD1361)	廂付側柱建物
98	87-805	板		板目*	8C	延命寺	上越市	18.7	2.5	SD3460	溝
99	78-661	板		板目	8C	延命寺	上越市	24.2	2.7	SB007 (P1170)	側柱建物
100	96-991	板		板目	8C	延命寺	上越市	24.2	3	2 1E1 IX	遺構外
101	96-989	板		流れ柱目*	8C	延命寺	上越市	25.8	2.8	2 0 D 7 VII	遺構外
102	96-988	板		柱目	8C	延命寺	上越市	27.7	2.3	1.8 0 D 7 VII	遺構外
103	96-990	板		柱目	8C	延命寺	上越市	30.7	3.1	2 0 D 7 VII	遺構外
104	76-630	板		板目	6C	延命寺	上越市	33	3.8	29 SK3843	土坑
105	86-772	板		板目	8C	延命寺	上越市	42.5	2.4	21 SD1700	溝
106	85-748	板		板目	8C	延命寺	上越市	44.8	2.7	2 SD11	溝
107	75-627	板		板目	6C	延命寺	上越市	49.4	4.9	2 SI006	竪穴建物
108	76-628	杵		削出*	6C	延命寺	上越市	48	1.2	SI006	竪穴建物
109	76-631	杵		削出*	6C	延命寺	上越市	14.1	1.3	1.2 SK3843	土坑
110	78-662	杵		削出*	8C	延命寺	上越市	19.2	1.1	1.1 SB007 (SD1065)	側柱建物
111	78-663	杵		削出*	8C	延命寺	上越市	14.3	1	1.1 SB007 (SD1065)	側柱建物
112	87-806	杵		削出*	8C	延命寺	上越市	25.4	1.2	1.1 SD3460	溝
113	87-807	杵		削出*	8C	延命寺	上越市	18.9	1.3	1.4 SD3460	溝
114	90-880	杵		削出*	8C	延命寺	上越市	12.3	1.4	1.3 SK1698	土坑
115	91-881	杵		削出*	8C	延命寺	上越市	8.7	1	0.9 SK1698	土坑
116	90-882	杵		削出*	8C	延命寺	上越市	20.2	1.3	1.2 SK1698	土坑
117	93-949	杵	スギ	削出*	8C	延命寺	上越市	11.5	1.2	1 畑跡A (SD1086)	整地
118	76-10	板		削出*	中世	子安	上越市	20.1	3.2	1.3 SE58	井戸
119	<欠番>										
120	5-56	板	クリ	柱目	中世	新保	上越市	19.9	6.4	1.1 SE2021	素掘り井戸
121	5-55	板	スギ	板目	中世	新保	上越市	22.2	2.5	1.4 SE730	素掘り井戸
122	45-250	板	スギ	柱目	中世	仲田	上越市	15.9	1.5	1.3 SE265	井戸
123	17-14	※対象外資料				田井国分寺	上越市			5区	
124	125-314	板		柱目	中世	大武II	長岡市	8.1	1.9	1.9 SK95	
125	36-318	板	スギ	柱目*	中世	海道	上越市	18.9	1.6	1.2 SE490	井戸
126	37-327	杵	ヒノキ科	削出*	中世	海道	上越市	24.2	1.3	1.1 SE490	井戸
127	87-440	板	スギ	板目	中世(15~16C)	竹花I	糸魚川市	28.2	3.9	1 SX108・No32 II b	
128	29-27	板	スギ	柱目*	古代	田伏山崎	糸魚川市	18.9	3.9	32L17 VII層	自然流路
129	29-24	※対象外資料				田伏山崎	糸魚川市			SD1079・3層	自然流路
130	313-128	杵		削出*	9C	山岸	糸魚川市	13.6	1.5	1.2 SR3194・3層	
131	323-425	板		柱目	中世	山岸	糸魚川市	20.5	2.3	1.1 SD1226 1	溝
132	313-141	板	スギ	板目	10C	山岸	糸魚川市	28	2.9	2.5 SR3194・2b層	
133	320-322	杵		削出*	中世	山岸	糸魚川市	35.5	1	0.9 SR512・6層	旧河道
134	320-324	杵		削出*	中世	山岸	糸魚川市	35.8	1.2	0.9 SR512-6	旧河道
135	315-197	板	スギ	板目	10C	山岸	糸魚川市	35.5	4.1	2.6 SR3194・2層	旧河道
136	351-1022	杵		削出*	古代~中世	山岸	糸魚川市	24.8	1.4	1.2 10J8・IV層	溝?
137	351-1023	杵		削出*	古代~中世	山岸	糸魚川市	29.6	1.3	1.3 10I17・IV層	溝?
138	353-1098	杵	スギ	削出*	中世	山岸	糸魚川市	22.4	1.1	0.9 18P16・IIIc層	自然流路
139	133-968	板	スギ	柱目	6C前半~9C中	六反田V	糸魚川市	15.8	4.5	2.9 流路1・7層・40D 8	
140	52-524~7	※対象外資料				光明寺	村上市			SE 1 III層	
141	38-153	※対象外資料				光明寺	村上市			SK102地下層	
142	42-308	※対象外資料				光明寺	村上市			SE 1・6層	
143	53-550	※対象外資料				光明寺	村上市			SE 9・2・3層	

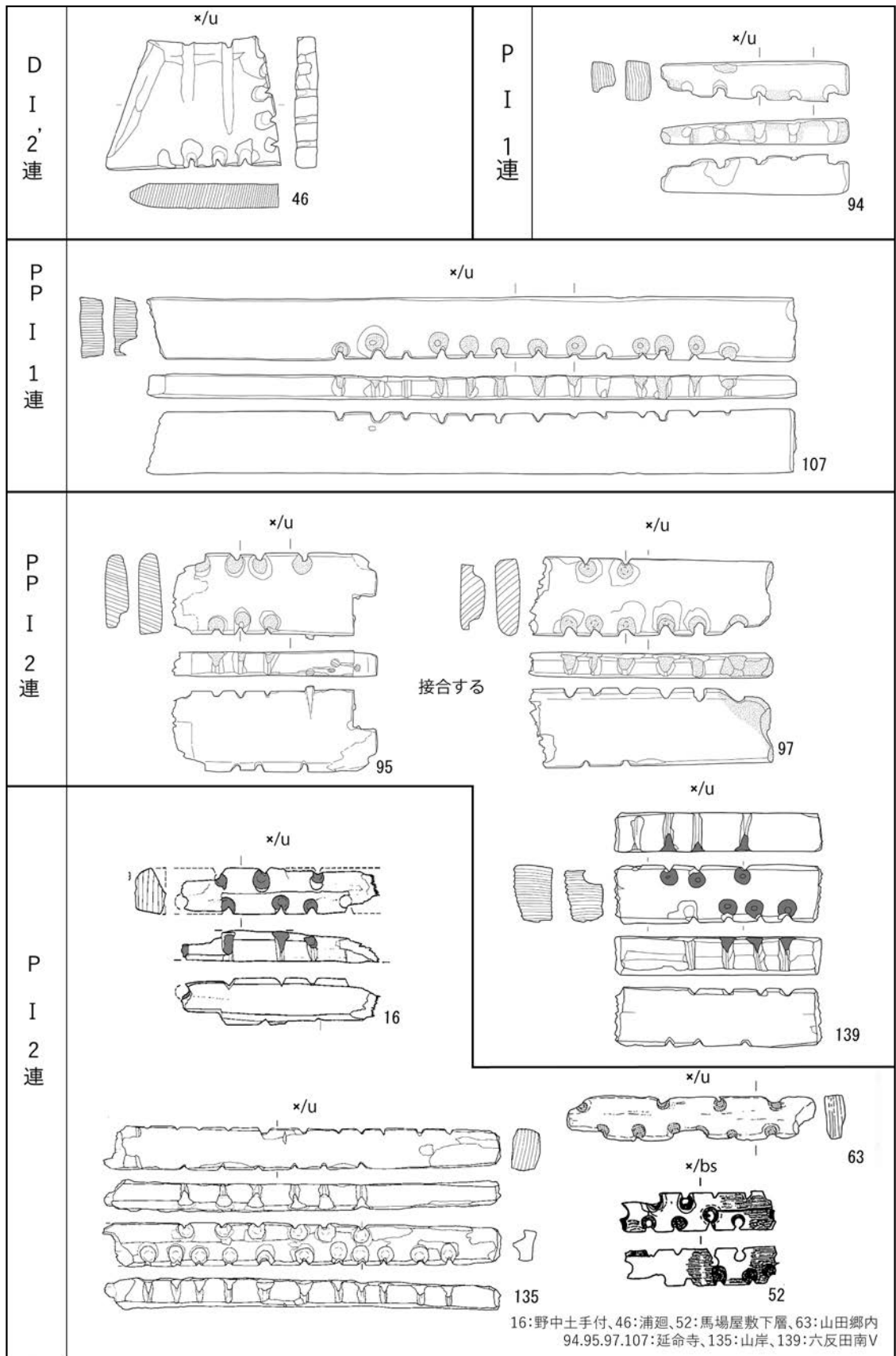


図18 分類結果 (1)

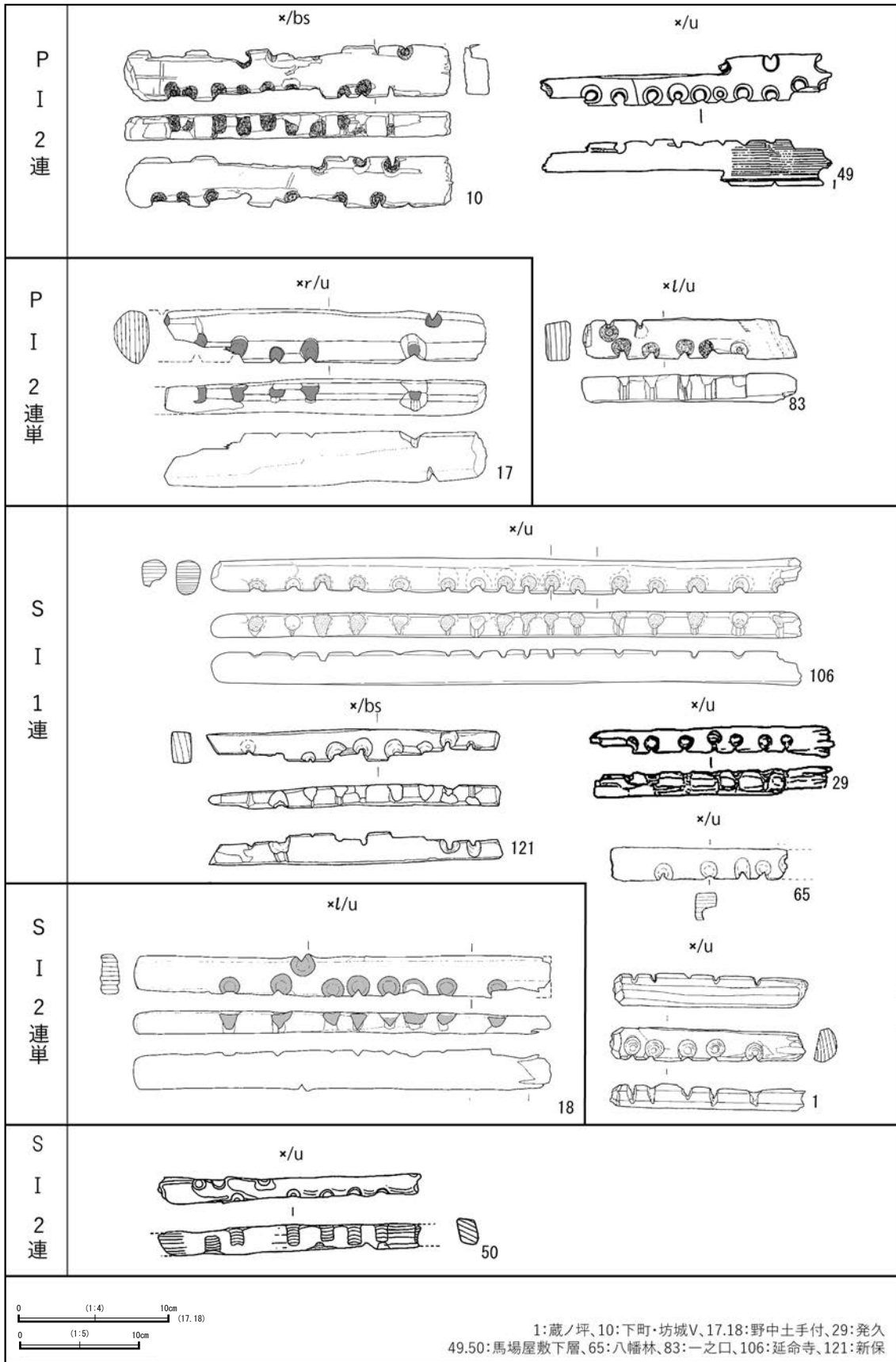


図19 分類結果 (2)

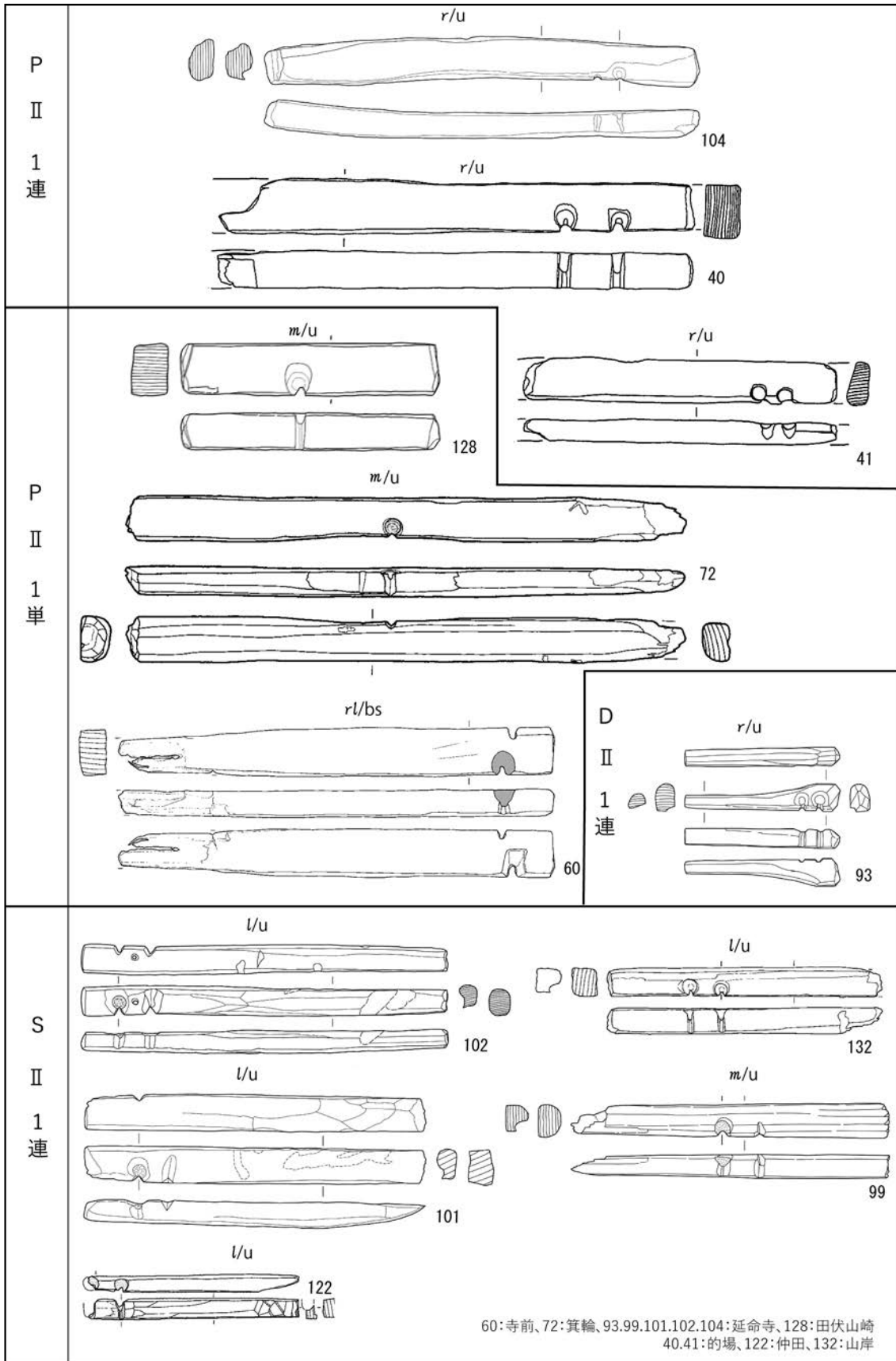


図20 分類結果 (3)

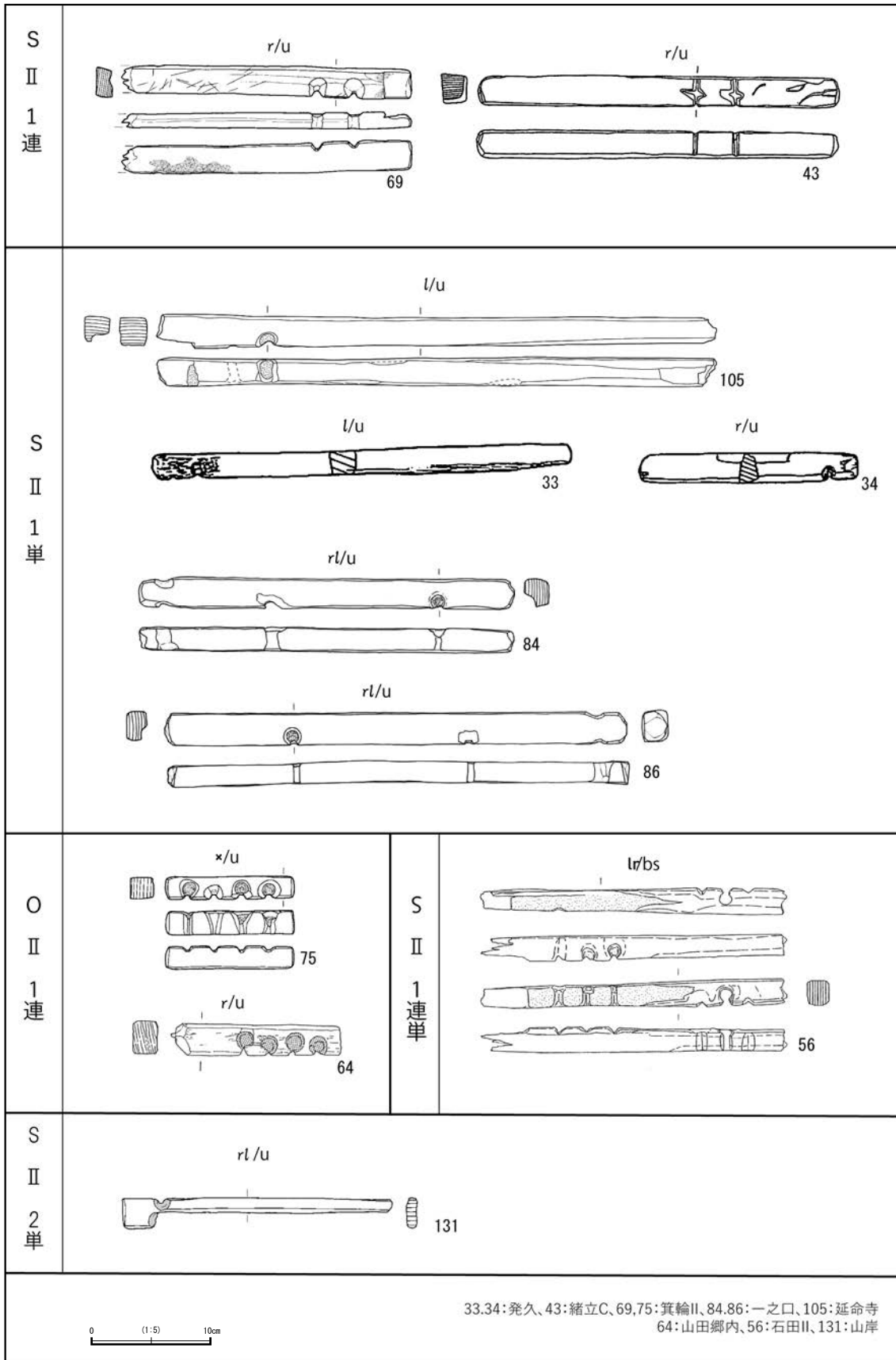


図21 分類結果 (4)

本書は研究目的での全文複写を許可します。

研 究 紀 要

第 13 号

令和 5 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地 1
電話 0250 (25) 3981
FAX 0250 (25) 3986
e-mail niigata@maibun.net

印刷・製本 株式会社ウイザップ
〒950-0963 新潟市中央区南出来島 2 丁目 1 番 25 号
電話 025 (285) 3311